

アジア女性基金公開フォーラムの記録

日韓学生のフォーラム 2004
メディアと体験と日韓関係

2004.8.23-24

国際連合大学

韓国+留学生+「在日」+日本の学生

主催
財団法人女性のためのアジア平和国民基金
(アジア女性基金)
後援
外務省

目次 contents

訪問インタビュー	13
準備会	59
チーム会議1	63
チーム会議2	74
公開フォーラム	85
学生の事後レポート	160
資料	193



日韓学生のフォーラム2004— メディアと体験と日韓関係

2004年

8月23日 訪問インタビュー

株・韓国広場、朝日新聞社、東亜日報東京支社

8月24日 チーム会議＋公開フォーラム

国際連合大学 エリザベス・ローズ会議場、コミッティールーム

THEME:

日韓（日朝）の事件・事態とその報道が、人々の「関係意識」「印象、評価」をつくる。他方、情報とメディアの多様化、人々の往来による「体験」が、関係意識を左右するようになってきた。このような「いま」を生き、これからの日韓（朝）関係をつくる日本、韓国、「在日」の学生が一堂に会し、政治・社会・文化・情報をめぐって、個人の実感的・体験的視点から過去を検証し未来に向けて対話する。

テーマ：

1 日韓関係とメディアの役割

報道と感情と世論…

「北朝鮮」、歴史・戦後処理、文化・スポーツ交流

2 「韓流」（韓国ブーム）異文化体験と日韓関係

論よりキムチ…？

キムチの定着、韓国ドラマ「冬のソナタ」ブームと今後

*お断り

発言者により「北朝鮮／北韓」、「朝鮮半島／韓半島」などと表記しました。

PROGRAM:

日韓／韓日学生のフォーラム 2004——メディアと体験と日韓関係

▽ 2004.8.23 MON.

訪問インタビュー

930～1130 韓国広場金根熙社長—論よりキムチ／韓国料理店
「高麗」(昼食)

1330～1530 朝日新聞社、東亜日報支社—メディアと日韓関係
／新館4F研修室

打ち合わせ ホテル内会議室 (ホテルサンルート東京・新宿)

▽ 8.24 TUE.

国際連合・UN大学

930～1100 「チーム会議」／E.R.ROOM, COMMITTEE ROOM

1100～1130 合同会議／E.R.ROOM

司会候補／「公開フォーラム」報告者
(昼食)

1330～1730 公開・日韓／韓日学生のフォーラム

あいさつ——伊勢桃代 アジア女性基金専務理事・事務局長
紹介——自己紹介

司会者——韓国・日本・「在日」学生

テーマ1——日韓関係とメディアの役割

メディアと感情と世論

会場意見

テーマ2——異文化体験と日韓関係

「冬ソナ」ブーム、キムチ定着と今後

会場意見

パネル学生

まとめ——李元雄教授

PARTICIPATING UNIVERSITY:

パネル参加大学、学生（大学院生含む）：

韓国—

関東大学校 KWANDONG UNIVERSITY

西江大学校 SOGANG UNIVERSITY

慶熙大学校 KYUNGHEE UNIVERSITY

梨花女子大学校 EWHA WOMEN'S UNIVERSITY

韓国外国語大学校 HANKUK UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

留学生（韓国、中国朝鮮族）—

東京大学 TOKYO UNIVERSITY

十文字学園女子大学 JUMONJI UNIVERSITY

「在日」コリアン—

テンプル大学ジャパン TEMPLE UNIVERSITY JAPAN

早稲田大学 WASEDA UNIVERSITY

慶応義塾大学 KEIO UNIVERSITY

明治大学 MEIJI UNIVERSITY

日本—

中央大学 CHUO UNIVERSITY

十文字学園女子大学 JUMONJI UNIVERSITY

明治大学 MEIJI UNIVERSITY

お茶の水女子大学 OCHANOMIZU UNIVERSITY

日本体育大学 NIPPON SPORT SCIENCE UNIVERSITY

PROFILE OF UNIVERSITY :

関東大学校 (Kwandong University)

1955年、江原道江陵市に創立されたプロテスタント系の総合大学。8学部を有する。

西江大学校 (Sogang University)

カトリックの修道会の一つイエズス会 (Society of Jesus) によって1960年ソウル市に創立。6学部を有する。上智大学とは姉妹校。

梨花女子大学校 (Ewha Women's University)

1887年、韓国最初の女性教育機関として現在のソウル市に創立された、文系、理系を合わせて15学部を持つプロテスタントミッション系総合大学。

慶熙大学校 (Kyunghee University)

1946年創立の25学部からなる総合大学。ソウル市と京畿道水原市にキャンパスを持つ。

韓国外国語大学校 (Hankuk University of Foreign Studies)

1952年創立で、語学系を中心とした14学部を持つ。キャンパスはソウル市内と京畿道龍仁市の2か所にある。

*

中央大学 Chuo University

明治大学 Meiji University

十文字学園女子大学 Jumonji University

お茶の水女子大学 Ochanomizu University

Temple University Japan

日本体育大学 Nippon Sport Science University

東京大学 Tokyo University

早稲田大学 Waseda University

*

在日同胞の生活を考える会 (同団体HPより)

日本社会で在日として生きていこうと決意した同胞が、より豊かでより幸せに人生を送っていけるような環境をつくっていく。在日が日本社会で抱える様々な悩み—同胞結婚・就職・老後—の解決を目指す。大きな政治よりも身近な生活を重視し、本国の対立的状況の影響を避け、あらゆる立場の同胞が和合し協力しあえるコミュニティの形成を目指す。約1000人の韓国籍・朝鮮籍・日本籍・中国籍・アメリカ籍同胞が会員。

COMMENTATOR:

李元雄	イー・ウォヌン	(韓国) 関東大学校教授
LEE, WON-WOONG		
小倉紀藏		東海大学助教授
OGURA, KIZO		
橋本ヒロ子		十文字学園女子大学教授
HASHIMOTO, HIROKO		
伊勢桃代		アジア女性基金専務理事・事務局長
ISE, MOMOYO		

PANERIST:

◇ 韓国 (大韓民國) M : 男性

1	ユン・ホヨン 尹豪英	関東大学校観光経営学部
	YOUNG, HO-YEONG	1985生
2	イー・ヘリム 李慧林	関東大学校観光経営学部
	LEE, HYE-LIM	1986生
3	イー・グァンス 李光洙	関東大学校観光経営学部
	LEE, KWANG-SOO	1986生 M
4	イー・ジウォン 李芝遠	関東大学校英語英文学科
	LEE, JI-WON	1984生
5	ホ・ジュヒョン 許珠賢	西江大映像大学院
	HUR, JOO-HYUN	1979生
6	イー・ミョンスク 李銘淑	西江大学校映像大学院PR学科
	LEE, MYUNG-SOOK	1980生
7	パク・ユンジ 朴允志	梨花女子大学校国際大学院
	PARK, YOON-JI	1980生

- | | | |
|----|--------------------------------|-------------------------|
| 8 | ユン・ウンジョン 尹恩貞
YUN, EUN-JEONG | 梨花女子大学校政治外交学科
1983生 |
| 9 | キム・ウンジョン 金銀貞
KIM, EUN-JUNG | 梨花女子大大学院食品栄養学科
1983生 |
| 10 | キム・ソヨル 金素悦
KIM, SO-YEOL | 慶熙大学校言論情報大学院
1974生 M |
| 11 | キム・ボギョン 金甫徑
KIM, BO-KYUNG | 韓国外国語大学校英語科
1983生 |
| 12 | カン・ヘジョン 姜惠晶
KANG, HYE-JUNG | 韓国外国語大学校タイ語科
1981生 |
| 13 | ユ・ジソン 柳智星
LYU, JI-SUNG | 韓国外国語大学校タイ語科
1980生 M |

◇ 留学生

- | | | |
|---|-----------------------------------|---|
| 1 | ヒョン・ムアム 玄武岩
HYUN, MOO-AM | 東京大学大学院情報学環
(助手 韓国) M |
| 2 | 朴春蘭
BOK, SHUN-LAN
(音は本人申し出) | 十文字学園女子大学
社会情報学部社会情報学科
1979生 (中国、朝鮮族) |

◇ 「在日」コリアン

- | | | |
|---|-------------------------------|-----------------------|
| 1 | カン・チョネ 康典絵
KANG, CHON-E | テンプル大学ジャパン
1982生 |
| 2 | チョ・ファギ 趙和紀
CHO, HWA-GI | 早稲田大学社会科学部
1981生 |
| 3 | コー・オンニョン 高玉蓮
KOH, OK-LYEON | 明治大学法学部
1981生 |
| 4 | キム・ヨンジン 金永振
KIM YUNG-JIN | 慶応義塾大学理工学部
1981生 M |

◇ 日本

- | | | |
|----|---------------------------|------------------------------------|
| 1 | 牛島由紀子
USHIJIMA, YUKIKO | お茶の水女子大学人文科学科
1982生 |
| 2 | 鬼原民幸
KIHARA, TAMIYUKI | 明治大学 政治経済学部
M |
| 3 | 白井一生
SHIRAI, ISSEI | 明治大学 政治経済学部政治学科
M |
| 4 | 二階堂阿弥
NIKAIDO, AYA | 十文字学園女子大学社会情報学部
社会情報学科
1980生 |
| 5 | 不破野佐知江
FUWANO, SACHIE | 十文字学園女子大学社会情報学部
社会情報学科
1982生 |
| 6 | 菅原 航
SUGAWARA, WATARU | 中央大学法学部国際企業関係法学科
M |
| 7 | 上村一郎
UEMURA, ICHIRO | 中央大学法学部政治学科
1980生 M |
| 8 | 入江康則
IRIE, YASHUNORI | 中央大学法学部政治学科
1984生 M |
| 9 | 佐竹紘和
SATAKE, HIROKAZU | 中央大学法学部国際企業関係法学
1983生 M |
| 10 | 西野岳大
NISHINO, TAKEHIRO | 日本体育大学体育学部体育学科
M |

訪問インタビュー先

◇ (株) 韓国広場グループ／金根熙社長——* 韓国広場提供

韓国スーパー・「韓国広場」(1993～)、株・イオタ「KOREA PLAZA」(1997～)、「エリート日本語学校」(2003～)、NPO法人「カルチャーセンターアリラン」・「高麗博物館」、「仁寺洞」(2004～) から成る。

金根熙 KIM GEUN HEE (キム・ゲンヒ)

1956年、全羅南道木浦出身。1985年、ハンシン大学大学院を休学して日本へ渡る。一橋大学大学院で「日本の思想政策」を研究し、博士課程修了。その傍ら、日本政府出資・財団法人流通システム開発センターの客員研究員として常用バーコード研究に参加。1988年韓国のIEAN(常用バーコードの世界団体) 加入を日本で支援。

1993年3月1日、韓国人に対して排他的・差別的な日本人にニンニク臭いキムチを食べさせるねらいで韓国食品スーパー「ジャント(市場)」を東京・日暮里に開店。

「生活文化を共有するとき、初めてお互いに心の扉を開いて友人になることができる」という考え方から設立した。1年後1994年3月1日、新宿・職安通りに2号店を開店し、97年、日暮里店を売却。

「売れるものより、売らなければならない品物」——「韓国そのまま」を売る信念で努力し「日本での韓国食文化の情報発信基地」の役割を果たすことになっている。

スーパー「ジャント」には1日2500人余りが来客、毎日200件余、日本全国に通信販売で宅配している。売場利用者の半数、通信販売利用者の大部分が日本人となっている。

「ジャント」でCD、ビデオなども一緒に扱っていたが、1997年「コリアプラザ」を開店し、韓国の書籍、雑誌、CD、ビデオ、DVDなどを専門に扱うようにした。韓国人のための書店として貴重な存在だったが、100坪の大型書店の経営に苦戦。しかし日本社会の目を引くようになり

「小さい韓国」として認識される。「コリアプラザ」の定着と発展は韓国ドラマなどを浸透させることにつながっていった。

現在「コリアプラザ」の顧客は毎日400人以上になり、インターネットショッピング利用者も200人あまりになっている。

職安通り、大久保あたりにはいま「コリアタウン」が生まれている。健全なコリアタウンをつくることは韓国人の日本定着と韓日交流に重要であると考えて、「ジャント」「書店」など基盤をつくり10年。当時小さな食堂が2, 3軒だったが、いまでは200～300店舗に達するまでになった。

韓国の農水産物、練り製品は年間1300ドルを販売。韓国の伝統の味、キムチ、サムゲタン、コチュジャン、ミソ、醤油など、「韓国の味そのまま」が日本に定着し、市民権を得るように全力を傾けるつもりだ。

◇朝日新聞社 (敬称略)

総合研究本部本部長	清田治史 (ソウル支局長、外報部長)
論説委員	小菅幸一 (ソウル支局)
外報部	吉野太郎 (ソウル支局)

◇東亜日報

東京支社長	金忠植
-------	-----

朝日新聞 総合研究本部 *朝日新聞 HP による (抄録)

時代を見据え、次代を見通す調査と研究を行う。調査・研究の成果は『総研レポート』などの出版物で活発に発表している。『総研レポート』は市販され、外部からも高い評価を受けている。

(1) 言論・報道機関として取り組むべきテーマの調査・研究と紙面などを通じての発表、(2) 経営課題の調査・研究・提案、(3) 以上を通じての人材の育成、を主な目的としている。

朝日新聞 略史——1879年(明治12年)1月25日、大阪で創刊第1号。創始者は村山龍平と、のちに加わる上野理一。紙面は小型4ページ、

総ふりがな・絵入りで定価1銭、1日平均部数は約1,000部。わかりやすく、親しみやすい大衆向け新聞を、というのが創業時のモットーだった。さらに3年後には、編集方針として「報道中心主義」と「公平無私」をかかげた。これは官権派や民権派の政論新聞が主流だった当時では異色のものなので、その精神は「不偏不党」を柱とする現在の朝日新聞綱領となって受け継がれている。創刊4年後に早くも2万部を超えて全国首位に、88年（明治21年）には東京へ進出して東京朝日新聞を発刊。さらに、活字の自社鑄造や記者の欧米派遣、輪転機の導入など、いずれも日本の新聞界では初めての新機軸をつぎつぎ打ち出し、今日の新聞の原型を生み出した。

第2次大戦の戦時体制下で報道統制が強化され、言論・報道の責務を果たせないまま45年（昭和20年）の敗戦を迎えた。同年11月、朝日は戦争責任を明確にするため社長以下の役員、編集幹部が退陣。「国民と共に立たん」という宣言を発表して、「国民の機関」となることを誓った。連合軍による占領下、全面講和論を展開、朝鮮戦争の論調で総司令部から圧力を受けたが、52年（昭和27年）には新しく朝日新聞綱領を制定して活発な言論・報道活動に踏み出した。また、南極学術探険の支援や日本対ガン協会の設立、ミロのビーナス特別公開やツタンカーメン展の各種事業に取り組んだ。

70年代後半からロッキード事件や談合問題、東京医歯大の汚職など政財官の不正を調査報道、追及。さらに88年（昭和63年）にもリクルート疑惑を独自取材で発掘、92年（平成4年）の佐川急便事件で「金丸氏側に5億円」のスクープが続き、政治改革の導火線となった。この間、87年（昭和62年）5月3日、阪神支局に散弾銃を持った男が侵入、記者2人が殺傷される事件があり、朝日は強く言論の自由を訴えた。また、読者広報室や紙面審議会を新設、読者に開かれた新聞をめざしている。

東亜日報——韓国の大手日刊新聞の一つ。全国紙。1919年、3・1独立運動直後に民族資本によって創立。1920年4月1日に創刊号を発行。創刊当初から民族のスポークスマンの役割を担い、植民地下の抗日闘争の拠点として大衆的民族運動の音頭をとった。

訪問インタビュー

2004年8月23日

- 1 (株) 韓国広場
- 2 朝日新聞社・東亜日報東京支社

(株)韓国広場

金根熙 (キム クンヒ) 社長

2004年8月23日、韓国料理店「高麗」

「基金」司会 きょうは株式会社韓国広場の社長、金根熙さんに受けていただいて、学生の皆さんがいろいろとうかがいます。(拍手)

金根熙 すみません、座って失礼いたします。

「基金」 韓国の学生たち、それから日本の学生、「在日」の学生たちが揃っています。そして韓国の学生たちを引率されて、またこのフォーラムのきっかけをつくっていただいたイー・ウォヌン先生です。(拍手)

最初にアジア女性基金から専務理事・事務局長の伊勢桃代からごあいさつをいたします。

伊勢桃代 皆さん、おはようございます、ようこそいらっしゃいました。この日韓学生のフォーラムというのは今回で2回目になります。韓国から来日された学生、留学生、いわゆる在日の学生の方々、そして日本の学生がここにたぶんお聞きしたいことがたくさん、きょう質問をもってお集まりいただいたことと思います。もともとはこの学生のフォーラムというのは韓国の方々の強い意思によって、この計画は始まりました。そのきっかけをつくってくださいましたのは、ここにおいでになるイー・ウォヌン先生で、今回も力を入れてこうやって皆さまを韓国からお連れくださって、本当に感謝いたします。

このフォーラムの目的というものは、何よりも学生の方々が主役で自由に討論をするということが目的であります。あなたたちは、この10年、15年も経てば、社会の中核として働かれるの方々です。新しい日韓の関係をつくって、そして将来に向かって進むということに協力していただくということが目的です、よろしく願いいたします。金根熙社長、本当にきょうはありがとうございます、よろしく願いいたします。

金根熙 金根熙と申します。皆さんの顔をこうやって、やっと思えることができたので自己紹介をさせていただきますが、全羅南道の木浦(モッポ)というところの出身と言うこともあるんですが、実際はモッポからもう

ちよつと離れた、ヘナム、海南で生まれました。韓国人の特長として、例えば広陵(カンヌン)から50キロ、100キロ離れたところに住んでいてもカンヌンから来ましたということで、田舎から来た者です。

学校について申し上げますと、出身校について言いますと、キリスト神学大学、そして大学院はその神学大学の関係であるハンシン大学院というところで勉強してきました。私が専攻として学んだことは、キリスト教の初期の歴史、そのなかでも宣教師たちが韓国に来てどういうふうに宣教したかというようなところ、根源の部分を中心に研究しました。つまり支配者であった日本人、そして被支配者側であった韓国人、そのあいだに立って第三者である宣教師たちが、何か私たち韓国人の人たちを助けてくれたのだろうかという観点から研究を始めたわけです。

つまり1960代までは、アメリカ州立大学というような形で認定を受けていたところの人たちが来ていたということなんです。要するに人種差別があったわけですから、顔の色が違う人たち、有色人種の人たちは食堂でさえ別であったというような話を聞きました。つまりそういった時代のころに韓国に来て、彼らが、宣教師たちが黄色人種である韓国人の人たちを本当に愛して韓国に来ていたのかということだと思っていました。

植民地支配の歴史研究から

その当時はいろんな世の中で起こっている事件、事故などは新聞を通して知るしかなかった時代でありまして、韓国で新聞が創刊された三・一運動以来は「東亜日報」を探しながら、その当時事故、事件があったかを調べる、そういった作業を私はやりました。調べますと、新聞に載るほどの、本当に小さい事故、事件は新聞に載らなかったと思いますが、新聞に載るほどの大きな事故、事件というのは探してみたらかなりたくさんありまして、その当時、宣教師たちも朝鮮人、韓国人をかなり無視していた、そういった事故、事件がいっぱいありました。そういった勉強を韓国でしましたが、その途中日本に来て、最初は政府関連の研究所で一時期勤めましたが、その後一橋大学というところへ入りまして、朝鮮の政府支配人たちの歴史についての勉強を一橋大学でしました。つまり日本がどういったふうに韓国、その当時朝鮮を支配してきたか、支配政策というものを一橋大学で研究してきたわけなんです。よく民族抹殺政策というふうに言われますが、私は民族解体政策というふうに名づけておりますが、日本が神社

をどれぐらい多くの神社を韓国、朝鮮に建てたかというようなことで、面・メンという韓国の土地の単位がありますが、日本はその当時韓国1メンに1つの神社を建てるような政策を行ったわけです。

そういった研究をしていた私ですが、その後キムチを商売する商売人と様変わりするようになります。そのキムチの商売人と様変わりするようになったそのきっかけなんです、私は長男がいて、いまもオリンピックをテレビを通じて長男と一緒にテレビを観たりしていますが、その当時バレーボールのNHK杯というようなバレーボール大会がありまして、長男と私がこのバレーボールのベスト4の大会を観ていたわけなんです、アメリカと日本とのバレーボール大会がありました。

その試合で私はアメリカを応援しましたが、私の長男は日本を応援して私はびっくりしました。それで長男に「なぜ日本を応援するの?」と聞きました。その当時、長男は幼稚園児だったんですが、その長男が「パパはアメリカ嫌いでしょう」というふうに答えました。「そのアメリカ嫌いなパパは、なぜアメリカを応援するの?」って長男がかえって訊ねてきて、私は「日本はアメリカよりもっと嫌いなので、アメリカに物を託すような、お願いする気持ちで日本に勝ってほしいという気持ちでアメリカを応援してるんだよ」というふうな答えました。そしたら長男いわく、「そんなに嫌いな日本に、なぜ住んでいるの? 自分のお国に帰ればいいでしょう」というふうに答えました。

長男にそう言われて返す言葉もなかったわけなんです、私が一橋大学で研究したのは、19世紀は欧米勢力が自分の軍事力をもってアジアに侵略したというふうに私は思ってるんですが、20世紀になると、いまはWTOと言いますが、その当時はウルグアイラウンドというものがありまして、そういった1つ経済のシステムをもって金融的な支配力をもって、欧米がアジアを侵略するのではないかと、そういったふうには考えておりましたので、それを一橋大学で論文を通して研究をして、事実を究明しようというような活動を私は研究としてやっていたわけです。

そういった欧米の侵略に際してアジア各国は、おたがいに友達になって協力し合わないといけないというふうに私は思っていて、いろんな講演会にも行って、アジアの国々同士で友人にならないといけない、協力しなければならないと講演をしていたわけなんです、しかしながらまだ私の頭

の中では、まだ日本よりはアメリカを応援するぐらい私のマインドはチェンジしてなかったというようなことです。

長男にそういった話を聞かれまして、私は、この子は韓国より日本が好きなんじゃないかというような気持ちがありまして、子どもに「そうしたら君はどの国が好きなの？」って聞いたら「韓国です」、「なぜ？」、「私は韓国人だから」というふうに答えが返ってきました。まあ私は韓国人だから「韓国がいちばん好き」と答えたんですが、「2番目は？」と言ったら「日本」で、面白半分で「3番目は？」と聞いたら「中国」というように答えが返ってきました、中国については私は全然予想してなかったのでびっくりしました。

その当時、日本では海外旅行ブームでありまして、テレビなどでいろいろな海外の国を観ることができましたけれども、中国についてはあまり報道されていなかった時期でありまして、「なぜ中国なの？」って聞いたら、「中国料理がおいしいから」というふうに答えが返ってきました、私の長男がその当時、中国がどこにある国なのかとか、中国について知っていることはあまりなくて、ただ中国料理屋さんに行けばチャザンヤというのがおいしかった、そういった記憶があって中国が好きと答えたわけです。

植民地支配とキムチ

そのとき、私の中に思いついたことがキムチについてでした。つまり日本が韓国を支配政策、植民地政策で支配するために、当時の韓国のいろいろな風土、そして文化について慣れてもらう、そして適応できるようにたくさん書かれたものが、その当時の韓国に関する紀行文でした。そしてその紀行文の中にいちばん多く出てくるものがやはりキムチ、そしてキムチについてたいへん印象的な部分があるんですが、「ニンニク臭い」というような表現が出てきます。そしてある人が下関から釜山・プサンまで行って、プサンから鉄道で当時の京城・ヒョンソン、いまのソウルで鉄道を降りた第一印象はニンニク臭いというようなことでした。それで、私は実際鉄道に乗っているあいだもキムチの匂いがしただろうに、なぜそうなのかと疑問を抱かなかったわけではないのですが、ニンニク臭いというような表現がとても印象に残っています。

つまりキムチのイメージとしてのニンニク臭いということは、やはり植民地政策における、要するに野蛮的だというようなイメージと結びつけら

れていた部分があります。つまりキムチに関するニンニク臭いということに関して、明治維新以後、当時の内務省が警察の管理をしていたわけですが、そういった巡警たちが韓国のところに来て、まずチェックするのが台所の衛生状態であるとか、そういった改善命令を出したりとかいうことで、そういった政策、まあ衛生面であるとか、栄養面であるとかの政策を担っていた内務省の管轄下にあった警察が、そういった形で非常にニンニク臭いキムチのイメージが植民地支配におけるそういった韓国、食文化が遅れているというようなイメージと連結して、そういった形にもっていったようです。それでいままでは差別の媒体であったキムチというものを、今度は友達として相手の気持ちを受け入れていくというような、そういった媒体に変えられるのではないかというような考えが急に閃いて眠ることもできないというようなこともありました。

キムチで仲よくなる

つまり私がそのときに思ったことは、私たちの世代の時代認識というものは、韓国と日本が本当の友達になるための道としては、やはりまず歴史認識をきちっと正しいものにし、それを相手に、日本にわかってもらうということもそうですし、そしてその歴史認識を認定してもらうなかで、やはり大事なのは、相手の心を開き、相手の気持ちを受け入れるというようなところにあるのではないかというふうに思ったわけです。つまり私は当時ちょっともう年を取りかけていたので韓国の大学に帰っても就職がむずかしいかなというような、若干そういったような考え方もあったわけですが、当時やはり韓国と日本が友達になる道として、いちばんいいのがキムチの商売ではないか、つまり一緒にキムチを食べてニンニクの匂いをさせながら、おたがいに理解をするというようなことで、キムチの商売について調査をはじめました。

そしてその当時、ハンセン氏病の関係で調査をしてみると、ハンセン氏病の患者のなかで、いまここでは在日韓国人、朝鮮人という言い方をしましたが、当時、韓国のほうから日本に来た在日の方たちでハンセン氏病にかかった人たちが日本の5つ、6つある収容所に収容されたと。まあこの近くで言いますと、埼玉に近い東村山の全生園というようなところの収容所に入っているという話を聞きました。

そして当時の立教大学の山田昭次先生の関心事であったということも

あって、そのハンセン氏病患者について2年間調査をしてきました。そしてヒヤリング調査したものを本にまとめ、日本でも出しましたし、韓国の基督教文化というようなところからも翻訳出版をしました。そしてそのときの収容所の中の状態について調査した結果、一般の社会から隔離はされているのですが、むしろそういった意味での民族的な問題というものは外に比べてなかったと。つまりその理由について調べてみると、やはり生活文化を共有している、そして生活文化が融合している状態ということで、やはりその中でももちろん憎しみとというか、相手に対するものが、そういったものが増幅する危険性はあるのですが、そうではなくて生活文化を共有することによって、大変相手に対する理解が深まり、相手の心を受け入れるということで融合が進んでいるというようなことが調査ではっきりとわかりました。そして日本の雑誌にも、その紹介をした経緯があります。

つまりそういったことから生活文化を共有することが、より早く相手を理解する近道であるというようなことを、息子とのキムチ、中華料理の話のなかから思い出しまして、そして私がキムチを通して何をするか、キムチというものは私にとって何なのか、そして何をキムチ一般としてみなすべきなのかというようなことについて考える契機となりました。そういったわけで、キムチということは私は生活、文化、象徴として考えていますが、このキムチを通した生活、文化を受け入れて、そして相手を理解させる、これがいちばん大事なものじゃないかというふうに考えます。そのキムチを通したキムチのジャンルということを4つに分けることができます。そのなかで1つは食文化となります。食というものは人間を生きるための1つの手段であり、その生命を維持するための1つの手段であります。それを乗り越えて食を楽しむ、食を相手に提供する、相手との交流の1つの手段として使う、というような意味で食ってというのは大変重要な文化であります。

2番目に大事なものがコミュニケーション、つまり言葉であります。

3番目に遊び文化、韓国語で言うノリ文化というものなんですが、これについては新聞にも大きく広告されましたけれども、いまはやっている「冬のソナタ」という、こういったエンターテイメントを通した遊びの文化というものが、おたがいの交流において大変大きな役割を果たします。

4番目に挙げるものは「事(こと)」、事(じ)という漢字1つで表しますが、この「事」というものでありまして、それは2つありまして、その

「事」には歴史とニュースの2つがあります。ニュースというのはいまある事実を意味しますし、歴史は過去あった事実を言いますが、このような事実を共有することによって、おたがいの共同体としての意識が、連帯感というものが生まれ得るものだと考えております。

自分で長くやれる食品のビジネスへ

こういったことをやっていくために、これを長年維持して続けていかなければならないと思ひまして、それでビジネスを始めました。ビジネスのなかでも私も食べていけないといけないというような、生活をしていけないといけないというようなことがあります、食品からビジネスを始めました。それで広場という食品を扱うスーパーマーケットを運営していますし、ほかに「コリアプラザ」、これは本屋さんなんですが、そこで言語、言葉に関したものを、また遊び文化に対するCD、VTRなどを扱っております。そして「事」の面ではNPOの活動の一環として、私は「アリラン文化センター」に関わり、そこでは近代史を研究しておりますし、そして「高麗博物館」では韓国と日本の交流史、交流の歴史について研究しています。このアリラン文化センターと高麗博物館は私が経営しているわけではなくて、私は、NPO活動として関係している、協力しているものです。

このビジネスのなかで私が最も大事にしてきたのは、人は、人には自分がやりたい仕事と、やってできる仕事とこの2つの側面がありまして、もし自分がやりたい仕事を広めすぎると、かえって自分の能力が、その広めすぎた仕事に追いつかなくなる、そういった危険性がありますので、いつも自分がやれる仕事をやろうというところに重点を置いてやってきました。そして私のビジネスのスタイルとしては、ほかの人とやるのではなくて、ほかの人と力を合わせてというのではなくて、まず自分でできるということ、つまりなぜそういうふうにしたかと言うと、1人でやろうとしても、例えば夫婦間でも利益について、利益の上がないことをなぜするのかという抵抗をされたりとかいうこともありますので、やはり第三者と手を組んでということよりは、自分でという形でやってきました。

そしてキーワード、ここの様子を見ていただければわかると思うんですが、キーワードの1つとしてウィンドウ、窓、チャンというのをキーワードにしました。つまりそれは何かと言うと、韓国の生活文化を日本人たちにのぞいてみてもらって理解をしてもらうというようなことで窓、チャ

ンというのをキーワードにしました。そしてそれをまたチャント 𠵼𠵼 というような形、つまり広場というような言葉で、市場ということで変えました。そして私たちは「ト」ハ という、場所の場（じょう）という言葉を入れることによって、体験を一緒にして、体験を分かち合うことで理解を広めていくというような、体験プロジェクトということで私たちのキーワード、「ト」、つまり場という字ですね、市場の場（ば）という字をキーワードにしました。

つまり、私の商売も軌道にのってある程度多くの支持、そして認定を受け始めるようになって、どんどん私のビジネスも拡大はしてきました。そして最初は小さな食料品、食堂から始めてきたものが、だんだん領域が大きくなり、広くなり、そしてそういったなかでも私は常に職員たちなどに言っていることは、まあ息子に対してもそういうふうに言いますが、果たして生活していくということは、そして生活とは何かというようなことを常に問いかけていく。つまり生きていく、生活していくことはどういうことかということ問いかけることによって、先ほど申し上げた自分がまずできることをやる、どんどん大きくなると、それが下手すると傲慢になり、またそういった傲慢になることを避けるために、まずはできることをやっていくというような方針ですと続けてきました。

つまり私がいままでお話ししてきたのは「論よりキムチ」というようなことで、食文化のことから始めて、日本の人の心を開いて、おたがいに受け入れるというような流れになってきました。そしてこれは決して大きな事業、つまり小さな突破口には過ぎないかとは思いますが、ここまできたのも、やはり多くのマスコミが協力してくれたということもあると思います。そして心をおたがいに受け入れて友達になったそのあとが大事です。

そしてその問題の核心は、皆さんのテーマである歴史の問題になると思います。私が皆さんの問題の核心である歴史について、歴史研究者としての見解を結論としてここで申し上げてみたいと思います。

日本側の歴史問題、そして韓国側における歴史問題の考え方についてお話しますが、まず日本側の歴史問題に関して言いますと、第三者的な言葉、つまり日本側の問題としては敗戦ということ、終戦という表現でしているということです。そして明らかに日本は負けたのに敗戦ではなくて終戦という言葉を使ったために、だれが責任を取るのかというふうな形になり

ました。そして主語が戦争になったために、終戦という言葉を使うことによって責任の所在がはっきりしなくなったということです。

つまりやはり戦争の責任に関して何が問題かと言うと、戦争の責任がそういった終戦という言葉で曖昧になったことで、GHQ、当時の占領軍による東京裁判によって責任がそういった形で完結したということに問題があるということです。そしていちばん重要な問題点としては、国民、そして市民による戦争に関する責任を曖昧にしたことによって、つまり、国民や市民による戦争責任の清算ということがなかったということが核心部分です。これは日本の国民によるものもなくって、国民に対する戦争に関する清算がなかった。だから国民によって国民に対するもの、国民がなかったら大変なのに、それがなかったということが大事な話です。

つまりこれからは心を開いた日本人による、日本人の市民グループ、まあその市民グループの力によって日本の国民に対する、また日本の国民による戦争に対して、敗戦に対する清算というものが必要であるというふう考えるのです。そういったことがなされて、初めて国外的な清算が始まると、スタートすると考えます。

日本の市民グループ、韓国の若い世代

皆さんに、ちょっと質問したいと思います。日本が朝鮮を支配したというのは日本史でしょうか、あるいは東洋史でしょうか、皆さんどうお考えですか。日本史か東洋史か、どちらになると思われますか。まあ日本では東洋史というふうに使われています。しかしこの問題については最近、心の扉を開いた人が増えてきた、市民団体が増えてきたと思いますが、しかし最近になって日本の社会が右翼に走っている傾向がみられていますので、その点が少し心配されます。しかし右翼の強い時代はそんなに長くはもたないと思いますので、日本にすでに良心的な市民が、市民グループがたくさんできていますので、その方々によって、国民による、また国民に対する清算が近いうちになされるのではないかと私は期待しております。

2番目に韓国側の問題について触れたいと思います。韓国側の問題としては、独裁者によって不幸的な過去、独裁者によって利用されたという点が挙げられます。韓国の政治的な政権の正統性が弱かったために、政治をやっている方々のやり方としてよく使われるやり方は、外側に敵をつくると内部の勢力を抑えることができるというような、そういったやり方が最

もよく使われたわけなんです。政治家は日本が悪いというふうに、外側に日本を敵として立てるということによって内部を抑える、そういった政策を使ってきたという点が挙げられます。しかしその時代の独裁者、政治を担当してきた人々は実際彼らが親日派であって、日本の植民地支配を契機にして自分の出世の1つのきっかけ、契機として使った人たちであり、身分上昇の1つの契機として利用した人たちでもあります。しかし最近になって政治的な面でいろいろな可能性が見えてくるようになりました。それはウリダン、ウリ党だけの努力ではなくて、市民のたゆまない努力によってここまで来た、特に若い研究者、若手の研究者のたゆまない努力によって、これまでの問題を乗り越えることができたと考えています。

最後になりますが、私が長年商売をしていながら私のモットーとして考えてきた、その点について触れたいと思います。私はまことの意味での、本当の意味での民族主義とは、自分の民族が尊敬を受ける、尊敬されるようにする、まことの民族主義とは、自分の民族が外から尊敬されるようにするということであると考えます。対立を主張し、ほかの民族を憎悪し、そしてほかの第三国と喧嘩をふっかけるようなことは、本当の意味での民族主義ではありません。皆さん、みんな自分の家族を愛していると思いますが、自分の家族を喧嘩好きな人にしたいとは思わないでしょう。私は社員にも言ってますし、また対外的にも言ってますが、私たち1人1人がほかの人から、外から尊敬される、愛されることによって初めてこの韓国、韓民族がこの地域で認められる、愛される民族になり得るといつも話しています。

最後までお聞きいただきありがとうございました。皆さま1人1人が尊敬される、そして愛される、それも自分の民族じゃなくて、ほかの民族から、つまり日本人は韓国人から尊敬される、愛される人に、韓国人は日本人から尊敬される、愛される人になっていただきたいという期待をよせて終わりにしたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

司会 金根熙社長、ありがとうございました。あとから来られた趙和紀さん、早稲大学学生です。

金社長 今年の2004年のカレンダーです。皆さん読んでみられると日韓の交流の歴史についていろいろ書かれてあるので、勉強になろうかと思えます。最後の11月と12月のところをごらんいただきますと、韓国の尹

東柱、ユン・ドンジュさんについて書いてあります。彼は獄中で亡くなるわけなんです、亡くなる前までずっと韓国語で詩を書かれていたわけで、彼が書いたその詩が日本語に翻訳されて日本の教科書に載っています。それを見ながら、そういった事実と接しながら、私は本当に言葉というものはこれだけ強い力をもってるんだということを強く感じて感銘を受けたので、カレンダーに載せることにしています。このユン・ドンジュさんの生き方を見ますと、彼は、彼が捕まった理由、罪目というのが、韓国語で詩を書くから、それが罪であったので、それで捕まって、そのために獄中で亡くなったわけなんです、その彼が韓国語で書いた、韓国語で書くことが禁じられた時代に書いた韓国語の詩が日本語に翻訳されて、日本の教科書に載ったということで大きな意味があると思います。

朴允志 私は梨花女子大学校国際大学院で勉強しているパク・ユンジと申します。それで社長がキムチビジネスをされているということでしょうか、いたいと思います。やはり日本人の口に合うかなということがいちばんの関心事なのですが、たぶん韓国の人と日本の人と味覚も違うと思いますので、ある意味でのローカライゼーション、そしてカスタマイズということで、日本人の口に合うように変えたりしているのかどうか、その点についてうかがいたいと思います。

韓国そのままを売る

金社長 まったくそういったことはしていません。そしてつまりソウルで売ってるキムチと同じ味、そのまま、ある韓国で売られてるそのままの味、韓国のそのままの味ということで、そういった商売をしているのは、ただ唯一私だけです。農協という、ノンヒョプというところで売り出しているキムチもそうはしていないで、私一人がそういった形で、韓国の物をそのまま売っています。

朴允志 キムチを日本人の口に合うようには変えていなかったというふうなお話だったんですが、つまりそうであれば、日本人の人はそれを知らないと思うので、どういった形で広報をし、そしてここまで商売に結びつけてきたのか、引っ張ってきたかということです。

金社長 そしてきょうのお話のテーマとはちょっと違いますが、2ついまの質問についてお答えさせていただきます。1番目には、まず日本人は本場というものにこだわりをもっているということで、アレンジされた物よ

りは本場ということでたいへん説得力をもつ商品だということ。そして2番目に、やはり韓国を旅行してきて、旅行の経験者が現地での味をおいしいものだというので、そういう人たちがオピニオンリーダーになってくださって、商品の評価してくれたという2つです。

尹恩貞　いま社長のお話のなかに、やはり食文化を日本と韓国の人が共有することによって、日本人が韓国について理解を深めるというようなお話、つまり韓国の文化を理解する契機として、キムチがその1つのきっかけになる、食文化がきっかけになるというようなお話がありました。そしてさらに現在においては、先ほどもお話に出ました「冬のソナタ」などによって、日本人の韓国に対する理解というものはかなり高まったというお話もありました。逆に韓国側の日本に対する理解ということについて申し上げますと、私たちが高校生のときの社会の教科書を見ると、やはり大衆文化の開放、いまはだいぶ進みましたが、そのときの教科書に出ていたのは、大衆文化の解放に対する反対というものがイシューとして出ていたわけで、つまりいま大学生のなかには日本の大衆文化を好む人たちも多いわけですが、植民地を経験した人たちなどは、やはり日本に対する良くない感情、そして敵対心を抱いている世代も、だいぶ少なくはなっているけれども、かなりいると思います。

つまり、いま必要なのは、韓国の人たちが日本を理解する契機というものが、きっかけが必要なのではないかというふうに思います。で、やはり政治的なもので、先ほどの社長のお話にもありましたが、正統性のために外部に敵をつくるというようなお話があったかと思いますが、日本も歴史認識を歪曲するのではなく、きちっと認定することによって韓国側の政治的な問題、そして韓国側も日本人について理解をきちっとするというようなことにつながるかと思いますが、社長のお考えはいかがでしょうか。

金社長　いま学生さんが主張していた大衆文化に対する考え方について、私は全面的に同感いたします。立派な主張だったと思います。つまりおたがいがどういうふうに今後理解していくかというような話について、私自身は今後どういった形でそういったものを企画していくかという考えはあるかと思いますが、基本的に今後おたがいが努力していくなかで、いちばん大事なのは、やはり自分ができることをしていくということだと思います。つまり私はよくみんなから「成功したね」というふうに言われること

があるんですが、そうするととてもあわてます。確かにビジネスもこれだけ拡大し、売り上げも上がっているというふうな形で、信用評価会社からは大変信用が高い会社ということで評価を受けているんですが、私はそういった「成功したね」というふうに言われると、むしろあわてると同時に、むしろ恐れのようなものも感じるわけです。

自分が生活の中でできることを

つまりやはり自分がきちっと謙遜しながら自分のすることをしていく、で、生活のなかにきちっとしていく、ということが大事かと思います。そうしていくうちに、だんだん自分のできる領域というものが広がっていき、ここにいらっしゃるイー・ウォヌン教授がしなければならないお仕事、そしてしているお仕事、そして私のしている仕事とイー・ウォヌン教授とのお仕事は違うわけですが、そういったわけでそれぞれが各自のもつ力に合わせてやれることをやっていくということが大事だと思いますし、特に政治的にどうこうとういうことの次元を越えて、いまは韓国では例えば親日問題についての新しい考え方をつくろうとして、若い歴史学者が新しい親日に関する評価を行おうとしています、そういった民族的な努力も大事ですが、皆さん、若い人が1人1人できることは何かということをやっていくことも大事だと思います。

李芝遠 私は関東大学から来ましたイー・ジウォンと申します。私は質問というよりはお話をうかがって私が感じた感想、また私がいままで考えてきたことと重ね合わせてお話し申し上げたいと思います。

私は毎日当然のように過ごしてきた私の日常のなかから、いったい私の本来の姿といったものは、どこにあるのだろうかというような疑問に襲われます。いまは科学がものすごく発達して、私たちの生活はたいへん欧米化していると思います。それとともに日本と韓国の関係というものを、その姿においても、私たちは歪曲した見方をもっているのではないかと思います。そういった歪曲した見方をもつようになった最初の段階は、私たち自身によるのではなくて、他者によるものだったと思います。

最近になって少し深くわかるようになった事実があります、それは安重根(アン・ジュンゲン)さんについてのことです。このアン・ジュンゲンさんが金社長と同じようなことを話されたことがあります。その方が、アンさんが日韓有為を固めるための、日韓有為紹介というようなことを書かれ

たことがあります、その意味は日本と韓国の親善をはかるためには、おたがいよく知ることに勝るものはないというようなことです。その話を知ったときに、とても私は感動したことがありまして、きょう金社長のお話からもそういったお話がうかがえて、とてもうれしく思います。きょうの社長の話はたいへん評価いたします。

最近、日本は右翼化に走っている、そういった流れがありますが、しかし私たちのこの小さな力1つ1つがおたがいをよく知る、おたがいをよく理解する、こうした小さな力が合わせられると大きな流れも変えられるものではないかと思えます。したがって、いま現在の韓国と日本に携わってる、歪曲された見方、姿というものを私たちの力によって変えられるものと思えます。先ほどユンさんが日本では「冬のソナタ」などがはやることによって、日本のなかから韓国に対する見方が変わりつつある、韓国でもそういった何か日本に対する見方の変化が必要でないかというような話がありましたけれども、それにたいへん共感しますし、またそういった韓国側の見方を変える1つの一環として、このようなフォーラムが開催されたものだと思いますし、1つのこういった動き、変えるための活動に私が参加できたことをたいへんうれしく思います。ありがとうございます。

金社長 何かお答えしないといけないでしょうか…。しかし、偉いアンさんと私を比較してはいけません。私は何と申し上げればいいのかわからなくなってしまいます。ありがとうございます。

鬼原 こんにちは。明治大学の学生、鬼原民幸と言います。アンニョンハセヨ。社長のお話のなかに、日本がいま右傾化というか、右翼化している流れがあるということで、私もそういうふうに思うんですが、その理由というのがちょっと自分の中で曖昧なところがありまして、それを社長はどういうふうのお考えなのかと思ひまして、お聞かせ願えればと思います。

金社長 私もわかりません。しかし私なりにいろいろ見聞きして、それで考えた理由として2つ挙げられますと思ひます。その1つはこういった右傾化、右翼化を1つの政治的な戦略として利用しているグループがあるということです。2番目は、先ほど申し上げましたように、戦争に対する明白な清算がなされなかったためにこういったことが起こると思ひます。そのような戦争に対する清算を国同士の契約、協約、または国交を樹立する、そういったものによってごまかしている、つまりはつきり清算せず、

それで終わってしまっているから、こういったことが起こっていると思います。いますぐじゃなくてもいいんですが、今後、将来、日本の国民によって、国民の市民によって、また日本の国民に対して、また第三国の国民に対して、政治的な妥協ではなく本当の意味からの清算が行われると、こういった問題は起こらないと思います。

3週間ほど前、山梨県の生涯学習所というところに行って講演会を行ったことがあります。この講演会は、講演会のテーマというのは学校で行われる教育は国民に対して、この国を愛せよというような教育をするしかないで、昔の過ちを認めるような教育はできない、そのためにこの正しい歴史教育は市民の生涯学習所、この生涯学習という市民教育というレベルで正しい歴史教育を行わなければならないというようなことがテーマで、山梨県の県レベルでの講演会ではありましたが、市民の活動の一環として私が講演を行ったわけです。

そして講演のあとに質疑応答の時間に出された1つの質問に、中国問題、私の講演とはあまり関係がないんですが、中国問題についての質問がありました。そのときちょうど中国と日本とのサッカー試合がありまして、それについての質問がありました。その中国問題についての質問に対してお答えとして私が申し上げたのは、中国国内での海岸のほうと内陸部での貧富の格差がほぼ10倍だと言われています。そのためかなり貧富の格差による不満、不平がいっぱい出ているわけなんです。そういった不満を紛らわすために、つまり国内の問題を回避するために国外に国民の関心を向ける、そのための第1のターゲットが日本であり、第2のターゲットが韓国だというふうに申し上げました。

しかし、私がそこで、講演会の聞き手は皆さん、みんな日本人だったわけなんです。そのときに中国の、こういった1つのきっかけを提供したのは、結局日本だったと、日本が戦争の責任をきれいに清算していないために、こういった関心を日本に向けるための1つのきっかけを日本のほうから提供しているのだと。つまり日本人のほうから中国の中の問題への解決を、よりむずかしくしているきっかけを提供していると、そういうふうにお答えしました。つまり最初の質問のお答えとして、右傾化、右翼化によって政治的な利益を求めようとする、そのグループの1つの意図があったということです。つまり日本の市民のなかに、戦争に対する清算をきれ

いにするような、その土壌がつくられていないがために、この政治的な面で右翼化に走る、そういったきっかけを日本の市民から提供しているということです。

この前、イラクに人質になったのは何人でしたっけ、3人ですね。そのときにイラクの人質に日本人が捕まったときに、外務省の領事局長とお話しをする機会があったのですが、そのときに「自己責任」だというような言葉が出ました。そのとき私はびっくりしました。自己責任というような言葉が出てくるということ自体、日本の人格に相当する国の格、そういった意味での国家としての格があまりにもそれでは揺らぐではないかというような形でびっくりしました、人質の問題について、自己責任という言葉で。

そして大部分の国民の人たちがその考え方と同じ考え方で、自分たちが人質から解放される費用というのは捕まった人質が負担するべきだというような考え方だったと思います。それならばなぜ国家、国が必要なのでしょう。申し訳ないんですけども、そういうふうに思いました。

金永振 はじめまして、キム・ヨンジンと申します。慶応大学の理工学部に通っています。ちょっとむずかしい話が続いてちょっと質問が変わってしまうので恐縮ですが、キムチについて質問したいと思います。先ほどの話のなかでキムチが昔は日本の中で受け入れられていないという話がありましたが、いまではもう吉野家に行けば“豚キムチ丼”があり、居酒屋に行けば必ずキムチが置いてあるんですけども、それほどまでに、そのキムチがこの国で愛されるようになった理由というのは、何なんですか。それをまたそれがいつごろから受け入れられ始めたのか、そのスーパーの売り上げとか、そういったものもからめてお話いただければと思います。

金社長 それは事業の秘密でもあるんですけど、こちらの売り上げに関することは、なぜキムチがそれだけ売れるかということが、売り上げではなくて、それはちょっと事業秘密です。でも特別に皆さんにお話したいと思います。これは3時間でも皆さんに1日中かけてもお話ができる内容です。簡単に2つお話をさせていただきます。

まず日本人の生活環境が変わってきたということで、特に冷房などが普及したことでキムチが日本人に受け入れ始めた、そして冷たい食べ物で、

なおかつそれを食べて体が温まるというものはカプシン、それで体を温めて栄養価があるというキムチに入っている唐辛子にしか含まれていません。昔はもっと自然の状態で食べ物を食べたんですが、いまは冷蔵庫から出して食べるということで、30度の部屋のなかで4度、5度、冷蔵庫から出したばかりの冷たい食べ物を食べるという状態です。つまりそういった実際食べたときは冷たいんですけども、体を温めてくれるというようなことで、暑いときには熱いものは食べられないので、そういった形でキムチを食べることで体が温まる。たくさん食べれば冷房病にとっても効果がありますのでたくさん食べてください。

2番目は日本の戦後の給食がずっとあるわけですが、それと関係があると思います。つまり給食のなかでカレーというのがずっと続いてきて人気があるんですが、それが高い人気を得てきたということで、その辛さ、辛い食品を好むというところに関係があると思います。そして1960年から65年まで給食が続いてずっとカレーが人気があったわけですが、1985年ごろにカレーを食べた人たちがオピニオンリーダーとしてからい食べ物を評価し始めた。つまりオピニオンリーダーになったということはどういったことかということ、お金を出して食べる、そしてお金を出してつくってもらい、そして人に食べさせるというような意味でオピニオンリーダーとしての役割を果たしたということです。

つまり1960年ごろに給食でカレーを食べた人が1985年になって社会人になって、成熟した段階でオピニオンリーダーになったということです。それでそのあと10年ほどして1995年、つまりいまから18年ぐらい前に日本の漬物を抑えてキムチが売れ始めたということで、ずっと7年間、1位を維持しています。それで“アサヒスーパードライ”っていうのを皆さんご存じですよ、アサヒビールから出ている。それが1984年から売れ始めてるんですが、その市場占有率が9.8%になったのが1984年です。そして1985年にアサヒビール会社が売り出したのがマイルドという商品です。そして1986年にスーパードライ、辛口を売り始めます。私が調査した結果ときちっと合うというふうな、私がアサヒビールから資料をいただいてそういうふうにしたわけではなくて、日清食品というところでキムチラーメンをどういうふうにするか、辛い味として定着させるかという講義をしたときにつくった資料です。それで、お金をもらっています。以上です。

「基金」 関連で訂正をさせていただきます。、韓国の、こちらのグループが韓国の農水産物、練り製品を年間1300ドルと書いていますが、1300万ドルの間違いです。

金社長 参考までに私のグループ全体の売り上げは40億円ぐらいです。

上村 時間が押しているのに、すみません。中央大学から来ました上村一郎と言います。時間がないので、単刀直入に聞きたいと思います。先ほどから社長がおっしゃられているように、これからの日韓関係を考えるあいだで市民団体、国民レベルでの戦争の清算が必要だということでした。そこで質問なんです。例えばの話でいいんですけども、例えばこの国民、市民レベルでできる清算というのは具体的に何がありますか。

金社長 きょうのこういった集まりもその1つになると思いますが、あとドイツとフランスの例を挙げることができると思います。明日、国連大学にも行かれると思いますが、その国連のユネスコプログラムにこういったものがありまして、1950年代後半から市民教育をやっています。学校の教育のなかでは自国愛を教えるしかないの、学校の教育ではできないので市民教育を通じて、心を開いた状態、そういった態度で臨むと市民教育を通して教えてもらったことに対して率直に話し合っ、率直に解決していくということができると思います。しかし日本も韓国もこういった市民教育はよく生涯学習というふうに言われていますが、それはだいたい学習の聞き手になるのは引退後の方々に対する教養的な教育に流れていると、その点が私は非常に残念です。今後一緒にやっていきましょう。

「基金」 イー・ウォン先生、最後になりましたが、お願いいたします。

李元雄教授 皆さん、おはようございます。関東大学のイー・ウォンと申します。まず最初にこういった場を設けていただきました伊勢桃代アジア女性基金専務理事をはじめみなさんに感謝いたしたいと思います。またこの場に参加していただきました日本の大の学校の学生の方々、そして韓国からの学生に感謝申し上げます。

今回2回目となりますが、去年より発展させたいという思いから、去年は韓国から2つの学校から学生がまいりましたけれども、今年は5つの韓国の学校からの学生がまいっております。なぜなのかわかりませんが、韓国から参加した13人の学生のなかで10人が女性です。それに比べて日本の学生を見ますと、日本の学生10人のなかで7人が男性の学生ですね。そ

の理由、確実な理由わかりませんが、たぶん興味とするところ、関心とするところの違いからこういった結果になったのではと思われます。

もともとアジア女性基金は、過去、日本が戦争時にアジアの女性に対して行った過ちに対して、反省し、国民の誠意を集めて謝罪をしようという、そういった意味からつくられた基金です。今回、韓国から10人の女性の学生が参加されました。過去不幸な歴史のなかで女性たちは女性として、また人間として正しく扱われなかったということがあります。今回、同世代の皆さん方がこうやって集まりましたので、過去を見据えながら、そしてこれから一緒に暮らしていく、また未来を一緒につくっていく、未来を開く、そういったコンセンサスつくりに向けての活動をしていただきたいと思えます。

韓国から来られたたくさんの女性の学生は日本の男子学生を見てかっこいいというふうに思われることを期待しますし、日本の男子学生は韓国の女子学生を見てきれい、浚刺、話も上手というふうな感想を抱かれることを期待しております。ありがとうございます。(拍手)

「基金」 金社長、ありがとうございました。(拍手)

朝日新聞東京本社

東亜日報東京支社

《日韓学生のフォーラム2004 訪問インタビュー》

2004年8月23日、朝日新聞社

総合研究本部 本部長 清田治史（きよた はるひと）

論説委員 小菅幸一（こすげ こういち）

外報部員 吉野太一郎（よしの たいちろう）

東亜日報東京支社長 金忠植（キム・チュンシク）

「基金」 韓国の学生、在日の学生、そして日本の学生、ちょっと立ってください。ありがとうございます。そして、韓国から引率され、指導教授でいらっしゃるイー・ウォヌン先生です。そして主催者であるアジア女性基金専務理事事務局長伊勢桃代です。清田さんからメンバーをご紹介いただいて、伊勢からご挨拶を申し上げ、その後、清田さんのお話から始めたいと思います。

清田 私は、朝日新聞社のいま総合研究本部というところにおります、清田治史です。あとで短い報告のなかで私の話をいたしますので、自己紹介は譲ります。

お隣にお座りの方が「東亜日報」の東京支社長、金忠植さんです。それから右が論説委員で、朝鮮半島、東アジア担当の小菅幸一さんです。去年のいまごろまで5年間、ソウル支局長、特派員をしていらっしゃいました。それから外報部の吉野太一郎さんです。吉野さんはこのなかでいちばん若くて31歳、皆さんにいちばん年齢が近いと思いますので、若い人たちの感性になるべく近い朝日側の人間として陪席をしました。外報部で朝鮮半島問題を担当しております。

こちらでの自己紹介は以上です。

「基金」 どうもありがとうございました。アジア女性基金から、伊勢がご挨拶をいたします。

伊勢 お時間をとりたくないの、ごく簡単にご挨拶申し上げます。清田本部長、それから「東亜日報」の金忠植支社長様、本当にきょうは時間を割いていただきましてありがとうございます。小菅論説委員、それから吉野外報部の記者と、こうやって皆さん来てくださって、学生と一緒に交流してくださることをありがたく思っております。

私、ここに来ますときに地下鉄に乗って、この学生さんたちと一緒にいますと、コミュニケーションをどうやってつくるかで、みんなが一生懸命コミュニケーションをやっているということに非常に印象が強かったんです。この学生フォーラムは、私どもアジア女性基金、2回目の開催です。やはり国際関係、特に日韓の関係というのは、これからの若い人たちに、本当に新しい見方、新しい出発をしなければ、いい方向に向かっていけないのではという心配がございました。こうやって2回目を迎えて、若い人たちが本当に自由に話し合い、意見を交換して、これからも友情関係をもてるということに非常に私ども、喜びを感じております。

このフォーラムは学生たちのものでありまして、本当に学生たちが自分たちでこれをマネージし、議論の場をつくり意見交換をしていくということなので、私たちはいろいろとこの人たちから学ぶという立場にあります。きょうは、このプログラムのなかでこういった大事な、大切な機会をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

「基金」 学生たちが生まれるか生まれないかのころ、ソウルで韓国語の勉強を始めて、ソウル支局の仕事もなさった清田さんから、メモもいただきました。少しお話をいただきます。

清田 まず先ほどのこちらからの紹介で1人もれていました。いちばん後ろでいまパソコン使ってた社会部の北野さんです。ずっと社会部で朝鮮半島、韓半島の問題にたいへん深い関心をもってらっしゃいます。30代のなかば…。

北野 37歳です。

日韓関係は隔世の感

清田 それでは、私の話を始めさせていただきます。全体で2時間足らずということなので、なるべく圧縮して短くお話をします。

いま日本では、資料にもありますように30代から50代、60代ぐらいの、特に女性のあいだで大変な韓国のブームが生まれています。テレビ芸能ドラマの「冬のソナタ」というやつで、先週の土曜日にNHKの総合放送で連続の最終回が終わったんですけれども、私の妻は、今週からいったい何をテレビを観たらいいのかというふうに、たいへん虚脱状態に陥っています。日本と韓国、韓国と日本の関係というのは、まだまだ近くて近い間柄とは言いがたいとは思いますが、私自身が韓国に関心をもち始めて30年ぐらいになりますけれども、そのはじめのころと比べると、本当に隔世の感があります。

それで、私の韓半島、朝鮮半島に対する関心というのは国内の取材をまず通じてでした。いちばん大きなきっかけになったのは、私が京都で事件記者をしていたころです。刑事課長のところへ毎朝行くんですけれども、ある日係長の机のところに、ほっぺたを真っ赤にした女性2人が手錠をはめられて座って事情聴取をされていました。だいたい刑事課にほっぺを赤くして目を泣き腫らした純真な被疑者っていうのはそう見かけません。それで話を聞いてみると、京都の友禅、着物の京友禅ですね、その工場で働いている韓国からのお嬢さん2人で、密入国が発覚して捕まって強制送還されるというところでした。

友禅というのはいくつかの工程に分かれるんですけれども、そのなかで蒸気で蒸して色を定着させる工程があります。そこは実は京都友禅の工程のなかではいちばん利潤の少ないところなんです。戦前は、と言いますが、戦後はどんどん利が少なくなるというので、そこに在日の方たちの経営者が進出してきました。利潤が少ないうえに景気の変動が大きいものですから、景気のいいときにはたくさん人を抱えなきゃいけないし、悪くなると解雇しなきゃいけない、ある時期から在日の経営者の方々が、景気がよくなると韓国の南部、マサンとかプサンあたりから密入国で、主に農村から都市の貧しい方々のお嬢さんを密入国者として受け入れるわけですね。それで景気が悪くなると人を減らさなきゃいけないんですけれども、減らすときに、実はどうもこれははっきりはしなかったんですが、経営者の方かその周辺の方が警察に密告をする。そうすると密告をされた人は強制送還をされると、こういう図式でした。

これに私は非常にショックを受けて、つまり差別の重層構造というか、差別が重なり合っている事件だということでショックを受けました。利益のいいところは日本人たちが工程を受け持ち、いちばん利への薄いところを在日の方が請負い、そして景気に左右され、安い賃金ということで韓国の若い女性たちが、しかも本国で当時はまだいい就職の機会もない、もしくは日本のほうが相対的に賃金がいいということで日本に密入国をする、景気が悪くなると送還をされる。まさに日本と韓国の戦前の歴史も引きずりながらの差別の重層的な構造を見た思いがしました。

当時私はいろんな取材をしていたのですが、主なテーマの1つがマイノリティーの問題でして、心身に障害をもった方とか、まあマイノリティーと言えるかどうかわかりませんが、広島の被爆者とかそういったテーマを追いかけていたのですけれども、そこで本格的に韓半島と日本との関係に興味をもつようになりました。

それで自分から希望して、お願いして韓国の延世大学の語学堂というところへ言葉を習いに行きます、1981年の秋なんです。その半年前に光州事件が韓国で起きています。当時の「朝日新聞」のスタンスというのは、いまから振り返りますと、北朝鮮、北韓(プukkan)に心情的には近いものだったように思います。まだ日本の社会に社会主義をまったくの理想ではないけれども、社会主義体制のほうがより平等であるという幻想がかなり強くありました。それから韓国から出てくるニュースというのが、朴政権による軍事独裁、デモの弾圧とか言論の弾圧とか、そういうようなニュースばかりでして、だいたい新聞の扱うニュースというのは悪いニュースが多いんですけども、それにしても悪いニュースが韓国については日本の新聞の紙面に溢れていたわけです。私も語学留学に行く2、3年前から言葉を習っていたんですが、その言葉を習っていた仲間から、社内の、「なんでソウルに行くんだ」と「おまえの気持ちはわかるけれども独裁政権に頭を下げてビザを取って、そんなことまでして韓国語を学ぶ必要あるのか、日本で一生懸命やればいいじゃないか」というような言葉も受けました。

きびしく激しかった韓国の対日姿勢

当時はちょうど光州事件のあとで、「朝日」をはじめとして日本の主な新聞のソウル支局が全部閉鎖になっていたんですね。向こうへ行ってみますと、韓国の方たちの日本に対する認識というのもまた激しいものでした。

当時はハーバードのエズラ・ヴォーゲルの「ジャパン・アズ・ナンバーワン」という本が出たばかりのころでした。日本は戦前わが国を蹂躪し、文字も奪い、宗教も奪い、名前も奪った張本人が、戦後は朝鮮戦争をきっかけとして経済復興を果たし、いまや「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われるまでに経済はのし上がってきたと。にもかかわらず韓国については何も知らないし、知ろうともしない、という非難、批判でした。

ただ、私は救いだっただのは、当時言葉を習いに行ったので大半の人は大学生、大学院生、大学の先生なんですけれども、若い人たちの大半は「日本は嫌いだけどおまえは好きだ」と、つまり私以外の日本人とほとんど接点がない、そういう時代状況でした。非常に正義感が強くて、バイタリティが一あって、向上心が強い人たちであることがわかって、これから日本と韓国のメディアを中心として、しっかりとおたがいの素顔を伝えあっていけば、歩みよりは可能なかなあというふうにも素朴に思いました。

私が1年いたなかで、2つ大きな出来事がありました。1つはソウル五輪の誘致が決まったことです。私の下宿のハルモニは熱心なプロテスタントで、キリスト教徒で反政府なんですけれども、その人もソウル五輪が決まった夜中、明け方ぐらいだったんですけれども、わざわざ僕の部屋まで起こしに来てくれて、たいへん喜んでいらしたのはいまでもよく覚えています。すぐに夜間外出禁止令というのが解除されました。それからこのあとソウル五輪に向かって私は韓国の民主化が順調に進展していった1つの予見として、条件として、このソウル五輪の誘致があったのかなというふうに思っています。

もう1つが1982年の春から夏に起きた第一次教科書問題です。これはもう皆さんご存じだと思いますので省きますけれども、当時はやっぱりソウルで下宿街でも夜、学校一部なんかに行っても大きな日本語でしゃべりあうということははばかれる雰囲気でした。教科書問題が起きたあとは、これは初めてでしたけれども、タクシーの相乗りを拒否されたことが2度ほどあります。この教科書問題を契機にして、日本で「アジアに対する戦後責任を考える会」というのが生まれています。「朝日新聞」の基本的なスタンスもそうだったと私は認識してますけれども、戦後の日本の歴史認識のなかで、戦前日本がアジア諸国に対する加害者であったという立場が、そう強く受け継がれてこなかったというのは、厳然たる事実だったと思う

んです。

大阪社会部で広島の被爆者の取材をしていたのですが、被爆者運動の主体は自分たちが最初の原爆の被爆者であるということ、もちろんそこから出発して世界の核兵器の廃絶を願うという崇高な運動ではあったんですけど、そのなかで戦前、8月6日原爆が落とされるまで広島がアジア侵略の軍事拠点だったという歴史の事実を正当に評価する、正当に評価すると言うか、まともに評価するという声は被爆者運動のなかには非常に少なかったと思います。韓国からこの教科書問題を突きつけられて、日本市民社会もしくは市民運動のなかで、加害、戦前の加害の立場というものに本格的に着目するようになり、そのなかで大阪の被爆者の取材も原爆を投下されるまでの広島の役割などについての連載が、私もしたんですけど、ようやく始まったとそういう流れです。

もう20分過ぎましたのでまとめに入りますが、お配りしたペーパーで2枚目に入ります。2枚目は日本語で書いてあるので韓国の方には申し訳ないんですけど、メディアは何も日本と韓国に限らないんですけど、メディアの基本的スタンスと言うのは、いろんな多様な視点で物事を立体的に見ると、徹底的に観察をして、そのなかからあるべき方向性というのを慎重に探ると言うのがメディアの基本的な姿勢だと心しています。ところが、やはり戦後の「朝日新聞」をはじめとする日本のマスメディアを、いまの時点で検証してみても、そうではなかった、不十分な点がたくさんあったと思っています。

イデオロギー、ナショナリズム、ステレオタイプの問題

まず戦後のなかで、イデオロギー、特に社会主義体制に対する過度な幻想から、なかなか逃れられなかったということです。先ほども申し上げましたけれども、「朝日新聞」のおそらく戦後の朝鮮半島の記事のなかで、最も手痛い失点の1つは、在日同胞の北朝鮮への帰国問題の報道の仕方だったろうと思います。私はソウルの特派員にキム・ヨンサム、YS氏のときに3年特派員をやらしていただいたんですが、そのころちょうど北朝鮮から韓国への亡命者が徐々に増えてくるという時代でした。亡命者、なるべく多くの人に会いました。あまり記事にはしなかったんですが、そのなかの1人が在日、日本で生まれ育って家族と一緒に10代の終わりにピョンヤンに行って、そして結局韓国に逃れてきたという人でした。

その人によると、一家あげて北朝鮮へ渡った理由はいくつかあるんですけど、その有力な理由の1つが「朝日新聞」の1面の報道だったと言います。当時は「朝日」だけじゃなくてほとんど同じ論調だったんですけども、北が社会主義の建国を進めていて、みんな平等で貧しいけれども平等で、理想に燃えてるといような情報がピョンヤンから発せられ、在日の団体からも発せられ、「朝日新聞」をはじめとする日本の新聞もそうした認識で北を現実よりよく紹介してしまったということだろうと思います。やはりイデオロギーにとらわれていたということだろうと思います。

それからやっぱりナショナリズムですね。「朝日新聞」はなるべくインターナショナルな国際協調主義に立脚したいというスタンスではあるんですけども、それでもやはり読者のほとんど100%近くは日本の読者であるわけで、日本という国籍、日本という地域性から無縁ではないわけです。ナショナリズム全部を否定するんじゃないありませんけれども、後ろ向きのゆがんだナショナリズム、あんまり健康でないナショナリズムからは、メディアというのは自由でなければいけないと思うんですが、最近の北朝鮮の拉致問題での報道、日本でのマスメディアの報道を観察していると、「朝日」は私は割合しっかりしてるかなと思いますけれども、非常に日本人の歪んだナショナリズムをあおるような論調が日本のマスメディアの少なからぬ部分にかなりあふれたというのは悲しいことだと思います。

あとはこれはあらゆる問題に関係することですけど、ステレオタイプって言うか、レッテル、ある物事に対して深く調べもしない、考えもめぐらさないまま、このことはこのことだというふうに疑わないで、レッテル貼りをしてしまう、ステレオタイプと言いますけれども、それについて言えば、「朝日新聞」もいまだに完全に自由ではないかもしれません。

「ニューヨークタイムズ」は皆さん世界のクオリティーペーパーだというふうに認識してらっしゃると思うんですが、私はソウルの特派員をやったあと、ボストンに半年ぐらいいたことがあるんですが、そのころの東京の「ニューヨークタイムズ」の特派員が送ってくる日本関係の記事っていうのは、かなりひどいものでした。日本の皇室とかいろいろあるんですけども、アメリカの人たちが日本にもっている一般的なイメージ、不確かかもしれないんですけども一般的なイメージ、それに合わせるような、もしくはそれを増強するような、そうした視点の記事がかなりありました。私

がボストンを去ったあと、アメリカに住む日本人のかなりの人たちが「ニューヨークタイムス」のザルツバーガー・ジュニアに、あまりにも日本に関する報道がステレオタイプで歪んでいるので抗議をしたんですけども、その場ではザルツバーガーは「わかった」、「わかった」と言ってくれたそうですが、うちうちでは「それでもあれは読者に人気があるから、あれはあれでいい」とこう言ったそうであります。日本とアメリカの関係でさえそうですのに、より近くておたがいに歴史的にも誤解しやすい韓国と日本、日本と韓国の人々、それからメディアというのは、よほど心しなければいけないことなんだろうなというふうに思います。

2国間でない視点、そして多様なチャンネル

もう時間がオーバーしちゃったんですが、あと5分だけいいですか。今後の課題のなかであと3つぐらい書いてあるんですが、私は特に強調したいのは日本と韓国、韓国と日本という2国間でおたがいを見詰め合うということも非常に大事なんですけども、2国間の関係をむしろいまの地球、さまざまな温暖化とか、環境破壊とか、エネルギーの不足とか、それから民族の浄化とか、いろんな課題を抱えているいまの地球の中での日本と韓国の関係とか、それから中国が地域大国化して、たぶんあと半世紀ぐらいするとアメリカとこの地域で覇を争うような立場になるかと思いたくても、そういう状況のなかで相対的に国力の小さい日本と朝鮮半島、韓国がいったいどうやって生きていくのか、おたがいに手を結び合える点はあるのかどうか、そうしたこの東アジアの地域のなかでの日本と韓国、韓国と朝鮮半島の関係、そうした単に2国間関係でない、もっと広い空間、コンセプトのなかでの両国関係を考える視点が今後ますます大事になってくるだろうというふうに思っています。

それで日本と韓国の関係というのは、交流チャンネルの多様化と書いてあるんですが、非常にいろんな人が日本と韓国のパイプになって、いろんな人たち、組織、個人がなっていて、マスメディアの位置というのは、役割というのは、相対的に私は小さくなっていると思います。しかしネットで若い人たちが自由に自分の思いを発信できるような時代にはなっていますけれども、しかしいろんな輻輳する、事実かどうかもわからない、それからもっと多様な角度から見たほうがいいのか、いろんな輻輳する、それから量としても多くなる情報を、きちんと整理をして、それから市民

団体やNGO、それから学生の皆さんから自治体の交流とか、そういうもののありようというのを正確に評価をして、紙面で紹介して、そうしたメディア以外の多様な日本と韓国のチャンネルをもっともっと広げていく、いいものにしていくという役割は決してなくならないだろうと思います。じゃあ、時間オーバーしてますので、このへんで。(拍手)

「基金」 メディアというのは、いろんな意味で自由をめざすというふうなことをやっていると思うんですが、いろいろ問題もあったというふうな正直な話と、具体的な経験もお話しされました。割合このテーマに人気が高く、希望者が多かったのです。では質問なりお話を、金忠植支社長からのまとめたお話をあいに挟むというのはいかがでしょうか。学生からどんどん質問を出してもらって、支社長も、あるいは小菅さん、吉野さんと交代していただくというふうに。じゃあ、学生のほうから聞きたいこと、はい。

鬼原 きょうは、どうもありがとうございます。明治大学の鬼原と申します。先ほど清田さんのお話で、交流チャンネルの多様化ということがありました。それで、この紙を見ると1980年代後半から1990年代にかけて、どちらかと言うとソフトな部分と言うか、草の根的なそういう交流のチャンネルというのが増えてきているのかなと思います。そうした流れのなかで日本のマスメディアと韓国のマスメディア、それぞれの役割というのは端的に言うと、どういった協力関係がもてたりとかっていうのはするのでしょうか、お願いします。

金忠植支社長 私が初めて日本に来たのは1985年です。そしてその当時の韓国と日本の関係というのがとても冷たい感じ、まあ冷え冷えとした感じでした。そしてその当時のチョン・ドファン(全斗煥)大統領、そして中曽根総理の共同の同意文書の中に、両国間の記者交流をして、記者のあいだだけでも両国間の理解を深めてはどうかというような協議が出たわけです。そして韓国の記者15名ほどを日本政府が招聘し2週間ほど日本を研修してまわるというプログラムも始まりました。そして反対に日本の記者たちを韓国政府が招聘し、韓国を紹介するとういうような、そして視察をしてもらうとういうようなプログラムも始まりました。そしてその当時はもちろん政府の一義的な、そして任意による、そういった交流プログラムという形で始まりましたが、そういった記者同士の交流がだんだん市民レ

ベルでの交流というものにつながってきた部分もあるかと思えます。

それで20年ほど過ぎた現在に至りましては、そういった交流の幅が広がったことによって、午前中皆さんがお話になったキムチが日本でも流行し、はやって、そしてキョウルヨンガ、「冬のソナタ」が一大ブームを呼んだというところまできているかと思えます。ただいちばん最初に、そういった市民レベルの交流につながる記者交流というものが始められて20年近くなると、ジャーナリストの交流がずっと続いてはいるのですが、本当の意味で両国の記者が共感し、おたがいを認定して、そういった記事を書いているかということについては疑問の念が残ります。

皆さんにお配りしたこの記事が8月20日、先週の金曜日「読売新聞」に出た記事です。この記事を読んでいただければわかるかと思えますけれども、こういった日本人たちの認識を左右する大きな一大新聞が、こういった記事を書いているということで、疑問の意を抱かざるを得ないというお話をするんです。つまり韓国、北朝鮮、中国は反日思想しかないというような報道、論調です。そして日本が東アジアの共同体をつかって、協力して生きていこうというような話については、それは間違っているというような話も出てきます。つまりアジアの人たちと手を組んで協力していこうというのは、このぐらいにしようという論調です。東アジア共同体というのはお金ばかりかかる幻想的なものだというような論議です。そして北朝鮮との国交正常化交渉は急いではないという。

私がおなかで深刻にとらえていることの1つといたしまして、こういった論調で、例えば普通の日本人たちが、平凡な庶民たちがそういった話をしているのであればそれほど問題にはならないと思うのですが、そしてこういった論調の記事の語り手というのが東アジアの思想史を学んだという50歳過ぎの学者であったということ、そしてこの記事を載せたのが、「朝日新聞」とともに大きなメディアである「読売新聞」がこういった形で載せたということの問題にしたいと思えます。

ここで私が主張したいのは、一般、草の根的な庶民のあいだでは韓国のキムチもはやりますし、好きですし、ヨン様、ペ・ヨンジュンと言う人、1人のアジアの俳優として好きだという気持ちももつようになりまして、韓国について1つの対等な外国として認められるようになったということです。つまり最も感性的、そして感情的な一般市民の場合が偏見なしで韓

国を対等として見られる、韓国を好きになれる、そういう人にこう様変わりしたと、庶民が様変わりしたということです。逆説的にもっとも理性的に物を考える学者、そして国と国との関係について健全なる関係を図らなければならない新聞、そして冷静と、国と国との関係について報道をしなければならない新聞の場合、かえって最も感情的になっているということです。

感情的、偏向した記者・知識人に警戒

したがいまして、これまで申し上げましたように、草の根的な、市民的な交流においては、より進行するだろうし、そして拡大もされれるとは思いますが、しかし日本と韓国の両国関係について偏った知識のもとで感情的に解釈をするマスメディア、またはそういった知識人についてはかえって警戒を高めなければならないと思います。もちろんこれは日本の知識人、日本の記者のみに限られたことではなくて、

韓国人記者に対しても偏った反日感情に走っている人とか、またそういった記者もいまして、私はそれも心配しておりますし、またそういった記者を論ずることもありますが、そういった韓国の記者についても同じようなことは言えると思います。短い質問に対して長い答弁になってしまっていて、申し訳ありません。

小菅 いまのメディアを中心にした日韓、韓日の関係の金支社長のお話を聞きながら、私もちょっと思い出したことがあるんです。私自身は1990年から1991年にかけてヨンデ（延大）の語学堂で言葉の勉強を少ししまして、特派員としては1998年から去年の3月までおよそ5年間ソウルに勤務しました。清田本部長のメモにある時代区分によりますと、4番目のキム・デジュン時代と5番目のノ・ムヒョン時代の出発までいました。

そこで私が実感したのは、1990年以来韓国を行き来してきた身からすると、1998年以降の日韓、韓日関係の本当の意味での深まりの始まった時代ではなかったかと思えます。それで日本の側、日本政府、日本の政治家から過去いろいろ問題は出てきましたけれども、一方で韓国の歴代政権も自分の内政問題の困難にぶつかるると反日カードを使って状況を変えようとする試みも見られました。それを質的に変えようとしたのが1998年のキム・デジュン大統領の公式日本訪問だったのではないかと思います。

キム・デジュン大統領に対する評価はいろいろ韓国内でも分かれていま

すけれども、この1998年の訪日の歴史的意義は否定できないだろうと思います。小渕首相とのあいだで発表した共同宣言で、日本は過去の植民地支配をまじめにお詫びして、そのうえでキム・デジュン大統領は韓国の政治指導者として初めて戦後日本の歩みを評価しました。その共同宣言はそのうえで歴史を誠実に認識したうえで、未来に向かってパートナーとしてともに歩んでいこうということをうたうものでした。その当時から見て4年後に迫っていたワールドカップの日韓共催がすでに決まっていたという効果もあっただろうと思います。

これは日本側の問題ですけれども、そのあと2001年になって小泉首相の靖国参拝と教科書問題が出てきました。日本と韓国の首脳会談はときどき開けてますけれども、この靖国問題によって日本と中国との首脳会談は開かれる状態になっていません。1998年の訪日以降日本と韓国のメディアの記事、論調でも、事実に基づいた冷静な分析なり、報道が多くなったと私は実感しているんですけれども、この靖国、教科書問題が起こった以降、以前のまた反日、日本批判、逆に日本からすると韓国に対する、またいつまで過去をもち出すのかという批判が再び出てきたという事実もあります。

このような政治の世界における一進一退、それとメディアの世界も、日本もまだそうですが、日本以上に韓国もメディアというのは権威主義的な存在ですので、それも政治の世界と一緒に同じように一進一退をしているという状況は否定できないだろうと思います。特に日本のメディアの場合、韓国の問題、それから特に北朝鮮の問題で論調が激しく分かれるという現象も出ています。

そういうような政治なり、権威、あるいは既成組織のこういう状態を越えて私は注目すべきというか、期待できるというか、明るい展望を抱けるのは、先ほどから出ているいわゆる市民たちの往来、交流です。今回の皆さんのような学生フォーラムという催しもそうですけれども、国家なり、政府の枠を越えた、いわゆる市民たちの交流、行き来、それを太く深くしていくことによって、そうすれば、たとえ政治の世界で変な言動があったにしても、関係が揺らぎにくい、もっと強い、本当の意味での関係ができるのではないかと期待しています。そういうことをより可能にするための、それこそわれわれメディアの役割というのは重要ですし、そのために力を尽くさなければいけないだろうと自覚しています。

自由と民主主義を共有する日韓の役割

経済を中心としてこれだけグローバル化が進むなかで、韓国も日本も一国だけでは世界の中で何も対応できない状態は現実としてあります。特にアジアの中で見ると、日本と韓国というのは手を結んだほうが良いと言うよりも、手を結ぶしかないという現実があります。1つには自由と民主主義というイデオロギーの共有、それから市場経済で社会を運営しているという共通点、それから広いアジアのなかで経済規模的にいちばん近いのは日本と韓国しかないのです。そういう状況ですから、逆に言うと手を結びやすい間柄であるわけで、そういういい条件を生かしていかないことはあまりにもったいないのではないかと思います。

もう少し短く言いますと、例えば「冬ソナ」現象とか、キムチ、韓国食ブームとか、いろいろありますが、僕はそれで別に決してやゆすべき問題でもないし、極めていい傾向だと思うんですけども、重要なのはこの現象、ブームからどう中身のある、おたがいの理解につなげていくかという、その個人、個人の努力だと思います。それで、来年、2005年が日韓、韓日正常化ちょうど40年にあたるわけですし、日本政府、韓国政府ともに来年をめざして「日韓友情年」という位置づけで、それぞれに両国に実行委員会をつくりました。その日本側委員会の委員の1人に劇作家の平田オリザさんがいまして、彼が言ってたことですが、来年は40年と同時に100年であり、1905年というのは日本がロシアと戦争してかろうじて勝って、そのあと、当時大韓帝国の外交権を奪う、第二次韓日協約を結んだ年です。それが5年後の韓国併合、日本の植民地支配の完成にいくわけです。

それで平田さんが言うには、日韓、韓日40年を祝おうとするならば、少なくとも日本側はそういう事実を知ったうえで40年を祝うことがマナーである。そうでなかったら、その日韓友情年、来年はより失望が大きいと言うか、私はそっちのほうを懸念すると彼は言っていました。韓国では現在、植民地支配を受けていた時代の親日派、反民族行為をどうするかという問題が大きな争点になっています。日本でも韓国についてどれだけ知識が深まっているかということについて私は自信はありません。ですから、いまこそ歴史的事実に基づいて、おたがいのことを冷静に知るっていうことがより重要になってきているのではないかと思います。

大きく変わる「在日コリアン」と歴史

金永振 はじめまして、慶応大学に行っている金永振と申します。三世になります。ペ・ヨンジュンブームとか韓国がいま日本のなかでブランドがすごく上がっているということと、北朝鮮が拉致問題以降にすごい叩かれていているということに関して、じゃあ、個人的な意見を述べさせていただきますと、ご存じかと思いますが、日本で在日コリアンの教育を受ける場所というのは、だいたい朝鮮学校になってます。朝鮮学校で、在日コリアンの学生たちが自分たちの民族心だとか言葉を学ぶ場というのが朝鮮学校以外にあまりないという状況のなかで、北朝鮮の拉致問題が起こったときに、よりいっそうそこに通う学生たちがどんどん減っていくということになります。

そうするとどこへ行くかということ、普通の日本学校に行くわけですが、日本学校では、やはり通名を使う人がとても多いです。そうするとどんどん自分がいったい何者かということ学ぶ場が減っていっていると。その一方で韓国ブームが大きくなっていますので、実際にいま在日コリアンの土壌というのは、そうした朝鮮学校を主体にしてつくられているわけですが、自分が大して深く考えもせずに自分は韓国人だという考え方もつ人も少し増えています。

そういうなかで僕は感じているのは、このままいくと本当に在日コリアンというのは、ちょっといままでの形とは変わったものになるのかなというふうなイメージがあるんですけども。それともう1つ付け加えるとすれば、いま韓国からニューカマーと言うか、韓国人の方がいっぱいこっちに来て、どんどんコリアンというのが、いままで言ういわゆる在日コリアンではなくて、韓国人というそういう人がどんどん増えていって、彼らの子どもたちもまた、いままでの在日コリアンとは違った形で、数は少ないですけども増えてきています。

そういうことを見るとやはりいままでの在日コリアン一世たちが歩んできて、二世が歩んできて、いま僕は三世ですけども、どんどんそういう在日コリアンというものが消えていくのではないかと、そのなかで消えていくにしても、いままで一世、二世、三世たちが抱えてきた問題だとか歴史というのが、実はそんなに記録としてちゃんと残ってなかったり、学ぼうとしてもなかなか学べないという状況があって、そのまま1つ歴史という

のが消えてしまうのではないかなというのが僕の意見としてあります。そのへんに関して、もし何かご意見あれば教えていただきたいと思います。

吉野　なかなか、いきなりむずかしい質問を振られてしまって私もちょっと困っておりますが、答えられる範囲でお答えしようと思っております。

いま在日一世が抱えてきた歴史、そういったものがどんどん日本と朝鮮半島の荒波のなかで消え去ってしまうのではないかなという問題提起だというふうにかがいました。結論から言うと、私は少し楽観的にとらえています。実はいま「シュリ」「JSA」に始まって、「ブラザーフード」とか「シルミド」とか韓国の映画がだいぶ人気を呼ぶようになりましたけれども、その陰で実はそれほどメジャーではないんですが、あるドキュメンタリー映画が実は静かな反響を呼んでいるということをご存じでしょうか。

そのドキュメンタリー映画の題名が3編あるんですが、まず「海女のリャンさん」という映画でして、日本の終戦直後の朝鮮戦争に至るまでの動乱の時期に、チェジュ島から大阪に渡ってきた海女さんが子どもたちを韓国と北朝鮮に分かれて、自分は日本で仕送りをしながら暮らしてきた、その50年の物語という、簡単に言えばそういう話ですね。それからあと「ハナハンメ」とか「haruko」という映画もいま実は静かな人気を呼んでいる作品であります。これらはすべて在日一世が歩んできた普通の生涯で、在日の人に聞いてみると、こういう激動の、私から見ると本当に激動の生涯、なんてドラマチックな人生だと思うんですが、在日の人に聞いてみると、別にこういった人はそこら中にもいるよというふうにみんな言うわけですね。問題は、じゃあ、そういう映画がなぜいま人気を呼ぶのかということなんですけれども、私はやっぱりこの一連の日朝首脳会談から拉致問題に至るまでのそういった経緯というのも、少なからぬ影響を与えているんじゃないかというふう実感として思います。

そこでやはり拉致問題が明らかになってから、日本では相当な量の北朝鮮報道というものがテレビのワイドショーを中心にどうしてもあふれかえりまして、なかにはと言うか、大部分そんなに質の高いものではなかったというふうにわれわれは思っています。そういったものが世論を沸騰させ、われわれもやっぱりなんとかそれに呼応した、しっかりとした視点を提示しようと思ったけれども、提示できなかった面も確かにあるわけです。

「朝鮮半島」「在日」にも目を向けて

しかし重要なことはそういった報道のなかで、かなりそれまで関心ももたなかった人たちが、こうやって朝鮮半島、北朝鮮とか韓国とかそういうものに目を向けるようになり、なかで在日の生涯というものにも目を向けるようになった。だから恐らくこの映画、5年ぐらい前だったらたぶん帰国事業とかそういったものに関して、はっきりと自分の皮膚感覚として理解できる日本の観衆ってほとんどいなかったと思うですよ。ただいまは、そういったものもある程度乗り越えた形でみんな観ることができるということは言えるんじゃないかと思います。

そういったわけで、消え去ってしまうのではないかという危惧もわからないではないんですが、確実に私はその日本と朝鮮半島の関係というのはなんらかの形で前に進んでいるものだというふうに思っているんです、まあそう信じたいと思います。ですから、やはりそのなかで、そういったような在日しかできない役割というのも、確実にあるはずなんですね。だからそういったものを見失わずに信じて、そういったことに関わり続けていただけるとありがたいと思っています。

蛇足として付け加えますが、私も10年ぐらい前に皆さんと同じような形で、日韓学生会議という学生の交流団体に参加していたことがあります。そのときは最も重要な課題というのは歴史問題について語ることでなく、最大の問題は人集めだったんですね。ですから、そういったことでも別に日本と朝鮮半島の関係は決して後退してないというふうに、今回、名簿を見ましたところ、本当にいろんな大学の方が集まっていることに私はちょっと、そういう意味でもびっくりしましたし、当時はそういうことに関心をもつ大学自体が決まりきってましたから、ですからこういった催しを契機に、なんかもう一段どんどん踏み込んでいってほしいなというふうに思っています。

「基金」 北朝鮮の映像がどんどん日本で流れています。報道と感情といったテーマも今回設定しているのですが…。

許珠賢 西江大学からまいりましたホ・ジュヒョンと申します。いまお話しされました北朝鮮に関する映像問題については私自身、個人的にちょっとよくわからないので、詳細な説明をすることは無理かと思っています。私は映像大学院で勉強していますけれども、私の研究分野はコミュニケー

ションチャンネル、コミュニケーション関係というものでありますので、私の専門と関連していくつか質問させていただきたいと思います。

市民レベルの交流とメディアの役割

本日「朝日新聞」の関係者の皆さま方、そして「東亜日報」の支社長の方の日韓関係について、日韓関係の歴史と関わるいろいろな事件とマスコミの役割ということについてお話をうかがうことができました、私なりにまとめることができたので大変うれしく思います、心より感謝します。

まず私の質問を整理しますと、環境の面におきましては政治的、そして歴史的な事件から、いまは生活面への日韓関係というものへと変わってきたと、そして国のレベルの交流から民間の、市民のレベルの、民間交流のレベルに変わってきたというふうに現在の日韓関係をまとめることができるかと思えます。では、そのなかでのマスコミ、メディアの役割は何なのかということについて疑問があります。市民、個人の個々の努力は必要なのですが、いまだに反日、また嫌韓というようなことがいまだに存在しています。このようななかで、これに莫大な影響力をもっている既成メディアでは、どういうふうにこういったものを解決していくため、メディアの役割はどんなものなんだろう、これが1つ質問であります。

そして2番目の質問は、日本も韓国も共通的に、今後はニューメディア、つまりインターネットとかモバイルフォン、モバイルによって交流が行われていくだろうと思われます。こういったニューメディアを通した市民レベルの、民間レベルの交流が行われると思えますが、こういったなかでのメディアの役割というものはどんなものだろうか、というのが2番目の質問です、以上です。

金忠植支社長 では、はじめの部分について私の考えを申し上げます。韓国を見る日本の記者たち、そして日本を見る韓国の記者たち、そのマスメディアで働いている記者たちの見るとういのは常識的に、そして平均的に見れば70%ぐらいがたいへん改善されていますし、正常であり、そして健全な視角からものを見ています。問題は残り30%以下の記者たちの考え方、発言の仕方、そういった点にあると思えます。

私がいま70%、30%という数字を申し上げたんですが、それは私の主観に基づく言い方で、もしかしたら、その30%が3%に過ぎないかもしれません。つまり、ごく少数の人たちの主観的な認識が問題になるわけです。

つまり、ごく少数の人たちの主観的な認識がなぜ複雑な問題を引き起こすかと言うことなんです、彼らは要するに、自分たちがもっている価値観、そして哲学、そして考え方というものを、例えば常識とか、それから健全な考え方をもっている人たちに対して聞く耳をもたないというところが問題です。

韓国と日本のあいだには暴言そして謝罪ということが常につきまとうわけですが、つまりいままでにおきまして、天皇であるとか、総理が歴史について、いままでの日本の韓国に対する歴史について国民の97%の意を汲んでそういった形で歴史について謝罪をしたことも何回かはありました。そのすぐあとに一部の政治家、…麻生太郎という政治家が創氏改名は韓国の人たちが希望したからというような暴言をしました。そして、やはりコミュニケーション面での問題になるわけですが、麻生太郎氏のそういった暴言がきちっと報道されませんでした、日本側で。韓国ではそういったことに対する暴言だという反応がきちっと大きく報道されました。

偏った考え方、韓・日ともに減った

つまり、要するに日本の側からすれば、例えば暴言はきちっと報道されず、政治家や天皇や首相が謝罪したことについては報道されるということで、韓国側メディアもそれを問題にするわけです。そしてマスメディアで働いている新聞記者の人たち、そしてテレビ、放送のそういったマスメディアで働いている大部分の記者たちは、国際的な感覚をもった健全な考え方をもった人たちです。ただ、先ほどもこの「読売新聞」についてご紹介しましたように、こういった学説を紹介するような新聞、記述ともあるということで、やはりそういった問題点が残るわけです。

つまりごく少数の偏った考えをもった記者たちによる報道、あるいは論者によるこういった記事というものを今後どうしていくかというのが、そのほかの記者たちの悩みでもあり、マスメディアの悩みでもあるわけですが、それを両国がおたがいに考えていく。ただその数字のうえではそういった、偏った考え方をもった人たちというのは日本でも韓国でも減ってきているというので、そういった点ではいい方向に向かっているのではないかと思います。

そして2番目の質問であるニューメディア、新しい携帯などを通じての交流については、私が深く考えたことがないのでここではちょっとお答え

はしませんので、そういったことで2番目の質問に対する答えに代えさせていただきます。

小菅 私も自慢じゃないんですけど、機械音痴な人間なもんですから、ニューメディアの話についてはほかの、たぶん吉野君あたりが詳しいんでしょうから彼に譲るとして、市民交流が増えていくなかでのメディアの役割について、金支社長のお話に付け加える形で、若干、意見を述べさせてもらいたいと思うんです。現にメディアの側にいる人間として自覚すべきというのか、反省すべきだと常々思うのは、清田本部長のメモにもあるように、ステレオタイプの思考からの脱却だろうと思います。

日々の仕事はそれこそ時間に追われてやってるわけですから、深く資料を集め、読み込み、考えるという時間的余裕もないまま仕事をするのがほとんどです。まあ、そんななかで、例えば日韓、韓日間でむずかしい、感情も交える問題が起こった場合、われわれ記者とすれば、それはもう反日感情のせいだ、あるいは反韓感情のせいだと決めつけて記事を書くほうが書きやすいわけです。こういう姿勢は読者に対して、たがいに誤解を深めたり、関係が悪化することにもつながりかねない悪循環に陥るだけだろうと思います。それで読者なり、あるいは放送の視聴者というのは、かなり昔のように一方的に報道や論評を受け取る側ではなくて、われわれが伝える記事なり、論評なりを、きわめて批判的に見るようになってきていると思います。われわれとしてそれを自覚して臨まない限り、ますます読者、視聴者から見放されるだけになるだろうと思います。

あともう1つ私自身の経験も含めて申しますと、いままでの、例えば私がソウルに駐在していたときの報道というのは、ある問題に対して韓国政府が何を考えているか、どういう政策を立てているか、あるいは国際問題に韓国政府がどういう反応をしてるかという記事がより必然的に多くなりました。そういうふうな既存の権威、あるいは政府というような硬い部分の反応に対する記事が主体なもんですから、いきおい、例えば韓国のいま社会はどうなっているのか、普通生活してる人たちはどのように生活をして、何を考えているのかということに対する報道は、極めておろそかになっています。

たがいの交流を深めたり、おたがいを知るためには、そういった部分の報道がより多くされないと、なかなか進まない面もあるだろうと思います。

現在のようにたがいに直接訪問することが簡単になったり、このように両国の学生が交流するという機会が増えていますけれども、これはすべての人間が簡単にそうできるわけじゃなくて、やはり普通に生活している人たちが日本や韓国について知る機会というのは、やはりメディアを通じての情報、報道が第一だろうと思います。そういったことがメディアに課せられた役割の1つではないかなと思っています。

吉野 きわめて本質的な質問で、私みたいな若輩者が答えるのはなんとなくはばかれるのですが、答えろということなのでお答えいたします。

実際のところ日韓問わず、こちらにおられるご三方はじめみんなその問題について悩んでいて、しかもなかなか答えが見つからないというのが実情なんですけど、そのなかでもと言うか、確かに実際インターネットが発達するなかで、僕らの仕事もずいぶん変わりました。私が記者になったのは1997年のことなんですけど、まだそれほどインターネットって一般的ではなくて、ただやはり、年がどんどん経つにつれて、インターネットを使った取材とか、インターネットを見て記事にするというようなことがどんどん多くなっていっていることは確かに事実です。私もちょっと今年の4月に1カ月ほど韓国に出張で取材をしていたんですけど、そのときにやはり実感したのは、韓国はもうすでにブロードバンド大国という言葉が定着しつつあるほどの、インターネット先進国です。…本当に、昔だったらちょっと電話をかけて担当者をつかまえないきゃいけないような話が、すぐにインターネットでできるといような、場合によってはふだんソウル支局でよく観てる聯合ニュースという韓国を代表する通信社があるんですけど、そのニュースもインターネットを通じて観てもさほど変わらない。だからそうすると結局、記者が観ているのと、一般の人が観ているのとか、ほとんど変わらない状態で自分たちが仕事をしているという状況にいまなっているわけなんです。

インターネット情報の量と質

そういったなかで考えたことがやはり2つほどあるんですけど、ではどうすれば新聞はインターネットとうまくやっていけるだろうかということを考えてときに、1つはやはりインターネットというのはあらゆる情報があるように見えて必要な情報ほどないという、もういろんな人が欲しがらる、絶対聞きたい核心の一言というのは絶対にインターネットには載っていない

いとか、そういった便利ではあるけれども、実は完璧なメディアではないというところで、やはり新聞、実際現場の新聞記者がどうやって取材しているかと言うと、非常に最もそういったデジタルとはほど遠いところです。特に重要な話になればなるほど、やはり対面で取材する、取材して聞き出す、聞き出すために相手をつかまえるためにどうしようかとか、家の前で待っているとか、夜遅くまで家の前で待っているとか、そういったことが結構重要になってくる取材でもあるんです。だから結局そういったもの、つまり新聞でしか見られないものというのを追求していくと、つまり結局そこに行き着くんじゃないかというような気が最近、まだ確信はもててないんですが、そういう気がしています。

もう1つ、インターネットも言ってみれば活字メディアですが、やはり字に、活字メディアって言うのは、なかなかだれでもできることじゃないなというところがあります。つまり僕も記者になってそんなに長いこと経ってないですが、記事を書くためのやはり訓練というのは一朝一夕には身に付かない、だからインターネットでどれだけ情報があふれていようと、やはりそれをどう整理していくのかというところで、まだまだ新聞とインターネットって、そうそうインターネットがなかなか新聞に追いつけない情報の質という面では、まだまだなかなか大きな差があるんじゃないかというふうに思っています。この話はたぶん続けると一晩かかっても終わらないと思いますので、とりあえずこのくらいで許してください。

柳智星　こんにちは、韓国外国大学タイ語学科に通っているユ・ジソンと申します。それで朝日新聞社の関係の方たちが先ほどお話をさせていただいたなかで、やはり一般市民たちの交流がきちっと発展していき、その相互関係としてメディアの役割もきちっとしていくというようなお話もありました。そしてメディアがそういった役割を果たすことによってさらに市民交流が深まるというお話ですが、やはり歴史の認識など、歴史に関する情報ということについてメディアの果たす役割は大きいと思います。

そういった意味で「朝日新聞」はおたがいの歴史に関して、日本国内のなかにあるきちっとした権威のある機関として一般の市民に、歴史はこういった形で、歴史はこういうものですよということをきちっと言論の自由が認められているのかという点。それから、両国のマスメディアの協力というような話もあったので、やはり朝日新聞社で今度、私の提案になる

わけですけれども、古朝鮮時代に始まって、古代史に始まって韓国の歴史についてシリーズ物を載せてはどうかという提案をしたいと思いますが、いかがでしょうか。

金支社長 この質問については「朝日」の代わりに私が回答するほうがいいのかと思って、まずお答えします。なぜ私が回答するかというと、世界的に模範的なケースとして「東亜日報」と「朝日新聞」はいい関係にありますので、私が代わりに答えてもいいと思ってマイクを持ちました。

まず最初の質問については、過去に韓国においてはマスメディアの弾圧というようなこともあったので、そういった質問をされたかと思うのですが、日本においては言論の自由というのに対して、権力によって弾圧を加えるということはないわけですから、自由が保障されています。

つまり例えば2番目の、要するに一般市民に歴史をどういうふうにしちっと伝えているかというような質問についてお答えさせていただければ、「東亜日報」が日本の皇室、天皇について125代全部きちっと連載したと同じように「朝日新聞」もきちっと報道していると思います。そして檀君おじいさんが日本の天智天皇にあたるぐらいの、そういった古い歴史をもつわけですから、そういった意味で日本がそういった天智天皇であるとか、昔の人についてあまり関心がないので、韓国の古代史について報道するというのはあまり関心がないかなというようなことで報道されていないのかと思います。以上です。

小菅 エールに答えて、私のほうからもお答えさせていただきます。言論の自由が日本において完全に保障されているのかというご質問ですが、目に見える形での干渉、それに対してなんらかの影響受けるということは、恐らくいまの日本のマスメディアの大半はないんだろうというふうに思っています。ただ水面下でいまの政権もそうですけれども、歴代そうだったと思いますが、最近強まっていますけれども、日本のマスメディアの言論活動になんらかの縛り、抑制をかけたいという思いがかなり根強くありまして、陰に陽にそうした法案、法律づくりをときどき試みるという事実も否定できません。特に日本の場合で言いますと、テレビ放送、地上波ですね、テレビ放送局は政府からの免許制度になっていますので、その免許を取り上げるというような究極的な脅しというのはありうるわけです。ですから、根拠が薄い政府批判、政権批判などがあった場合は、非常に水面下

も含めて、個別の放送局に対して政府のほうから、かなりいろんなはたらきかけが繰り返されてきたのは事実です。

言論の自由と内外の制約

清田 これは非常にむずかしいんですけども、メディア論をやっている方もいらっしゃるの、あえて付け加えますと、言論の自由の制約というのは必ずしも外からだけくるわけではありません。放送だけではありません、例えばアメリカは言論の自由の本家みたいな国ですけども、いまのアメリカでは紙メディア、テレビ放送を含めた寡占化が非常に強く進行しています。それは場合によっては数少ない経営者、個人の考え方、嗜好性とか、もしくは経営にとって有利であるか不利であるかという物差しが言論機関の内部ではたらいってくる可能性があります。ですから、日本の場合もそうですけれども、必ずしも100%安心して、楽観してはいけなんでしょうというのがわれわれマスメディアで働く者の自戒しているところです。

それから、韓国の歴史の檀君からの話なんですけど、私は個人的にはたいへん興味をもっています。ただ歴史の解釈ですから、これむずかしいんですけども、現在の国を愛すると言うか、民族、自民族に対する強い愛着、それから誇りと、古代の歴史的な史実とが不用意に結びつけられると歴史、自分たちの自らの祖先の歴史を歪めてしまうことがあると思います。ですから、神話はその民族のオリジンの精神を伝えるうえで非常に興味深いものですけども、神話は神話、史実は史実と、厳然と区別をしていかなければいけないと思います。

その点においては日本のいまの国内でも神話時代の内容を史実として改めてフレームアップしようとする動きがないわけではありません。それから韓半島においても、韓国でも北朝鮮においても、例えば古朝鮮の存在規模、勢力などについて、やや誇大に大きくとらえる流れがないとは言えないというふうに私は認識しています。それで韓国と日本、韓半島と日本の古い歴史で言いますと、「朝日新聞」は比較的丁寧に伝えている新聞だと思います。

私たちが新聞記者になった30年ぐらい前のころは、日本では古代の文化は大部分が中国からきたという受け止め方が学会でも強かったんですけども、その後、韓半島、朝鮮半島の影響が非常に強い、中国オリジンの

ものもあるけど韓半島経由できたものも多い、そうした最新の古代史の発見などを、その都度、企画ではないんですが、その都度しっかりと読者には伝えてきてると思います。

あと先ほどニューメディアのお話があって、私はアナログ族なので無謀なちょっと補足をさせていただきます。ニューメディアが非常に韓国は最先端をいって、日本、アメリカが追っかけているという形だとは思いますが、ニューメディアが社会に広く深く浸透したときの情報伝達のあり方、それをどう咀嚼して、おたがいに役に立つというような情報源としてくかと、いけるかどうかというのは、その国の成熟度、特に民主主義の成熟度に、私はかかっているのではないかというふうに思っています。

1つ例を取ると、韓国に、ソウルに「オーマイニュース」というネット新聞があると思います。日本の学生さんご存じだと思うので説明は省きますけれども、日本でも「朝日新聞」の政治部記者をしていて、その後、鎌倉の市長になった人がオーマイニュースを見学して、日本でも同じようなものをつくろうと思って、実は去年かな、去年の春ぐらい同じようなネット新聞を立ち上げました。韓国は成功して順調なんですけど、日本のはうまくいってません。いろんな理由があると思うんですけど、僕は韓国は市民というか、有権者が現実の政治や自分の身のまわりのいろんな問題に対して、より切実なものとして感じて、とらえていて、解決をしなきゃいけないことに対しては真剣に考えるという深さが、日本の社会に比べてあるんだろうということだと思います。

韓国は非常に戦後の苦しい歴史のなかで自分たちの血と汗で民主化を勝ち取ったわけですね。ですから、現実の政治に対して自分たちのものだと、身近なものだという意識がまだ強いんだろうと思うんです。日本も明治維新以来120年ぐらい経つんですけども、もちろん大正デモクラシーという時期もありましたが、それが太平洋戦争に突入していくなかで、自前の民主主義が中途半端な形でしか育たなかった、という歴史的背景があると思っています。もちろん戦後長い時間が経ちましたので、独自のさまざまな芽も出て実ってきてはいるんですけども、総体、全体として見ると、現実の政治に対する距離感が韓国よりは大きいのだと思います。いまのところ日本でのニューメディア、特にネットですけども、プラス面もありますけど、マイナス面も強く出ています。マイナス面だけではな

いんですけれども、1つは責任のない書き込み、サイトが根も葉もないような人を中傷したり、隣国や離れた地域の途上国の人々を辱めたりとか、そういったルーモア（ウワサ）とか、デマを大量に流し、それが半ば事実であるかのように伝播して伝わっていくという傾向があるのは否定できません。

見る・判断する鍛練、修練

ですから、既存のメディアはいろんなでこぼこはありますけれども、それなりの物事を見る目とか判断する視点などについてはかなりの鍛練、修練をつんでいますが、ニューメディアについては自らのモラルというものを、これから自分たちでつくっていかなきゃいけない、大きな宿題になっていると思います。ただ2チャンネルは地獄耳で、私がここでしゃべったことも、なんかどっかで抜けちゃうかもしれないので、ぜひ秘密にしておいてください。（笑）

「基金」 ちなみに「東亜日報」では、日本語にしてインターネットで出しています。そして「朝日新聞」もasahi.comに英語のページがあります。

ここでイー・ウォヌン先生、お話しくださいますか。

李元雄教授 私は韓国・関東大学のイー・ウォヌンと申します。学生たちの顔を見ると、もうここが限界かなという感じです。それでも私がこうやってマイクを持って立った理由としては、まず、たいへんきちとしたメディアである日本の朝日新聞社の方々、そして関係者の皆さんが忙しい中、お時間をつくっていただいたということで、そのお礼といたしまして、韓国の学生の特徴について、ちょっと簡単に説明させていただきたいと思えます。

いま13名の学生が韓国から来ました。私たちはいま日本の右傾化についてたいへん心配をしております。つまり、いまこういった状況のなかで、今後の韓日関係の未来をどうやってもっていくかということをきちんと考えたいということで、朝日新聞社に來させていただきました。つまり日本の右傾化の引っ張っている大きな力としてはやはり北朝鮮問題があるかと思えます。つまり今回の大きな主題としては、北朝鮮をどうやって見るかということが大きな主題になっております。韓国の知識人たちがいちばん心配していることを、日本のメディアがどういうふう報道するかということです。つまり北朝鮮の拉致問題についてです。つまり日本側に立った

見方になっていると思います。北朝鮮は韓国の人たちを483名も実は拉致しているのです。そしてキャンプに行った高校生も含まれています。日本のメディアはまったくそういったことに関心を見せていません。

そして先ほど申し上げた、引率してきたうちの4名の特別な学生についてご説明させていただきます。つまり韓国におきまして、北朝鮮の民主化、そして人権問題を考えるというように積極的に活動している団体があります。そういった団体のなかでも特に活発に活動している3つの団体において、熱心に活動している学生さんをよこしてくださいということで、4名を連れてきました。

この4名の学生たちは、私たちもよく知らない情報を多くもっております。一部の学生は中国の現地に行って脱北者から情報を得ています。そしてある学生は毎週、脱北者の団体に行って、きちっと情報を得ているという人もいます。そして3つの団体から学生たちがこういった形で一緒に席を同じくするというのは今回が初めてのことです。そして明日、そういった4人の学生たちがそういった大事な発言をするかと思しますので、朝日新聞社もその学生さんたちの情報というものを取材していただければと思います。そして先ほど限界にきたというふうに申し上げた私が話を進めたところ、さらに限界が進んで、ウルトラ限界に達したということで、以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

「基金」 皆さん、ありがとうございました。(拍手)

日韓学生のフォーラム2004

テーマ1、テーマ2 準備会

2004年8月24日

エリザベス・ローズ会議場

「基金」 チームでは逐次通訳、そして公開フォーラムのときは同時通訳です。通訳していただくお2人です。

崔銀珠 チェ・ウンジュと申します。

長友英子 ナガトモ・エイコです。

「基金」 よろしくお願ひします。(拍手)

イー・ウォヌン先生、2つのチームに分かれる前に、少し、こういうポイントがあるんじゃないか、このへんをやっていったらどうなんだろうというご提示をお願いできますでしょうか。

李元雄教授 関東大学のイー・ウォヌンです。私たちがこれから2つのテーマでお話をいたします。実際2つのテーマが完全に分かれているものではないと思います。ですので、強調する点が違うだけであると思います。

最初のほうのテーマはいまの日韓関係において、これから発展させていくためにはどうしたらいいか、またいままでそれが障害となってきたものはどういうものだったのかということを確認していくものだと思います。そこで私どもはこのメディアというものの役割に注目いたしております。メディアというのはもともと真実と人民大衆を結ぶものであると考えます。

現在、日本と韓国のあいだでは1年間に350万名を超える人々が往来してると言います。また特に若い皆さま方々のような方々がこうやって出会ってみても特に違ったような部分が見つからないんじゃないかと思ひます。しかしながら歴史問題ですとか、領土問題、独島、竹島というのがござひますね、そのようないろいろ越えていかなければならない問題が山のようにあると思ひます。そのように問題の山をのり越えていくのにおきまして、民間人である私たちがなんとかできる部分というのはそんなに簡単なものではない、そんなにたくさんはないかと思ひます。

報道と日韓、北朝鮮

そこで私たちはメディアの役割をいま1度注目してみようと思います。

政府はメディアの影響をとて強く受けております。同じように私ども大衆、人々もメディアの影響を真に受けております。もしメディアが外国から間違った情報を取り入れて、それを伝達したとしますと、その国とのよい関係を壊してしまうようなそういう恐れもでてきます。韓国の学生さんは恐らく最近の日本と北朝鮮の関係、北朝鮮と日本との問題についての日本の報道、それから韓国との歴史問題に関する報道について特に韓国の学生の方々は特に関心を強くもっていると思います。ですから、そのような内容について日本の学生さんにたくさん質問するかと思います。日本の学生さんも韓国の学生に、韓国の報道というものは日本をどのように見て報道しているのかということ質問して下さって、率直に答えを聞き、率直な意見交換が行われたらと思います。両国のメディアに対して希望すること、要求したいこと、もちろんメディアがすべてではないですけども、メディアを通してみると、少なくとも歪曲をしないで真実を伝えていくべきであるとか、そのようなメディアのあるべき姿ということについても、おたがい率直に意見を話し合っただけであればと思います。

2つ目のテーマはとても興味深いテーマだと思います。皆さんはいろいろ交流なさりながらおたがい違う文化を体験することになると思います。文化というものは1つのシステムだと言うことができます。簡単につくられるものでもありませんけれども、かと言って簡単に消えてしまうものでもありません。私たちは特にしょうがなくって言うていいのかわからないですけども、私日本に生まれれば日本の文化のなかに生きておりますし、韓国で生まれれば韓国の文化のなかに生きております。

ところが、おもしろい現象が最近現れつつあります。文化の世界化と申しましょうか、特に日本の文化が韓国のほうに紹介されるようになります、また韓国の文化が日本のほうに紹介されるようになって、急速にあいだが接近していると言えます。韓国の人たちはいま着ている洋服ですとか、スタイル、またはファッション、あと聴く音楽ですとか、そういうものに対してすごく関心をもっております。

昨日私どもがお会いした金根熙社長とのお話のなかでも出ましたけれども、いま日本の食文化のなかに韓国の食べ物が入って行って、それが爆発

的に定着しつつあるということを知りました。ソウルには日本の渋谷みたいな大学街としてシンチョン(新村)というところがあります。そのシンチョンには日本語だけつかっていいというレストランがあります。多くの学生が日本語を学びたいと思ひまして、そのお店に行くそうです。

「韓国」「日本」イメージの誤解を解く

このような流れがいまの日本と韓国のあいだにあるいろいろな問題を解いていく、ほぐしていくような、そのような力をもっていくのではないかということに非常に関心をもっておりまして、それで、テーマとして選びました。1つだけ皆さんが警戒しなければならないことは、日本人がもっている韓国のイメージ、韓国人がもっている日本のイメージ、文化、そういうものに対してはメディアを通して歪曲されてる部分があるかもしれないということです。

1つおもしろい例をお話ししようと思うんですが、韓国の学生のなかに多くの学生がなんですけど、日本は性的に解放された、解放的な性を謳歌している国だというふうに思っている人が結構いるのです。ですので、なかには男の子と女の子が銭湯に行くのに、一緒に行って一緒に同じお風呂にドボンとつかると、そういうふうに考えている人もいます。とても笑わしてくれる話であるんですけども、実は本当そう考えている人が結構いるんです。

先生が日本に留学してらっしゃったとき韓国からお友達が来たんだそうですね、そのときどう言ったかと言うと、いわゆる「混浴の銭湯に連れて」ってくれというふうに言われたそうです。まあですから、先生も「そんなものはこのへんにはないよ」と。同様に日本人が知っている韓国というもののなかで間違っているものもたくさんあると思います。ですから、皆さん違う点というものをよく確認して、違うからこそ出会って話さなければならないというようなことを元にして討論していただくと、とてもいい実りのある討論ができると思います。もし間違った見解とか、間違ったその考え方というものが見つかったら、学生らしく真摯な討論を通して正しい答えを見出していただくならばと思います。以上です。ありがとうございます。

「基金」 テーマにそって二つのチームに分かれるかどうかについて。

白井 先生のお話を聞いているとどちらも同じような結論っていうか、話の流れになるのではと思いますし、おたがいにテーマの内容として近いものがあるので同じ話の流れのなかで扱いたいなと僕は考えます。本番のときに詰められないというのが問題なんじゃないかなと思ひまして、いまは2つのテーマが交錯しあわないように手順を、話の流れというものを段取りとしてつくっておくのが重要じゃないかなと思ひました。

金永振 2つに分けたほうがいいと思ひます。というのは、まだこのメンバー全員でちゃんと話したことっていうのがなくて、で、昨日もたぶんコミュニケーションというのはそんなにきちんと取れてないと思ひるので、大人数でしゃべると話が結局あまりうまくまとまらずに、いいウォーミングアップにならないと思ひますので、2つに分けて小人数でやったほうが本番はよくなるのではないのでしょうか。要するに、たくさんでやると、深いコミュニケーションがとれない。そんなに深くする必要はないんですけど、あんまりいい事前練習にならないんじゃないんですか。

柳智星 May I have a chance? May I have a chance! (笑) 僕の考えを言ひます。民主主義の国同士ですので、多数決で決めさせてもらいたいと思ひます。では2チームに分かれたほうがいいと思ひ人手を上げてください。過半数を超えました、では2チームに分かれるということにします。(拍手)

「基金」 彼のリーダーシップに感謝ですね。それでは、2番目のテーマの方たちはコミッティールームへ移動しましょう。(移動)

日韓学生のフォーラム2004 チーム会議

テーマ1 日韓関係とメディアの役割

エリザベス・ローズ会議場

李元雄教授 それでは第1のテーマですけれども、私が司会を務めさせていただきます。それでは皆さん自由に、そして意見があるときには手を上げてお話ください。それではまず自己紹介から始めたいと思います。広い会場ではなかなか自己紹介するとなりますと時間がかかりますので、お名前、そして学校、それから専攻をお話ください。レディーファーストで。

李芝遠 こんにちは、私は関東大学校で英語英文学科のイー・ジウォンと言います。よろしくお願ひします。

金甫徑 こんにちは、韓国外国語大学校の英語科のキム・ボギョンと言います。

姜惠晶 こんにちは、私は韓国外国語大学校でタイ語を専攻しておりますカン・ヘジョンと言います。

金素悦 こんにちは、私は慶熙大学校の言論情報大学院におります31歳のキム・ソヨルと言います。

金銀貞 こんにちは、私は梨花女子大学の大学院食品栄養学科のキム・ウンジョンと言います。

朴春蘭 こんにちは、私は十文字学園女子大学で社会情報学部で勉強しています。朴春蘭と申します。

尹恩貞 こんにちは、私は梨花女子大の政治外交学科のユン・ウンジョンと言います。

李銘淑 私は西江大学校の映像大学院でPR学科におりますイー・ミョンスクと言います。

許珠賢 私は、同じく西江大学校の映像大学院やはりPR学科で、ホ・ジュヒョンと言います。英文の表記がちよつと間違っておりますので、訂正の資料のほうをごらんください。

朴允志 私は、梨花女子大学校の国際大学院で外交安全保障を専攻して

おります、パク・ユンジと申します。

金永振 始めまして、慶応大学理工学部に行ってます金永振と申します。在日の三世です。

鬼原 アニヨハセヨ、鬼原民幸と言います。明治大学の4年生で国際政治を専攻しています。よろしくお願ひします。

白井 こんにちは、白井一生です。鬼原君と同じく明治大学の政治経済学部で国際政治学を専攻してます。よろしく。

入江 おはようございます。入江康則と申します。中央大学法学部政治学科です、きょうはよろしくお願ひします。

佐竹 こんにちは、佐竹紘和です。中央大学法学部国際企業関係法学科に在学しております。よろしくお願ひします。

上村 おはようございます。上村一郎です。中央大学法学部政治学科です。よろしくお願ひします。

菅原 こんにちは、中央大学2年法学部国際企業関係法学科に所属している菅原航です。よろしくお願ひします。

西野 こんにちは、アニヨハセヨ、日本体育大学体育学部体育学科、西野岳大と申します。

李元雄教授 ありがとうございます。それでは「メディアと日韓関係、メディアの役割」ということで午前の討論を始めたいと思います。討論の時間を節約するために与えられたそのテキストに沿っていくつか提案をしたいと思います。まず第1点ですけれどもメディアの役割におきまして、注目すべき点はいわゆる世論（よろん）、日本では世論（せろん）とも言いますけれども、その世論を決定するうえでのメディアの力というところだと思ひます。昨日朝日新聞社を訪問しましたときに『読売新聞』のコラムいただきました。そのコラムの内容を中心に問題点を指摘しながらメディアがもっている役割について話をまとめていけるのではないかと思ひます。

それから2つ目ですけれども、韓国の学生が討論したがっていた、討論したいと希望しているのは北朝鮮問題です。9ページの上のほうに出ているところをお話しているところです。日本の人は北朝鮮を悪い国だというふうにいま認識しているようです。それに比べ韓国では北朝鮮をともに生きなくてはならない、ともに生きる兄弟であるというふうに見ております。

つまり間違っただけはあるけれども、ともに生きていく相手であるというふうを考えているわけです。で、韓国の人は北朝鮮を変えていこうというふうを考えております。そういう意味で日本の人が北朝鮮にもっているイメージ、特にメディアが伝えるもの、北朝鮮についてメディアがどう伝えようとしているかということに非常に興味をもっております。同じように日本の皆さんも韓国のメディアが北朝鮮をどう見ているか、そして韓国の人が北朝鮮をどう見ているかという、その韓国のもつ視点について関心をもっていらっしゃるのではないかと思います。

3番目はもう少し包括的なものになります。特に歴史問題です。歴史問題に関しましてはメディアが世論を刺激する、そういった側面もあるかと思えます。そういうことですので、皆さん正直に相手の国についてのイメージ、過去の歴史についてどういうふうに思っているかという、そういう認識を正直におたがいに披露できたらというふうに考えております。それ以外にもテキストに出ておりますように、個人の体験、それから民間の交流、民間団体同士の交流でありますとか、経済国際などにおけるメディア、それに関するメディアの役割、現在メディアがどういうことをしていて、今後どういうふうにするべきかという、そういう点についても話し合えたらと思えます。これ以外にも皆さまのほうでご提案がありましたら、率直に、気楽に手を上げてお話しください。

李元雄教授　はい、どうぞ。

「北朝鮮」報道、日韓それぞれの問題

鬼原　自分の興味あるところからしゃべってしまいます。北朝鮮問題に関して、2番ですね。日本のメディアの報道の仕方というのは昨日の『朝日新聞』の方のお話にもあったとおりに、質の高いものとは言えないと僕も思います。特にテレビの夕方ニュースとかワイドショーなどの内容は、北朝鮮のちょっとエキセントリックと言うか、日本人から見ている、ちょっと面白おかしいような部分しか報道していないと思います。そのせいでと言うか、日本人のなかでも北朝鮮に対してそういうイメージしかもっていない人が多いような気がします。で、それに対して韓国では北朝鮮についての報道というのはどういった形で、またどういった内容で行われているのかというのを教えてもらえればと思います。以上です。

李元雄教授 非常にいい意見が出たような気がします。それでは韓国の学生のなかで韓国のメディアが北朝鮮をどう報道してるか、どういう姿勢で臨んでいるかということについて、だれか話してもらえますか。

金素悦 では、私が話します。現在、北朝鮮から脱出して韓国で暮らしている、いわゆる脱北者と言われる人たちは5500人を超えました。そのほとんどがいわゆる宗教団体でありますとか、人権団体、NGOなどの支援を得て脱出に成功した人たちであります。韓国では、しかしこういった北朝鮮からの脱出、脱北ということはそれほど社会的に大きなイシューにはなっていません。何週間か前ですけれども400人あまりの北朝鮮からの脱出者が韓国に大挙して入国するということがございました。

こういった大量に発生した脱北者に関しては、もちろんメディアは関心をもってはおりますけれども、そういう人たちが韓国でどういう生活をしているのか、韓国の生活にどのように定着をしようとしているのか、あるいはしているのかといった部分には関心をもっておりません。もう少し具体的に言いますと、なぜ北朝鮮を脱出しなくてはいけなかったかというその理由、それから脱出の過程における人権弾圧、迫害でありますとか、それから北朝鮮の実情でありますとか、そういったところを重点的に報道しようという姿勢が韓国メディアには欠けていると思います。以上です。

李元雄教授 やはり韓国のマスコミも北朝鮮に対してバランスを欠いて報道をしているという、そういう指摘だったというふうに言えると思います。では、ほかのご意見は。

白井 いまの話のなかで韓国のマスコミがNGOの活動などに対して、それほど大きな関心をはらっていないというふうな話を聞いたんですが、それは北朝鮮に対してエキセントリックな報道をしないという意味なのか、それともより抑え気味の報道を心掛けているのかというふうなところが疑問に思ったのですが、どちらなのでしょう。

金素悦 南北関係というのはやはり政治的な土台にのっている問題ですので、この北朝鮮からの脱出者、脱北者の問題もやはり政治的な問題にならざるを得ません。かつておたがいの体制がおたがいに競い合っていたとき、関係がよくなかったときには、おたがいの悪い部分というものをあげつらっていました。

「北朝鮮」の痛み、キズを避ける韓国の報道

しかし現在、韓国の国民は北朝鮮の社会がどういうふうなものであるかという認識をもうすでにしております。北朝鮮が非常に不安定な社会であるということも認識しております。それで韓国の政府としましては、北朝鮮を刺激するような、あるいは北朝鮮の非常に厳しい面を、それを注目させるような、それをあげつらうような、そういうことがないように、そういうことがあっては困るというふうに恐れております。そういうわけで政府のほうでもそういった部分に、そういう姿勢でありますので、それがマスコミのほうにも自然と影響を与えているというふうに言えると思います。

個人的には、例えば痛み、あるいは傷というのが北朝鮮にある場合、それを隠して包み込んでしまえばそれでそれが治るのかと言うと、そういうことはないと思います。隠してしまえばそういう傷、あるいは膿というものには次第に大きくなって、さらに大きな傷、痛みとして広がっていくだろうと私は個人的には思っております。この北朝鮮の社会、あるいは北朝鮮の人権問題については、また時間があればゆっくりと話したいと思っております。すでに北朝鮮の社会の危険水位というものはすでに越したというふうに私は見ております。

李元雄教授 ありがとうございました。

尹恩貞 どうもお話、ありがとうございました。先ほど日本の方から韓国では北朝鮮についてどういう見方をしているかという質問がありましたけれども、韓国でも北朝鮮について肯定的に見ているとばかりは言えません。特に新聞でありますとか、マスコミなどで北朝鮮について報道していることを見ますと、非常に飢えて苦しんでいる状況でありますとか、そういった疲弊して非常に困窮している、そういった状況を伝えております。韓国の人はそういうわけで、北朝鮮は同じ民族であると言いつつも、同じ同属であると言うよりも下等な、二等、ですから自分たちより劣った民族であるというふうな見方をしている部分があります。しかしながら北朝鮮は同じ半島に住んでいる民族でありますので、統一ということ成し遂げつつ、ともに生きていかななくてはいけない、そういう民族であります。

そういうわけで韓国のマスコミというのは統一について賛否両論が出ているわけです。社説などでも賛否両論、常に出ているんですけども、日本のマスコミは、例えば先ほど非常にエキセントリックで、面白おかしい

部分が強調されているというようなことをおっしゃいましたけれども、例えば韓国、あるいは北朝鮮の南北のその統一についてはどのように見ているのでしょうか。

金永振 少し私事になりますが、僕は3月28日にワン・コリア・フェスティバルというものを代々木公園で開き、その実行委員長をしてました。そのときに僕ら、いかにお祭りのことを日本全国に知ってもらおうかということではいろいろな新聞社の方とか、テレビの方に取材のお願いをしたり、実際記者の方と話したりする機会ありました。そのときに、いま言われて気づいたんですけども、やっぱり南北統一という朝鮮半島のことにに関して、特にマスコミの人たちはそんなに、と言うかかなり関心が薄かったと記憶しています。

関心薄い「統一問題」

それよりも彼らに関心もっていたのは、その僕らの在日三世と、そして実行委員は在日三世と日本人の子たちが、だいたいほとんどのメンバーだったんですけども、その彼らがどういう交流をしているのかとか、どういう議論をしているのかとか、そういうところを追いたがってました。ワン・コリア・フェスティバルという名前でやっているにもかかわらず、そういうところにやはり視点がいていましたので、関心が薄いのではないかなと思いますし、もう1つはこれは僕の肌感覚ですけども、もう生まれたときから韓国と北朝鮮という国が、2つの国が存在していましたので、朝鮮半島はもともと2つであるというイメージをもっている人のほうが多いんじゃないかなと思います。個人的分析ですけども、南北統一に対して関心が薄いのは、実際マスコミの人々というのも仕事の量が多いはずですので、特に朝鮮半島の南北統一というところまで踏み込んできちんと報道できるだけの人材と言うか、人がそんなにいないんじゃないかなとは思いました。以上です。

白井 いまの話を僕なりにもちよっと考えてみると、マスコミのほうにそれを分析する能力がないという以上に、やはり日本人の側に統一に対する意識というのが薄いんじゃないかと考えます。韓国人やまた在日の方々の考える以上に日本にとっては統一という問題は海の向こうの話であって、また朝鮮には2つの国があるというのが日本側のもっと明確な意識として

あるのではないかと考えます。それを反映しているからこそメディアの側で、あくまでも北朝鮮と韓国に対する対応の違いがあるのではないかと考えます。ただ実際に問題を現実的に考えてみれば、統一という問題に対するコストというのをどのように負担するかということに関して、日本も他人事ではいられないわけで、それを国民が認識しないというのは憂慮すべき事態ではないかなと考えます。以上です。

鬼原 だいたい同じなのですが、ちょっと付け加えて短く言いたいと思います。僕も北朝鮮の話題に関しては統一というのは本当に関心が薄くて、どちらかと言うとキム・ジョンイルがどうするのか、いま北朝鮮がどういう状態にあるのか、暴発はしないのかというような、そういった見方が多いと思います。その基になっているものが、これはジレンマだと思うんですが、先ほども言ったように、北朝鮮をちょっと面白おかしく映画だとか、例えばテレビのバラエティー番組だとか、そういったような感覚で報道してしまう、またそれを求めてしまう国民というのがいると思います。非常に本当に統一という問題は決して他人事ではないと思うので、日本人も非常に深く考えていかなければいけない問題だと思っているので、それは憂慮すべき事態だなと感じています。以上です。

「拉致」報道と日本のナショナリズム

李芝遠 それではマスコミについてお話したいと思います。韓国には『中央日報』という新聞があるんですけども、北朝鮮問題と日本と関連しまして、例えば北朝鮮が日本人を拉致していた問題でありますとか、そういうことについて平和な日本を揺さぶったというような、そういう報道をしたことがあります。日本は例えば昔のいわゆる強制連行でありますとか、それから「慰安婦」の問題とか、非常に多くの人を強制的に連れて行ったという、そういうことがありますよね。そういうことがありながら北朝鮮の核問題、北朝鮮とは核問題うんぬんという議論をし、そして拉致問題うんぬんという話をして、その拉致問題が日本の社会に大きな影響を与えた、非常に日本社会を非常に危機的状況を与えたというような、そういう報道もしておりますけれども、これは日本がこう変わろうという、日本が変化しようとしているところに、そういった拉致問題をうまく利用して、それを大義名分に使っているのではないかというふうに思うんですけど、いかが

お考えでしょうか。どういう話かわかりますか。

上村 いまの拉致の問題を日本が大々的に報道しているということについてちょっとお話ししたいと思います。日本は近年拉致問題を題材としてナショナリズムの高揚が最近顕著に見られるようになってきました。実際そのナショナリズムの高揚で拉致問題に対し、世論が反発、でその反発したのをメディアがあおるといふかたちとなっています。拉致問題によるナショナリズムの高揚に対して、それをメディアがあおるといふかたちになっています。実際、そのナショナリズムの高揚を政治的に利用し、特に現政権はそのナショナリズムの高揚で政権維持をしようと考えています。そのような点を考えると拉致問題に対して大きく報道がなされるのは、間接的ではありますが、政治的意図がからんでいると見てもいいと思います。以上です、ありがとうございました。

李芝遠 いまのそのナショナリズムの高揚というものを政治的に利用している、政治的にも刺激をしているというような話でした。それは言ってみれば日本の右傾化というものを認識していらっしゃる、そういう発言だと思ふんですけども、それではそういった日本の右より、保守化ですね、ですから、そういった点を日本の若い人たちはどういうふう考えているのでしょうか。

上村 実際、同じ若い人たちを差別化するつもりはないんですけども、今回のフォーラムに参加しているように問題意識のある人はごく少ないと私は考えています。では一般の若い人たちはどうしているかと言うと、やはりこのように例えばナショナリズムの高揚であるとか、そういう問題に対して考える機会があまりないのでメディアに流されやすい結果となっています。昔から日本は愛国心がないということで、それはそれで問題であつたりもするんですけども、現在日本で言われているのがプチ・ナショナリズムという言葉が日本にはありまして、特に若者のあいだでの現象なんですけれども、自分たちが言うばかりのナショナリズムで、実際自分たちは言うけれども、そこまで自分の発言に責任をもたないという現象が多いと思います。なので、そのような人たちはメディアの報道とかにきわめて流されやすいので、実際右傾化していると言っても過言ではないと思います。以上です。ありがとうございました。

李元雄教授 いま、15分には第2チームと合流をするということになり

ました。ではそういうわけで時間がないので、いままで発言してない学生のなかで追加の発言をしたい人、発言してください。北朝鮮問題に限りません。反日反感情でありますとか、反韓感情でありますとか、あるいは民間交流などにおけるメディアの役割とかいった点、どうぞお話しください。

韓流そして歴史問題の報道ぶり

姜惠晶 私、日本に来る前に日本に関する記事に接したんですけども、それは「新しい教科書をつくる会」というのがございますよね、それに関する記事でした。それ以外にも韓国では日本関連の記事というものを目にするすることができます。ただここで話したいことは教科書問題ではなくて、教科書問題はもうこれは以前から言われてきた問題ですので、ここでは省略したいと思います。

私が知りたいことは最近韓国に関連するニュースや記事に接したことがあるかどうか、あるとしたらどういう内容を、どのように報道されていたのかということが知りたいです。ただし、ヨン様でありますとか、いわゆる韓国ブーム、韓流とは関連しない韓流以外のところの歴史問題でありますとか、そういった韓流以外のところでどういった報道と接したことがあるかということをお聞きしたいと思います。

菅原 先日サッカーのアジアカップがあったと思うんですけども、それで日本対中国で中国がすごい日本に対して反日感情を表していたと思うんですけども、正直僕も韓国の人々も反日感情があるのかなあと思いきや、韓国の人々は中国の反日感情を批判しているということを知り、とても僕はうれしく思いました。以上です。

李元雄教授 …という記事が出たということなんですね。非常にいい討論が、私がそれほどあいだに入らなくても、進んだと思います。時間はもう2、3分しか残っていません。まだお話になっていない人、機会を差し上げますのでお話しください。

入江 最近、新聞を読む機会が、時間がなくて読んでなくて、韓国についてもほかのメディアについても、ほかの外国についても調べる機会がいまはありません。そのなかで、割いた時間のなかで見た記事でノ・ムヒョン大統領とあと日本の小泉首相がチェジュ島で会談した、ノーネクタイで

会談したっていうのを見ました。そのノーネクタイというのが僕はすごい、これからの日韓のキーワードになってくるのではないかと思いました。これが日韓の21世紀に向けてのパートナーシップを構築していくうえで、そのノーネクタイのような、そういう何て言うのですかね、崩れた形と言うのですかね、くだけたそういう形でつきあっていくのがいいのかなと思いました。つまり、そういう記事があったこととそれに対する僕の感想というのをいま述べました。

李元雄教授 ありがとうございます。では私も次回日本に来るときはノーネクタイで来たいと思います。もう時間がきたようなんですけれども、最後に中国の朝鮮族の留学生の方いらっしゃいますよね、中国から朝鮮族でいながら中国から日本に来た、そういうその視点から日本のマスコミをどういうふうに見ていらっしゃるのでしょうか、そういう第三者の目で見たマスコミはどうなってますか。

朴春蘭 私は朝鮮民族で、親戚も韓国と北朝鮮の両方にいます。それで中国のメディアでも北朝鮮に関する報道とかするんですけど、日本に来て日本のマスメディアで北朝鮮のことと中国で報道されることは、かなり差があるなと思ったんですよ。日本ではかなり北朝鮮で、例えば北朝鮮でもおたがいの国で文化としても、おたがいに優秀な文化とかは、おたがいに共有すべきだと思うし、北朝鮮としても例えばダンスとかもすごく踊りとかも本当に上手だと思うんですよ。中国ではそういう報道とかはよく見たんですけど、日本ではそういう報道はまったく1回も見たこともないし、それでちょっとやっぱり、最近もみんなも知ってるように北朝鮮にいちばん悪い、そういうことしか報道されないから、日本のマスメディアがやっぱりちょっと、もっと北朝鮮にでも勉強すべきような文化は流したほうがいいんじゃないかと思うし、あと私は朝鮮民族として同じ民族として北朝鮮と韓国がいま分かれて統一できないことがすごいつらいことだと私は思っています。本当に心からすごい痛みが、すごい痛いんですよ。だからできるだけ統一は、いま現在みたらむずかしいんですけど、私は同じ民族として、なんで日本人も同じ民族みんな同じ国に住んでいるのに、いま同じ民族として別れ離れして、おたがいに会うこともできない、そういう悲しさがすごく痛いから、できるだけ早めに統一したほうがいいと思います。

それから、さっきアジアカップについてのことなんですけど、実際に中国で、最近日本のマスメディアですごく中国人みんなが反日、そういうのをすごくもっているっていう報道されるんですけど、実際中国の最近のそのときのインターネットとからのそういう報道とか見ると、実際は中国はそういう大きな問題みたいに報道されてないし、あと、みんながそういう反日について、そういう思いをもっていないんです。それは本当に少ない中国の方だと思うし、でもまだまだ中国のたくさんの方はそういうふうには思っていないと思いますよ。以上です。

李元雄教授 ありがとうございました。それではテーマ2の学生たちがまた入ってきましたので、ここでテーマ1の議論は終わりにしたいと思います、皆さまのご協力に感謝します。どうもありがとうございました。(拍手)

日韓学生のフォーラム2004 チーム2

テーマ2 異文化体験と日韓関係

コミッティー・ルーム

柳智星 では、始めさせていただきます。まずは皆さんにお会いできてうれしく思います。まず私の自己紹介です。韓国外国語大学校タイ語科のユ・ジソンと申します。まず言いたいことは、このミーティングの目的ですけれども、午後からの公開フォーラムに向けてテーマの絞込みを行うというものです。したがって、そこで私たちが議論すべきアイテムとかテーマとか、あるいは 이슈とか、そういったことについて絞込みを行うと、つきましては各自の考えというのをこの場でしっかりとまず述べてもらいたいというふうに思います。

韓国と日本について韓国では次のように言われています。近くて遠い国だと、なぜそのように言われているのか、地理的には、距離的には近いけれども、心情的に遠い国だということではないかと思います。このフォーラムの目的は、私たち若い世代が離れてしまった両国の人たちの心を、より近いものにするためではないかと思っております。ですからまずは自分の考えというものを率直に披露して、述べて、そして本当に意義のあるフォーラムにしていけたらと思います。冒頭の挨拶が長くなりました、これでやめます。私にもお茶をください。(笑) いまからまじめにスタートしましょう。

まず、おたがいに名前もわかりませんし、初めてお目にかかる人もいます。まずは自己紹介からお願いします。ではこちらから、時計の反対まわりでお願いします。水色の方から。

尹豪英 こんにちは、お会いできてうれしいです。関東大学校観光経営学部1年生のユン・ホヨンと申します。

李慧林 こんにちは、関東大学校観光経営学部1年生のイー・ヘリムです。皆さんにお会いできてうれしいです。仲良くなれたらと思っています。

康典絵 テンプル大学に通うカン・チョネと申します。いま国際関係学

を専攻しています。

趙和紀 チョー・ファギと申します。いま早稲田大学で社会科学部に属しています。専攻は経営学のゼミに入っています。よろしく願います。

李光洙 こんにちは、関東大学校観光経営学部1年生のイー・グァンスと申します。お会いできてうれしいです。仲良くしてください。

不破野 十文字大学女子学園の不破野佐知江です。よろしく願います。

牛島 お茶の水女子大学で地理学を学んでいます、牛島由紀子と申します。

柳智星 僕の自己紹介は終わりました、先ほど行いました。

では、フォーラムに向けてのまずテーマの絞込み、テーマづくりから始めましょう。日本と韓国のあいだでいま話題となっていること、あるいは共通の認識を導き出すことができるようなアイテム、こういったことを見つけ出すことで日韓の関係をより近いものにしていけると考えております。例えばさっき話題になっていることとか、あるいは共通の認識が得られるようなアイテムとして韓国側から日本に渡ったものとしては、例えばキムチの文化とか、あるいは「冬のソナタ」とか、あるいはペ・ヨンジュンとか、あるいは韓流と言われている1つのブームとか、こういったことを挙げるができます。

しかし他方、日本から韓国に渡って行って、かつ共通の話題を呼んでいたり、あるいは認識を導き出せるようなものって言うと、ちょっといま私には思い当たることはないんですね。日本側の皆さんがまずこういったことがあるんじゃない、あるいは韓国側の人もこういったことがあるんじゃないということで、ちょっと出していただけますか。

趙和紀 いま日本から韓国に渡ったものということなんですけど、私が1つ思い当たるものがあります。それはアニメ文化です。いま非常に日本でもアニメが世界的に評価されているんですけども、でも、その多くの工程を韓国が下請けという形でやっているというもので、すごく両国間の関連が親密になっているところがあります。また、韓国映画も世界的に評価が高くなって、日本でも注目されている点が多いという点で、そのアニメ映画という観点から話を進めることも1つ手になるんじゃないかと思います。

日本のアニメ、韓国のドラマ・映画

柳智星 はい、日本のアニメというのは世界的に非常に高い評価を得ている、有名だということは知っていました。しかし私自身、日本のアニメには触れたことはありません。ほかの韓国の学生どうですか。

(「ピカチュウ」の声。)

柳智星 わかってない…、失礼しました。(笑)

趙和紀 以前、留学生の方から話を聞いたときに、日本のアニメと知らずに韓国のものだと思って育ったという方もたくさんいらっしゃるというのは聞きました。

柳智星 うん、思い出しました。小学校のときでした。「ドッチボール王 トンケ」というアニメがありました。もともとのタイトルが何だったかはちょっとわかりませんが、原作の。でも、ドッチボールをやってて育んでいく友情とか、芽生える友情とかそういったことがテーマなんです。あのアニメ、漫画というのはものすごい人気を博してしまっていて、韓国の全国の小学生がドッチボールのボールを1個ぐらい持っているというようなぐらいに大変な人気でした。そしてその登場人物のキャラクターの動きを真似しながらドッチボールをしたりしました。「冬ソナ」以上のブームだったと思います。でも日本の皆さんは「ドッチボール王」についてあまりご存じないみたいです。

趙和紀 たぶん小学生の男子限定で、全国的なブームというふうにはならなかったと思うんですけど。

崔銀珠・通訳 日本にもあるんですか、「ドッチボール王」なんとかというの。

趙和紀 たぶんあったと思います。私はよく知らないんですけど、はい。

崔銀珠・通訳 でも聞いたことはある？

趙和紀 はい。

柳智星 ここで私は日韓のあいだに考え方の違いというのがあるのではないかと思いました、いま。ここで1つ出てくる問題点というのがペ・ヨンジュンさんに対する評価です。韓国の女子学生はペ・ヨンジュンさんについてどう思ってますか。

李慧林 別に好きじゃありませんでした。

李光洙 僕たちはペ・ヨンジュンと言えば、「まあまあ、ハンサムだよ

な」みたいな感じですか。日本の皆さんはどう思っていますか。

不破野 私はペ・ヨンジュンよりウォン・ビンのほうが好きです。

李慧林 私もそうです。(笑)

不破野 ウォン・ビンっていま徴兵で兵隊のほうに行ってるんですか。

李慧林 違います。まだ活動中だと聞いてますけど。

不破野 ありがとう。(笑)

柳智星 フォーラムでこんな形で会話を、こうやってリードしていったらいいんじゃないかと思います。

重要なことは、僕たちは大学生です。だからおたがいの現象とか考え方とかについて、この理性でもって冷静に分析をするということも私たちは求められていると思います。もしかして、いま日本で巻き起こっている韓流ブームというブーム、これもしかしてバブルではないだろうか。私は皆さんにお聞きしたい。質問です、これはバブルだとは思っていませんか、バブルですか。実態以上に膨らんでしまったとか。

いまの韓国ブームはバブルか

康典絵 私も1つ懸念するところは、いまの韓国ブームが、本当にブームで終わるのか、これが今後よき日韓の交流になるのか、いまが重要じゃないかと思っています。1つとして、いままで日本のなかにも韓国、コリアという文化はもう50年以上前からずっと根づいていて、実は最近のブームではなく、もう昔からそういった日本のなかにもコリアという文化は根づいていたと思います。

ただ、いままでのコリアというものは、例えば歴史問題であったりとかさまざまな問題で暗い部分もあったんですけども、いまは明るいところが表に出てきていると思います。だからこそ今後は暗い部分と言うか、ちゃんと歴史問題の認識であったり、過去の問題やったりということと、本当にキムチだったり、ペ・ヨンジュン、「冬のソナタ」明るい両方を合わせてなごらいくと、バブルだけでは終わらないんじゃないかということを思います。

柳智星 いい、すばらしいお話です。僕もそう思ったんですけど、日韓関係のなかで、この過去の歴史の問題というのは、これはうやむやにしてはいけない問題だとは思ってました。しかし、双方にとって非常にデリ

ケートな、そしてセンシティブな問題でもあります。しかし必ずけじめをつけると言いましょうか、解決しなくてはいけない課題だと思います。ちょっと待ってください。康さんのいまのお話に心から共感をします。

いわゆる戦争を経験した世代が、これからどんどん年取っていきますよね、そして、私たちが次の時代を担っていくこととなります。私たちがどう変えていくのかということがこれからの日韓関係を方向づける1つの重要な礎になるのではないかと思います。

それからほかにトピックと言うのでしょうか、アイテムはないでしょうかね、そのフォーラムで取り上げるべき。

市場が一つに向かい、スポーツで反日感情

趙和紀 私は大学で経営学を専攻しているので、どうしても商売のことがばかり考えてしまうのですけれども、エンターテインメントとの部分だけでなく、ほかの電子部品だとか、そういう面でも完全に韓国と日本が市場が1つになるとまでは言っていないんですけれども、かなり近い、どちらも韓国も日本を視野に入れ、日本も韓国を視野に入れつつ経済活動を行っているという面がたくさんあると思うんです。そういった面でも、またそういう、市場が1つになりつつあるという視点からも話を進めていけるのではないかと思います。

柳智星 じゃあ、どうぞ。

不破野 私はサッカーのサポーターの問題、中国で試合があったときに日本が勝ったんですよ、サッカー。それでそのときに中国のサポーターが、反日感情かわからないんですけど、それで、ちょっとすごい態度がよくなかったの、それについてちょっとどう思われているかを聞きたいな思っています。

李慧林 インターネットで見ました、そういうことは。

李光洙 私はその試合を中継で観ていました。あれはサッカーはスポーツですよ、スポーツは楽しむべきものであって、サポーターであっても応援のやりすぎと言うのでしょうか、興奮したあまり相手を非難すると、それはよくないと思います。

不破野 いま、意見聞きたいんですよ、あるいはフォーラムでテーマとして取り上げたいんですか。取り上げたいんですね。なんでかと言うと、

反日感情、そういうことをスポーツとか、そういうことに持ち込んでいいのかっていうことをちょっと取り上げたいなと思いました。

政治的利用とマスコミ

柳智星 私はたまたまその試合を観たんですけれども、あの試合のときの中国のサポーターの態度は、あれは間違っていました。一国の国の歌、国歌、君が代の演奏、一国の国歌が演奏されるときはその国がどこであろうとも、やはり尊重するというのが国際的なマナーでありエチケットだと思います。ここで反日感情ということが問題になるわけなんですけれども、もちろん気持ちのなかに、若干のいわゆる反日感情と言えるような気持ちは結構もっていると思います。ただしこれを政治的に利用しようとする勢力と言うんでしょうか、輩がいると思います。

例えば、何か政治的な大きなスキャンダルが起きたとか、何か問題が起きたときに政治家は国民の目をほかのところへ逸らすために反日感情というカードを切るんです。知識人じゃない階層、いわゆる庶民階層というところで、庶民が例えば報道を見て、新聞を読んで自分自身の考えを改めるとか、ということはあまりないんじゃないかと思うんです。つまり、失礼、訂正します。庶民というのは、どうしても報道、あるいは新聞の中身というのをそのまま鵜呑みにします。みんなの心のなかにある小さな反日感情というのは、報道によってあおられる部分があると思うのです。ただ根本的な問題は、心のなかに反日感情と言えるようなものが存在するということなんですよ。例えば日本国内の例えば誤ったそういう行動ですね、一部の人たちの行動とか、あるいは発言とか、そういったものをメディアを通じて接すると、やはり僕だって憤慨しますし、怒りますね、憤りを覚えるんですよ。

いまこのテーマでちょっと思い出したんですけれども、韓国の有名な芸能人がヌード写真集を出しました。で、テーマが何だったのかと言うと、従軍「慰安婦」だったんです。彼女は非常に有名で、そして人気の高いスター級のタレントでした。で、この問題が大きく社会的な問題となりまして、「慰安婦」を題材にして、「慰安婦」の卑しめられた場面とか、そんな場面とかを演出したその写真集とかだったんですけれども、そのことがあってから問題になりまして、このプロモーションビデオを製作したとこ

ろは日本円で2億円の損害を被って、ビデオと写真集全部破棄しました。そしてその女性のタレントは国民の前に謝罪会見をし、そして従軍「慰安婦」のところを訪ねて跪いて詫言いました。いまのお話をちょっと聞いて思い出したんでお話してみました。

不破野 それは初めて知りました。

若い世代の相手文化への関心と今後

康典絵 もう1つ、きょうの午後のトピックとして話したいと思ってるんですが、その若者と年配の方との考え方の違い、おたがいの文化に対する考え方の違いが、本当に違うのかっていうところに焦点を当てたいと思います。例えば「冬のソナタ」のブームは日本では特に年配の女性の方にすごい人気があります。私が聞いている範囲だと、韓国では日本の文化に対しては若い人のほうがより関心をもってると聞きました。だから午後に、年取った人たちと若い人たちがどう違うのかと、あと、せっかくみんなが集まってるので、今後これから若い世代がもし問題があるならばどう変えていけるのかというところに焦点を当てて話せたらなと思います。

柳智星 ほかにどうですか。じゃあ、僕から1つ提案があります。このなかに韓国に行ったことがあるという方いらっしゃいますか、お2人ですね。で、皆さんは韓国についてこういうイメージがあったんだけど、いざ行ってみるとこうだったとか、そして私たち、今回日本にまいりました。日本に来る前はこういうイメージをもっていて、こうだろうと思ってたんだけど、実際来てみるとこうだったとか、そういうことをおたがいに申し合ったらどうかと思います。韓国の学生からちょっとだけ意見お聞かせください、どうだったか。

尹豪英 私、日本は2回目です。中学3年生のときに南のほうの福岡に行きました。ホームステイだったので、あんまりいろんなところに行きませんでしたし、それから結構いなかんだなとも思いました。で、今回日本に来てみまして、日本では東京の繁華街とか見まして、あまり韓国と変わらないじゃないかと思いました。

また行きかう人たちの姿もほとんどすごく似てましたし、あっ、韓国とあまり違わないじゃないかということで、あまり遠い国だというイメージは全然ないですね。いわゆる気持ち的に遠い存在だというのが問題ですけ

れども、でも交流というのをこうやって積み上げていけば、そういう問題も解決するんじゃないかと思っています。よくなると思っています。

趙和紀 私は韓国に1度行ったことがあるんですけども、そのときは私は朝鮮学校に通っていたので、北朝鮮にも行ったことがあるんですけども、そのときはもう完全に、まったく日本とは違う国だという意識をもって行ったので、まあ実際まったく違う国でいろいろショックもあったんですけども、その分韓国に行くときには、もっと本当に日本と変わらないような意識で行ったんですけども、でも実際、私はたくさん違う点を感じました。大きな差というよりも本当に小さな日常生活のささいなことですか、まあ、たくさん似ている部分もあったんですけども、でもやはり違う国だという意識はもちました。

柳智星 違う国だなと思ったきっかけって、何かあります。

趙和紀 とても細かいことなんですけれども、例えば、ホテルに滞在するときのフロントの方の対応の仕方ですか、そうですね、あと、先ほど町並みあまり変わらないとおっしゃったんですけども、私はやはりちょっと違うものを感じました。

柳智星 僕の感じたことなんです、言います。空港に着いて、それからバスに乗って東京都内に向かいました。渋滞してましたね、同じだなと思いました。もう1つ発見がありました。で、渋滞してたら、やはり脇の路肩のほうを走る車があったということです。同じなんだと思いました。同じ人間なんだなと思いました。

趙和紀 あと(韓国で)印象的だったのは、走っている車がほとんどヒュンダイ(現代) だったことです。

柳智星 そうです。日本製はほとんどないですよ。韓国の経済的に貧しかったころ、厳しかったころ、外車に乗るというのは、それはあり得ないようなことでした。でもいまはソウル市内では結構外車を多く見かけることができます。僕も運転してるんですけど、僕、アメリカにいたことがあって、アメリカの車にも乗ってましたけれども、アメリカの車と比べて、韓国の車は決して遜色があるとは思いません。韓国のコマーシャルがあるんですよ、国の。失礼しました、(笑) 政府のコマーシャルではありませんでした。ヒュンダイ自動車のコマーシャルでヒュンダイ自動車がアメリカの新車品質評価会、評価大会でGEDパワーというところなんです、そ

こで優勝したというコマーシャルがあります。

それで、アメリカに行ったときに思ったことなんですが、トヨタのカムリというのがありますよね、カムリがアメリカでほとんど大衆車なんですよ。そして中古車市場でも最も高く売れていました、カムリが。これが日本の底力なんだなとそのとき思いました。

柳智星 まずちょっとまとめてみますね、まず最初にアニメについて話し合おうと、そのもう1つは韓流、いわゆる韓国ブームと言うのは、これはバブルではないのだろうか、バブルだろうか、そうでないだろうかというテーマ。エンターテインメント市場、つまり大衆文化市場でしょうかね、日韓は市場が1つになりつつある、それからサッカー試合を1つの例として考えられる、いわゆる韓国内における反日感情の問題、そして韓国の「慰安婦」をテーマにしたヌード集が発行されかかってダメになったというその問題、事件のこともちょっと触れましたね。

それから韓国の若者と年配の方々、あるいは日本の若者と日本の年配の方方で、おたがいの文化に対してどういう姿勢をもっていて、どういう受け止め方をしてるか、その違いはなんなのかという問題。もし仮に現状で問題があるとしたら、この問題はどうやって解決し、そして緩和していけるだろうか。それからおたがいの体験談について、おたがいの国に対する、国において体験したこととか、体験談と彼は言いました。

これだけイシューとすべき、トピックスとすべきことをいまちょっとまとめてみたんですけれども、でも実際の展開というのはまた話が話を、ほかの話に展開し、発展して行って、收拾がつかなくなってしまうということが往々にしてありますよね、ですからテーマをしっかりと頭に入れて、私たちとして、自分たちとしてどういう解決ができるのか、どういう解決方法があるのかということについて、そこに追い込んでいけたらというふうに思うんですね。

それで、いまここであがってきたテーマ以外に、これをちょっと取り上げたらどうかというのはありますか、最後にいきます。ないですか。

感情、ブーム、歴史問題—率直に話し合いたい

牛島 新しいテーマじゃないんですけども、いま出てきたいろんなトピックを同じ視点で見るというか、切り口として1つ入れていただきたい

というのがあります。それはなんか、おたがいの文化に対しての、そのものへの興味というのが、その関心だとか注目が集まっているというのは、いったいどの部分に興味を感じているのかという、その根本のみんなの意識というか、そこをちゃんと見極める必要があるんじゃないかなというふうに思っているんです。それを見ることで、どうしてこう若者と年輩の方が興味を示すものの対象が違うのかということも明らかになるのかなと思います。

それから、反日感情みたいなのも報道にあおられて、あおられたときに、実は心のなかにちょっとあったものが噴き出すということも、何て言うかもうちょっと明確に説明できるかなと思います。それを踏まえれば、何て言うか、そこからどうやっていまのブームに終わらせずに歴史の問題っていう部分の興味、関心に結び付けられるかっていうのが、もうちょっと話し合えるかなというふうに考えました。ですから実際の、そのもっている素直な、率直な何て言うか、感覚と言うか、おたがいの文化に対する、それを何て言うか遠慮なく出したらいいのかなと思います。

柳智星　そうです、まさに率直な感想とか、率直な考えを披露する、明らかにするということがやはり日韓関係を考えるうえでもっとも大事なことだと思うんです。いま私はトピックとして10を挙げたんですけども、それ以外にも何かお考えとかありましたら、フォーラムのときにご遠慮なさらないで出していただきたいと思います。では、これで第2テーマについての討論会、終わります。

《日韓学生のフォーラム2004》

「メディアと体験と日韓関係」

2004年8月24日—全体会議

国連大学エリザベス・ローズ会議場

岡・司会進行 きょうは同時通訳で行いますので、お手元のレシーバー、チャンネルを日本語の場合は1に、韓国語の場合は2に合わせてお使いになってください。

それでは開会させていただきます。皆さんこんにちは、きょうはお忙しいなか、お越しいただきまして、まことにありがとうございます。ただいまより「日韓学生のフォーラム2004—メディアと体験と日韓関係」を開会いたします。私は本日進行を務めさせていただきます、アジア女性基金の岡と申します、よろしく願いいたします。それではまず、主催者、財団法人女性のためのアジア平和国民基金の専務理事・事務局長の伊勢桃代よりご挨拶を申し上げます。

伊勢専務理事・事務局長 会場の皆さま、ようこそおいでくださいました。日本と韓国からの大学生に集まっていたいて一緒に考え、話し合うというフォーラムはその第1回を2003年の7月に催しました。そのときのテーマは「日韓関係の現在・過去・未来—新時代に生きる私たちの対話」でした。今回はその2回目となります。日本、韓国の間人同士が実際に会って話すことの重要性を身にしみて感じた第1回目のフォーラムでありました。韓国の学生、そして日本の学生が直接顔を合わせ言葉を交わす機会をもてたことは相互理解の第一歩だと思いました。こういった機会をできるだけつくろう、そして続けていこうというのが私たちアジア女性基金での思いでありました。そして、この2回目の開催となりました。

このフォーラムのきっかけをつくってくださったのが、きょうここに一緒に来ていただいております、イー・ウォヌン教授、関東大学の教授でいらしゃいます。イー先生が学生がお世話くださり、どうしてもこういう対話をつくりたい、こういう機会をもちたいという大変な熱意でもって、このフォーラムが生まれました。

第1回目には韓国から2つの大学の学生の方たちがおいでくださいました。今回はその数が倍以上になり、5つの大学から大学生と大学院の学生を入れて13人の方がここに来てくださいました。それと現在日本に留学をしておられる2人の方もこの会合に参加しておられます。日本からは10人の学生に参加してもらっています。そして4人の「在日」の学生の方々もここに来てくださいました。実に私どもにとっては、これはありがたいことだと思っております。

「ヨロブン パンガブ スムニダ」、皆さんようこそおいでくださいました。こうしておいでくださって、そしてお会いできることを私ども心からうれしく思っております、また感謝いたします。異なった背景から日韓、韓日の関係を見、体験をしておられる学生さんたちからお話を聞くことに非常に期待をしております。

ここで少々お時間を取ってアジア女性基金のことを短くご説明したいと思います。

この基金は1995年7月に設立されました。その目的としては、かつて第二次世界大戦の時代に、日本軍のために建てられた慰安所に集められ、将校、それから兵隊、日本の軍隊の将兵たちに性的な行為を強いられた「慰安婦」の方々に対し、道義的責任を認め、償いをする、同時に「慰安婦」問題に対するさまざまな暴力についての予防、未然防止、対応を研究・調査し、啓発をすることで、アジアの人々、市民団体などとの交流と友好を進めるための活動を行っております。

韓国と日本が果たす平和のための役割はアジアという地域においても、国連などの国際の場においても、ますます重要になることと思います。この両国が友好関係のもとに、ともに考えることは、経済にしても、平和の問題にしても、アジアからの発信をする原動力になるのではないかと思います。このためには対立でなくお互いの理解を求め、そしてもちろん違う、間違ったことには真摯に対応する態度を取ることが必要であると思います。2004年のこの日、東京で初めて出会った皆さん、きょうここにおられる皆さんは、やがて10年経つと社会の中核で働かれると思います。この日の思い出が長く続く友情の素になればと望んでおります。この会合では若い時代の、若い次の世代を担う人たちが、個人としてそれぞれの意見を言い、疑問点を議論しながらお互いの考え方の理解を深めていくという

ことができると望んでおります。

そして、本日の主役はだれでもない、それは若い、そしてこれからの世界を担う皆さんです。きょうはどのような考えや、意見の交換がなされるか、本当に楽しみにしております。よろしく願いいたします。

岡・司会進行 それでは、きょうこのテーブルに着いてくださっている学生の皆さんに自己紹介をしていただきたいと思います。時間の制約がございますので、3つに絞ってだけ言っていただきたいんですが、お名前ですね、それから大学名、それから3つ目はご自分の日本体験、あるいは韓国体験、ですから訪問したことがあるとか、あるいは日本で生まれた、韓国で生まれて育ったとか、そういった経験について3つ目は一言触れていただくということで、短くお1人ずつ自己紹介していただきたいと思います。

じゃあ、こちらからお願いします。

《自己紹介》

*韓国と「在日」の学生はフルネームで表記

菅原・司会 こんにちは。中央大学法学部国際企業関係法学科2年の菅原航（すがわらわたる）です。韓国での経験と言いますと、旅行好きなんですけど、韓国には行ったことがないので、特にこれとってないんですけども。そうですね、在日の方とかが小学校から友達にいて、小学校のころ朝鮮学校とかに行ってたんで、多少韓国のことには興味がありました。それできょうはこのような韓国の学生と交流をもつことができ、とてもうれしく思っています。どうぞよろしくお願いします。

趙和紀・司会 こんにちは。早稲田大学社会科学部の趙和紀（ちょーふあぎ）と言います。日本で生まれた在日三世です。韓国には1度訪問しました。きょうは在日の立場から何か発言できればいいなと思っています。よろしくお願いします。

牛島・司会 こんにちは、お茶の水女子大学で地理学をやっております牛島由紀子です。韓国には行ったことがありません。ただ大学で学ぶなかで、すごく近いのに、なんとなく隔たりをなぜか感じてしまっている国というのですごく関心をもちはじめて、ここにやってきた次第です。よろし

くお願いします。

柳智星・司会 こんにちは。韓国外国語大学校タイ語科の3年生ユ・ジソンと申します。私が今度初めて日本に来て、空港でバスに乗ったんですけれども、日本の道路も大変渋滞していました。韓国と同じだと思いました。そして渋滞しているなか、車はいわゆる路肩を走っていました、これも同じだなと思いました。そこで感じたことなんですけれども、日本と韓国のなか、何らかの妥協点を見出すことができるかとも思いました。今回のフォーラムで何らかの解決策も見出せるのではないかと思います。ありがとうございました。

許珠賢・司会 韓国西江大学でコミュニケーションを勉強しているホ・ジュヒョンと申します。私の日本経験ですけれども、まずは日本のお寿司が大好きです。それから日本の皆さんの明るい笑顔が好きです。日本に、東京に1回、そして東京には3度目の訪問です。次はぜひ京都に行ってみたいと思っております。ありがとうございました。

李芝遠 こんにちは、関東大学英語英文科のイー・ジウォンと申します。去年のフォーラムにも参加しました。今回2回目の参加となります。お互いについて知らなかったことを知ることができ、また誤解してた部分なんかも、誤解が解けて、そして帰れたらと思っております。

金甫徑 韓国外国語大学で英語を専攻していますキム・ボギョンと申します。日本には初めてまいりました。日本に来て日本の学生といろいろ交流し、また意見交換できたらと思っております。

姜惠晶 こんにちは、韓国外国語大学でタイ語を勉強していますカン・ヘチャンと申します。日本には初めてまいりました。初めての日本訪問が日韓の交流という非常に前向きな目的の下で行われたということ、訪問できたということ、個人的には光栄なことだと思っています。皆さまにお会いできてうれしく思います。

金素悦 こんにちは。慶熙大学の言論情報大学院のキム・ソヨルと申します。1997年に日本に来たことがあります。あのときは北朝鮮が非常に厳しい状況だったので、北朝鮮を支援しようというキャンペーンを日本で展開するためにまいりました。あのときの日本の皆さんの温かいご関心と情熱に改めて感謝申し上げます。きょうのフォーラムでも北朝鮮問題について取り上げられたらと考えます。ありがとうございました。

金銀貞 こんにちは、梨花女子大学大学院に在学中のキム・ウンジョンと申します。東京に1度来たことがありますし、沖縄にも1度行ったことがあります。沖縄と東京は違うってような感じです。もう少し詳しく知りたいと思いました。このような場に参加できてうれしく思います。

朴春蘭 十文字学園女子大学の社会情報学部で勉強している朴春蘭(ボク・シュンラン)と申します。中国の生まれで朝鮮族です。ちなみに私のおじいさん、おばあさんは韓国で生まれて、お父さんお母さんから、いまの現在の中国で生まれました。どうぞよろしくお願ひします。

尹恩貞 こんにちは、梨花女子大学で政治外交学を勉強しておりますユン・ウンジョンと申します。私も旅行は大好きですが、でも日本には初めてまいりました。個人的に日本のお友達と付き合ってみて、日本についてもっていた偏見とか固定観念を払拭することができました。今回もそのようなきっかけになったらと思います。お会いできてうれしく思います。

李銘淑 こんにちは。西江大学の大学院で広告広報を勉強していますイー・ミョンスクと申します。東京には3度目の訪問です。最初は本当に似ていると思いましたけれども、来るたびに違うところも見つけられるようになりました。楽しい討論を期待しています。

白井 こんにちは、私は日本の学生ですが、韓国語を勉強しているので、少し韓国語で自己紹介してみようと思います。皆さん、こんにちは。私の名前は白井一生(しらいいっせい)です。明治大学政治経済学部政治学科からまいりました。私の韓国体験は第1はキムチです。また、ぜひ韓国に行ってみたいと思っています。よろしくお願ひします。

李光洙 皆さま、こんにちは。私は関東大学の観光経営学部のイー・グァンスです。日本には初めてまいりました、これから何度も来たいと思っています。よろしくお願ひします。

鬼原 明治大学政治経済学部の鬼原民幸(きはらたみゆき)と言ひます。このフォーラムには去年も参加しました。毎年、2度目ですが、こういう機会を与えられて非常にうれしく思ひています。僕はあいにく英語ができないので、英語もしゃべれなくてもコミュニケーションが取れるんだということ証明して、できるだけ韓国の学生と仲良くなって、きょうは帰りたいなと思ひています。ちなみに9月に韓国に行く予定がありますので、

もし、そのときまた会えたらうれしいです。よろしくお願いします。

尹豪英 皆さま、こんにちは。私、関東大学の観光経営学部のユン・ホヨンと言います。1年生です。日本には中学3年のときに1回来ました。今回が2回目になります。こういった意味のある場に参加できて、非常にうれしく思います。よろしくお願いします。

李慧林 皆さん、こんにちは。私は関東大学校1年生の観光経営学部のイー・ヘリムと言います。日本には今回が初めてです。フォーラムに参加できて、非常にうれしく思います。ありがとうございました。

不破野 十文字学園女子大学の不破野佐知江（ふわのさちえ）と言います。韓国には行ったことがないんですけども、きょう韓国の学生と交流してみて、すごく楽しい人たちばかりで、こういう場がもっと増えればいいなと思っています。よろしくお願いします。

朴允志 皆さん、こんにちは。梨花女子大学国際大学院のパク・ユンジと言います。個人的に日本は初めてですけれども、非常に梅干が好きです。それから韓国に帰るときは1個買って帰りたいと思っています。どこがおいしいのか教えてください。

高玉蓮 皆さん、こんにちは。明治大学法学部の高玉蓮（コウ・オンリョン）と申します。韓国には小学校のころに1度行ったことあるんですけども、幼いころだったのであまり覚えていないので、今度は祖母の故郷である済州島（チェジュド）に行ってみたいと思っています。きょうは在日の立場から何か言えればと思います。よろしくお願いします。

二階堂 皆さん、こんにちは。十文字学園女子大学の4年生の二階堂阿弥（にかいどうあや）と申します。近くて遠い存在と言われている韓国と日本の関係を、この会を機に、近くて近い存在になるように、何か自分たちでもできたらいいなと思います。ありがとうございました。

康典絵 皆さん、こんにちは。テンプル大学に通う康典絵（カン・チョネ）と言います。私は韓国には祖母と祖父の故郷である済州島のほうに何度か墓参りに行ったことがあります。きょうは韓国、日本、在日ということだけにとらわれずに、1人1人の人たちのいろんな意見が聞けたらいいなと思います。よろしくお願いいたします。

西野 皆さま、こんにちは。日本体育大学体育学部社会体育学科の西野岳大（にしのだけひろ）と申します。韓国へは2回旅行に行ったことがあ

ります。そのときの印象は電車の中とかバスの中とかで、いろんな人が会話をしていますが、そのときの会話が日本人よりも大きな声で、すごい皆さん楽しそうに話していて、それがすごいパワフルで元気よくて印象的でした。あと町の中もやっぱり日本に比べて人々がなんか生き生きしているなという印象を受けています。今度10月から韓国に語学留学をする予定です。いまはもう少し韓国語を勉強してるのですが、これからも韓国と日本の関係をよくしていきたいと思う1人ですので、よろしくをお願いします。

金永振 はじめまして。キム・ヨンジンと申します。慶応大学理工学部数理化学科の4年生です。つい1カ月前に初めて韓国に行きました。そこでいちばん印象的だったのは、1つはタクシーがものすごく安かったことと、カラオケがものすごく高かったことです。きょうは楽しく話せばいいなと思っています。よろしくをお願いします。

上村 中央大学法学部政治学科の上村一郎（うえむらいちろう）です。そのなかで大学では特に安全保障とナショナリズムについて勉強しております。そのような観点からきょうお話できればいいと思います。あとは私の韓国経験としましては、10年前ですが、韓国のソウルに1回行ったことがあります。そのとき思ったのは、すごい町並みが似てるのにどこか違う雰囲気があるなという、似てるからこそ違うところが目立つのかなという、そういう感じを受けました。きょうはよろしくをお願いします。

佐竹 こんにちは。中央大学法学部国際企業関係法学科の佐竹紘和（さたけひろかず）です。韓国にはいままで行ったことがありません。韓国と言うと、僕は日本と韓国のサッカーの試合を観るのがとても楽しみで大好きです。とても深い関係にあると思います。このフォーラムを通じて、今回参加している韓国の人びとと深い関係を築けたらいいと思います。よろしくをお願いします。

入江 皆さん、こんにちは。中央大学法学部政治学科の入江康則（いりえやすのり）と申します。先ほどちょっと順番を間違えまして緊張感がほどけました。韓国経験はないんですけども、もともと嫌韓感情というのがなかったんですけども、もともと韓国について知る機会がなかったということなので、この場を通じて韓国との友好関係をもっと深めていきたいと思っています。どうぞよろしくをお願いします。

岡・司会進行 皆さん、どうもありがとうございます。それではこれ

からテーマ1に入っていただきますが、その前に、全体を通じてきょうのコメントーターとしてご同席いただきました皆さまをご紹介しますことができます。

まず李元雄 イー・ウォヌンさん、韓国の関東大学校の教授でいらっしゃいます。北朝鮮学がご専門で、1999年には東京大学法学部に客員研究員として1年間日本に滞在されたこともございます。また『「慰安婦」問題とアジア女性基金』という本を韓国語に翻訳されています。これはきょう会場に持ってきておりますので、また後ほど、どうぞご覧ください。

それから小倉紀蔵（おぐらきぞう）さんでいらっしゃいます。小倉さんは東海大学外国語教育センター助教授でいらして、NHKテレビのハングル講座講師としてもおなじみの方でいらっしゃいます。小倉さんは韓国に留学されて、ソウル大学哲学科博士課程を修了されています。よろしくお願いいたします。

それから橋本ヒロ子さんです。橋本さんは十文字学園女子大学社会情報学部の教授でいらっしゃいます。橋本さんはアジア女性基金の運営審議会の委員でもありまして、「慰安婦」問題、償い事業のみならず現代の女性の人権問題に取り組み、国際的に活動しておられます。よろしくお願いいたします。そして、先ほどご挨拶申し上げましたアジア女性基金専務理事・事務局長の伊勢桃代でございます。よろしくお願いいたします。

それから、本日、山口達男理事、私どもアジア女性基金の理事であり元シンガポール大使でございますが、この会議のテーマに大変強い関心を持っていただいて出席いただいております。よろしくお願いいたします。

さらに、昨日、皆さんで訪問させていただいた韓国広場の社長さん、キム・グンヒ 金根熙社長をご紹介します。きょうもご出席いただいております。よろしくお願いいたします。昨日はありがとうございました。

また、『朝日新聞』、昨日訪問させていただきましたが、『朝日新聞』の清田治史総合研究本部長、本日もご出席いただいております。ありがとうございます。

それではこれからテーマまず1に入ります。「日韓関係とメディアの役割」ですね。ここからは日韓「在日」学生の共同司会で進めていただきますので、これから先はお渡しいたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

《テーマ1 日韓関係とメディアの役割》

報道と感情と世論…

「北朝鮮」、歴史・戦後処理、文化・スポーツ交流

許珠賢・司会 現在同時通訳で進行しております関係で、お話を短く、手短にお願いいたします。それではゆっくりとお願いいたします。それではテーマ1になりますけれども、テーマ1の報告をお願いしたいと思います。キム・ボギョンさんお願いいたします。

金甫徑 午前中の討論では、「日韓関係とメディアの役割」というテーマで、短い討論をいたしました。まずメディアが反日感情でありますとか、反韓感情を刺激しているのではないかという、それについての反省の時間をもちました。それから北朝鮮問題についての討論もいたしました。そして3番目は歴史問題におきまして、マスコミが、メディアが刺激をしているのではないかという点について振り返る時間もちました、そういう形で討論を始めました。

最も活発に討論されたテーマは北朝鮮に関する報道の問題でした。日本と韓国、両国の報道の状況について、区別してお話いたします。

まず日本の北朝鮮関連の報道の状況というのは、日本は北朝鮮に対して北朝鮮を戯化するような部分が、ちょっと言ってみればゴシップ化してるような、そういう部分があるのではないか、面白おかしく報道している部分があったのではないか、それから統一に関しては、あまり関心をもっていないのではないかということでした。

それから韓国側の報道につきましては、北朝鮮住民の人権、それから脱北者の問題、これは政治的な状況が絡んでいるために、これを刺激しないために、こういった報道を自制しているのでは、抑えているのでは、控えているのではないか、ということでした。

2つ目は、日本の保守化と関連しまして、拉致問題を非常に強調させているというメディアの報道の仕方についての話がありました。それから拉致問題を強調するということは政治的に、それを政治的に利用しようとしているのではないかという指摘がありまして、そういうかたちの指摘を韓国側の学生がいたしまして、それに対し日本側の学生も共感をいたしてお

りました。そしてプチナショナリズムという形で、責任を回避する民族主義、ナショナリズムというのが日本の最近の傾向だということでした。

それから3番目は、お互いのマスコミが持っている、それぞれの国家に対するイメージについての言及もありました。いわゆるサッカーのアジアカップについて出たわけですが、中国では反日感情が強いという発言がありました。それからノム・ヒョン大統領と小泉首相の済州島での会談、これはノーネクタイであったということで非常にいい印象を受けたという、そういう発言がありました。

それから朝鮮族の日本留学生のなかから発言がありまして、北朝鮮の報道についてバランスが必要であるという、そういう発言がありました。現在日本では北朝鮮の姿というのは、非常に面白おかしく報道されているけれども、それは非常に心配すべき問題であると。北朝鮮にも優秀な文化があると、例えば、舞踊がそうであると、であるのでそういったすばらしい点についても報道する必要があるのではないかという、そういう期待が述べられました。それから中国内の反日感情について、非常にそれは熱く燃え上がっているというような報道が日本ではされていますけれども、日本で報道されているほど中国国内の反日感情は広がってはいない、全般的なものではないと。それほど大部分の中国人が反日感情もっているわけではないという発言でした。

それからいわゆる朝鮮民族としての発言もされました。統一というのは韓国民族として、朝鮮民族として望んでいるということでした。歴史問題につきましては、時間が足りませんでしたので、十分な討論はできませんでした。以上です。

北朝鮮、脱北者、歴史問題とメディアの報道

許珠賢・司会 ありがとうございました。もう1度まとめてみたいと思います。これまでの日韓関係でメディアはどのような役割を果たしたのか、そして報道において反省点はなかったのか、それから北朝鮮を認識するうえでメディアはどのような影響を及ぼしたのか、歴史問題においてメディアはどのような影響を及ぼしたのか、以上3点だったと思います。

では、この3点について意見を交わす前に、まず私たちが少し理解を深めるべき点があると思います。まず日本の学生は、そして韓国の学生はお

たがいの国におけるメディアの役割ということについて理解を深める必要があると思います。昨日『朝日新聞』を訪問してわかったんですけども、やはりイデオロギーや価値観、あるいは政治に対する意見によって、姿勢によって新聞社、あるいは放送局、それぞれの色というものがあると思います。それにつきましては各国のいわゆるメディア環境について、それぞれから意見を聞きたいと思います。日本のメディア関係について、では先に日本側にお願ひできますか。

菅原・司会 では、日本のメディア関係について、上村君のほうからお願ひいたします。

上村 日本のメディア環境についてお話ししたいと思います。日本のメディアは一般的に言われているのは、大きく右派と左派に分かれていますと言えます。特に右側のメディアは特に保守的でありまして、韓国人の皆さんがたぶん日本でこういう報道がされてるんだらうなと思うようなちょっと、ほとんどがそうではありませんけれども、奇抜な記事なども載っていたりします。対しまして左側のマスコミは、特に親中、親韓で反米という、そういう立場をとっているかたちが多いと思います。そのなかで私個人が思うメディアの役割というものは政治の監視だと思います。その左右両派のメディアどちらにしても、まず政治が見きれないところを見る、それを視聴者ですか、一般の国民に伝える、それを政府がちょっと違った行動をしたときに監視をする、批判をするというのがメディアの一般的な役割だと私は個人的には思います。以上です。

菅原・司会 ありがとうございます。ほかに日本側で何か付け足すことはありますか。願ひが一つ、意見を述べるときに自分の名前を名乗っていただけるとありがたいです。

じゃあ、韓国側から、いまの意見を聞いて何か意見はありますか。

韓国ではインターネットが重要なメディアに

李銘淑 では、韓国におけるメディアの役割について私のほうから紹介いたします。韓国も日本とあまり変わりません。右、左、分かれます。しかし韓国の場合は保守系の力が大変強く大きな影響力もっています。現在韓国の大学生のあいだでは、テレビや新聞などよりもインターネットの役割が非常に大きくなっていると思います。盧武鉉（ノ・ムヒョン）大統領

領大統領の弾劾とかローソク集会でありますとか、何か蝟集がなったときにインターネットを通じて即座に反応を示しています。インターネットは非常に重要なメディアとして台頭しています。これが大きな変化と言えます。私は日本でも大学生がインターネットを通じて世論をつくり上げていくとか反応していくのか、そういう日本の状況はどうか知りたいと思います。どなたか教えてください。

司会・許珠賢　いまイー・ミョンスクさんから質問がありました。ではどなたか答えていただけますか、お話しいただけますか。

鬼原　鬼原です。インターネットに関して、それを中心に日本のメディア環境の補足を僕なりにしたいと思います。僕のイメージですけれども、インターネットの普及に関しては全然まだ韓国に及ばないのが日本ではないかなと思っています。それと同時に1つの流れとして考え得るのが、例えば、2チャンネルとか、そういった、ちょっと語弊があるかもしれないですけれども、質の悪いというか、そういうページで若者が書き込みをたくさんするというような状況が結構、社会的にも問題視されていると思います。

それに加えて日本のメディアのなかで影響力という点では、テレビの影響力というのがまだまだ本当に強いのではないかなと思います。ワイドショーとか、何て言うか、ちょっとバラエティーっぽく時事問題を扱うような番組が人気を博したりということもあるので、まだまだテレビの影響力が強いということです。そのなかで北朝鮮問題がちょっとコミカルに扱われている部分があって、それが世論をつくっていると韓国の方に取られてしまうというような状況だと思います。それは非常に残念だし、多くの日本人が不本意なことなのじゃないかなと僕は考えています。以上です。

菅原・司会　いま鬼原君のほうから、テレビのほうで韓国や北朝鮮の報道が、最初にも出ましたけれども、少しコミカルに視聴率を取れるような面白おかしい報道というかたちでなされているという指摘があったんですけれども、そういう報道を実際日本の学生の方が見て、自分の意識、韓国や北朝鮮に対する意識、考え方についてどのような影響を及ぼしているのかというものが、意見があれば何かお願いします。白井君、どうぞ。

白井　僕はむしろメディア、このような場において発言する人間というよりは、むしろ特に韓国や北朝鮮に対してふだん、日ごろ意識していない

人たちのほうが、はるかにメディアによる影響というのが大きいのではないかなと考えます。韓国や北朝鮮について、多少の知識や関心をもっている人間であれば、あのような質の低い報道に対しては、ある程度の免疫があると思うんですが、そういうふだん考えたこともない人たちにとっては、それだけが唯一の情報源になるというところで、そういうところでは健全な民意というのが形成されないのではないかなというふうに考えます。

司会・菅原 入江君、どうぞ。

入江 入江と申します。白井君の意見に補足したいんですけども、それはこういう交流の場に来る人は、やっぱり日韓の情報をたくさん集めたいと思うし、これから韓国の言葉を学ぼうと思う人は、やっぱり情報収集をたくさんすると思います。そのなかで特に日本の学生は、そういう偏ったメディアとかの情報に惑わされないように、新聞をいろんな面の、先ほどの学生も話したとおりの右と左に偏らないように、その両方の新聞なりテレビなりから情報を集めているという傾向があります、日本の学生には。そちらのほう、韓国の学生はどうでしょうか。

菅原 ありがとうございます。日本では意識ある人は情報収集のほうをしっかりとるんですけども、一方でやはり日ごろあんまり韓国とかに興味がない人は、北朝鮮とかのニュースのコミカルにつくり上げられてしまったものとかの情報にとっても影響されやすいというのが、たぶんいまの日本の現状だと思います。そういうものに対して韓国ではどのようにお考えですか。

許珠賢・司会 では、キム・ソヨルさん、お願いします。

金素悦 韓国のキム・ソヨルと申します。まず韓国のマスコミについてお話しする前に、さっきの日本の学生のお話、いわゆるメディアの右、左、あるいは進歩、保守のお話について申し上げます。メディアの役割を監視入りの役割だというふうにおっしゃったんですけど、それは私は問題だと思います。メディアというのは、マスコミというのは、個人のように自分の考えを明らかにする、そしてそれに対する読者の評価を受けること、これがいわゆるメディアの機能だと思うんです。そして判断の基準はあくまでも、読者側にあるんだと思うんです。マスコミが右であれ左であれ、進歩であれ保守であれ、さっき日本の学生が言ったように、客観的な判断力を身につけるのがいわゆる私たち国民であり、また情報収集に臨む姿勢で

はないかと思えます。そして、日本の大学生の皆さんが北朝鮮問題についてマスコミの報道、あるいは情報が非常に限られているとおっしゃいました。コミック化されている、そしてゴシップ化されている。これはこれまで日本のマスコミが北朝鮮について関心がなかった、そして問題の根本を見ようとしなかった、そのようなマスコミの姿勢からこのような結果になったのだと思えます。

「北朝鮮」でも根本的な問題を見なければ

北朝鮮の問題というのは韓国と北朝鮮が統一するとかしないとかの問題ではなくて、アジア全体の平和とつなげて考える必要があります。皆さんもご存じのとおり、北朝鮮のテポドン、あるいはノドンというミサイル、これは日本を射程距離内に置いています、そして6カ国協議で見られるように北朝鮮の核開発は北東アジアだけでなく世界の平和を脅かしています。このような状況の下で北朝鮮の問題、あるいは北朝鮮社会の根本的な問題を見ずして北朝鮮を理解しようとする、あるいは北朝鮮問題を解決しようとする、このような姿勢そのものに問題があるんだと思うのです。

そして、なぜ北朝鮮はあのような社会になってしまったのか、北朝鮮の社会体制はどうなっているのか、そして、北朝鮮の人民の生活はどうか、北朝鮮政権と、いわゆるキム・ジョンイル政権と北朝鮮の住民の生活、この2つを切り離してみる必要があると思うんです、考える必要があると思うんです。先ほど朝鮮族の朴さんがおっしゃいましたけれども、北朝鮮にもすばらしい文化があります。北朝鮮の人民の生活がそこに息づいていると思うのです。しかし北朝鮮政権はいろいろと政治的な行いをしていますけれども、もちろん私たちはそれについても関心をもち、問題点も指摘する必要はあると思いますけれども。しかし日本のマスコミ、韓国のマスコミは、北朝鮮が隣の国であり、アジアの一国だということ、そういった意味で北朝鮮に関するより多くの情報を入手しようと努めるべきだと思います、また関心を向けるべきだと思います。

柳智星・司会 日本のマスコミ報道について北朝鮮でありますとか、韓国の場合には非常に情報が限られていると、本質的な問題についてもう少し情報を収集するのが必要であるという話をキム・ソヨルさんがしてくださいました。以上、日本のマスコミを中心に話が進んだと思うんですけれ

ども、では、韓国のマスコミはどうでしょうか。それについての質問があるとすれば、どういうふうにお答えいただけるでしょうか。質問してください。質問してください。

金永振 いまお話しくださったことに関して、ちょっと質問したいと思います。北朝鮮に対する情報に関してなんですけれども、いまたぶん日本ではゴシップ的な報道ですぐ人の感情が動いてしまうほど、日本社会に住む人々にとって北朝鮮の情報というのはすごく限られていると思います。僕は小学校4年まで朝鮮学校に通ってましたし、友達にも中学、高校まで行っていた人間もいますが、彼らもそんなに北朝鮮について詳しくは知っていません。そこにさらに言うと、関心度ということに関して、休戦中である韓国と、距離が離れている日本とではまた大きな差があると思います。そこでその韓国のなかで北朝鮮という存在の情報がどの程度入ってくるのか、それはあるいは教育で教えてもらうことなのか、マスコミで伝わってくるものなのか、そのへんに関して少し聞きたいと思います。

菅原・司会 ここで申し訳ないんですけれども、韓国からの留学生がまた新たに来られましたので、ちょっとここで1度自己紹介のほうをお願いしたいと思います。では、よろしくお祈いします。

玄武岩 遅れて申し訳ございませんでした。私はいまは、留学生はちょっと卒業したという感じなんですけど、いまは東京大学の大学院の社会情報学科という大学院の助手をやっております玄武岩(ヒョン・ムアム)と申します。日本に来て7、8年ぐらい経っているんでしょうかね。長らく私も皆さんと、留学生と同じような、そういう留學生生活しましたので、ちょっと皆さんよりは年は上かもしれないんですけれども、一緒に議論に参加できればと思います。

ちょっと遅れてきて同じような問題がまた出るかもしれないんですけれども、ただちょっと皆さんさっきお話ししていたなかで、もう少しちょっと踏み込んでお話ししていただきたいという、そういう部分があったんですよ、日本の、韓国あるいは朝鮮半島に関する報道、メディアの問題のなかで。それとまたちょっと前に戻ってしまうかもしれないんですけど、とりあえず少しだけ問題提起みたいなもので、また後ほど総合討論みたいなものがあつたら、そのところで議論ができればというふうに思います。もちろんいま日本のほうで韓国、朝鮮を見る問題のなかでいろいろ問題に

なっているのは、そういうコミカルな扱いをするという、そういうものがあって、いまのオリンピックの報道を観ても、日本の報道でどういうところから北朝鮮を見るかという、北朝鮮の選手は試合で負けちゃうと大変なことになっちゃうとか、そういう見方の報道をしてるんですよね。それを見る限り、私が観ていてもああ本当にそうなのかなと思ってしまうと、そういうことがありますので、それがただ一般の人々、普通の人だけに影響を及ぼすような、そういうものでは決してないのではないかというふうに1つ思います。

それはそれとして、やっぱりそれよりもっと重要な問題は、やっぱり一般の日本の日刊紙『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』も含めて、そういうメディアの新聞で韓国、朝鮮をどのように報道しているかということのを少し考えて、そこまでもちょっと踏み込んで考えてみる必要があるのではないかと思うんですよね。簡単に例を挙げますと、1つだけ取り上げますと、この4月に韓国で総選挙がありました。そこでその報道に対して日本はどういう見方をしていたかと言うと、『読売新聞』のほうでは、社説では与党の躍進で懸念される安保政策、これが初日の選挙が終わった直後の社説だったんですけど、このように日本は韓国の総選挙、いま韓国の今回の総選挙というものは大統領が弾劾になるという、そういう状況のなかで民主主義というものが蹂躪されようとしている。そこで蹂躪された民主主義というものをどういうふうにもまた守るのかという、そういうことで立ち上がって大きなローソク集会というものが開かれて、民主主義を守りきったという。そういう意義があると思うのですけれども、そういうところから見るのではなくて、ただ韓国の総選挙の影響というものが、結局、日朝関係、あるいは東アジアにおける安保状況という、そういう状況のなかで、どういう意味があるのかという、そういう結局は日本の国益、日本の安保政策のところから日本の報道は見ようとしなないということなんですよ。

その当時、同じ日に遠く離れたイギリスの『タイムズ』という新聞では、どういう論説、社説を載せたかと言うと、弾劾できない論議がある、韓国の野党は処罰をまだ準備しなければならないだろうという、そういうことで韓国民は幼稚園の平均よりもっとまじな成熟性をもった国会を必要にするだろうということで、結局それが民主主義か、反民主主義かというそ

ういう戦いの問題であって、そこで韓国の人は民主主義をまた選んだという、そういうところから韓国民の目線になって総選挙を見ていたのではないかなと思うんですけど、日本はさっきお話したように、まったくそうではない。

もう1つだけ例を挙げますと、日韓関係はこれからどうなるのか、金鍾泌 キム・ジョンピルという、古い時代の政治をやった人が消えていくということは、これまで韓国でキム政治という大きな弊害をもたらしていた地域主義的なそういう政治というものが遠のいていくという、そういう意義があったにもかかわらず、その金鍾泌が去ることによって、結局、日韓のこれまでの関係はまた新たにつくっていかなきゃならないという、そういうところから懸念をしているとか、また『産経新聞』を見ると、この選挙結果で、ほくそ笑むキム総書記という、そういう記事もありましたね。結局そのような開かれたウリ党が勝利することによって、またノム・ヒョン大統領が復権することによって、それで金正日(キム・ジョンイル)はまた北のほうで笑ってるだろう、喜んでるだろうという、そういう見方の記事も載ってました。

「朝鮮半島」への視点、日本のメディアの違い

そのように日本のメディアの問題というものは、ただ北朝鮮に対する、そういうコミカルな扱いというものだけでなく、全体的に朝鮮半島に対してどういう視点から見ているのか、そういうことを考えて、日本のメディアの問題というものも考えていく必要があるのではないかというふうに思いました。はい、以上です。

菅原・司会 ありがとうございます。以上のことを踏まえてですね、先ほど金永振さんが質問された、日本では北朝鮮の情報が限られているということですが、韓国のほうでは北朝鮮のほうの情報はどのようなかたちで得ているのか等の、金永振君の質問に対しての答えをお願いします。

柳智星・司会 韓国のユ・ジソン？【ユ・ウィンと聞こえるのですが名前が見つかりません】と申します。金永振さんの質問にお答えしたいと思えますけれども、韓国でも北朝鮮に対する情報というのは非常に全体的なものです。政治的なものですね。人権問題というのは非常にセンシティブですので、政治的な問題でありますとか、体制についての問題についての

み触れ、人権問題でありますとか、脱北者の問題でありますとか、北朝鮮で飢えている住民に対する言及というのは避けております。もし触れるとしても非常に表面的な話だけです。しかし、北朝鮮の市民連帯といったところから私たちはまた多くの情報を得ております。正直に韓国でも脱北者に対しての認識というものは、あまり肯定的ではありません。統一に関しましても必ず統一しなくてはいけないという世論が大部分であるかと言うとそうでもありません。重要なのはそういった考えをしてる人たちは少数であるとしても、それは結局には数の問題ではなく、引き続き議論していく問題であるというふうに思うわけです。私が申し上げたいことは、ここで北朝鮮の人権についての問題について話し、発表し、皆さんとの共感を得る、そういう作業というのは、北朝鮮の問題は国際社会に引き出していく、ということは、韓国でもほとんどが共感できない問題なんですね。しかしここで重要なのは経済的、それから短期的な面から見ますと、短期的なそういう視点からではなく、いわゆる人類的な面から見ますと、やはりこれは必要であるし、無関心であってはいけないという問題だと思えます。お答えになったかどうかわかりませんが、以上です。

許珠賢・司会　この点について、もう少しお話される方いますか。

北朝鮮社会の状況をみようとする韓国

金素悦　追加のお答えになると思いますけれども、現在、韓国社会の脱北者というのは5500人を超えています。その数はこれまでに比べ、個人のルートであるいは家族レベルで脱出してきた人、それから集団で脱出してきた人、合わせますとそれだけになるということです。彼らは非常に苦勞して韓国に来ましたけれども、例えば97年にハンギョン北道から2人が韓国に渡って来ましたが、そのときの2人にインタビューした場合、その2人の答え、証言というのは一致していました。彼らの話を総合しますと、現在5万人ぐらいの人々が北朝鮮から中国に逃げているというふうに言います。そして韓国のメディアはそういった非常にづらい部分、脱北者が第三国で非常に苦勞しているということを伝えるよりも、北朝鮮の社会に対する紹介、何月何日にどういう行事があって、キム・ジョンイル委員長がどういうことをしたといった、そういった報道を主に伝えています。韓国の多くの脱北者関連の団体、それから韓国にいる研究者たちは、

さまざまなルートで情報を入手し、できるだけ北朝鮮の状況を皆さんに伝えようというふうに努力をしてる、これが現状です。

許珠賢・司会 お答えになったのでしょうか。追加的な質問ございますか。

趙和紀・司会 白井君、どうぞ。

白井 質問ではないのですが、いま話を聞いてちょっと自分なりに考えたことですが、韓国側におけるメディアと、それに対する世論の反応というのが非常に北朝鮮問題に関して成熟しているというか、冷静に問題を受け止めようという姿勢があるのに対して、日本側がどうも意識の盛り上がりがないと言うか、認識のレベルが低いというようなギャップが大きな問題ではないかなと感じました。私が特にそこで問題だと思うのは、北朝鮮の問題というのが日本にとっても「統一」という問題を考えたときに、すぐ内部的な問題として認識すべきなんではないかというふうに感じます。日本において日本社会を形成している、要するに在日の方のなかには朝鮮籍の方もいるわけですし、そういう状況のなかで、日本にとっても朝鮮半島の問題というのが、外部的な問題ではないのにもかかわらず、それはあくまで海の向こうの話というふうに片付けてしまう、その意識の低さというのが大きな問題ではないかなと考えます。

マスコミの報道、情報と自らの判断

趙和紀・司会 補足的に質問、意見等、ちょっとおうかがいしたいと思うんですけども、北朝鮮からの情報というのは非常に限られているだけではなくて、とても正確性、何が正しくて、何が間違っているのかという判断というのが、とてもむずかしいと思うのですけれども、そういう点をどのように客観的に韓国の学生の方もそうなんですけれども、どういう視点から客観的に判断なさっているのかというのを、個人的な質問ですけども、おうかがいできたらと思います。

許珠賢・司会 イー・ジウォンさん、お願いします。

李芝遠 いまの質問、これはマスメディアをどのように個人が分析するかという問題だと思うんですけども、私の場合には、去年初めてアジア女性基金があるということを知りました。去年、つまり日本人がこういふふうに基金を集めて「慰安婦」の人たちに補償しようという、そういう組織があるというふうに初めて知りました。日本は無条件に過去のことは蓋を

しようとしているとばかり思っていました。ですので、この基金があるということは新鮮な衝撃でした。しかし、それで感動したんですけれども、韓国に挺身隊問題を扱っている団体があるんですけれども、その団体ではアジア女性基金に対する批判というものを非常にしております。政府の問題を国民レベルにすり替えようとしているというふうに非難しているんですね。私も基本的な知識と言いますか、そういうところがない状態で、そういう世論に非常に動かされました。ですので、私、個人的に非常に揺らいだんですね、この問題について。どちらにしてもこの世論と言うのは、いくら正確性とか、公正性というのは必要だと言いますけれども、どちらかにやはり偏らざるを得ないと思うわけですね。ある程度初心でありますとか、自分の考えでありますとか、自分のスタンスをどこに置くかと、ここがやはり大事なのではないかと思いました。

許珠賢・司会 マスコミからの報道、その他の報道について自分が自分の判断をもつこと、そして自分の信念をもって臨むことが大事だというお話だったと思います。この点について補足的にありませんか。

菅原・司会 佐竹君、どうぞ。

佐竹 脱北と先ほどおっしゃった。自分の判断についての意見なんですけれども、日本では主に脱北者の問題について、僕の考えかもしれませんが、脱北する様子だとか、脱北する瞬間だとか、そういう映像をよく報道しているのではないかなと思います。先ほどおっしゃった方もいましたが、日本は北朝鮮をゴシップ化しているとか、面白おかしくしているとかいうのがありました。面白おかしくではありませんが、やはり深刻な問題としてとらえるのではなく、そういう脱北する人がどういう様子でいるのかというのをただ流しているという感じで、やっぱり海の向こうの国の問題として、僕ら脱北者に関する認識というのは非常に薄いのではないかと思います。ですから、先ほどおっしゃった方もいましたが、自分の判断をもつというのはすごく大切です、僕も本当にそう思います。

菅原・司会 ありがとうございます。いまの意見に何か補足する点はありますか。

趙和紀・司会 二階堂さん、お願いします。

二階堂 十文字学園女子大学の二階堂です。先ほど玄さんがおっしゃっていたような報道というのも実際日本では多いです、日本の政権の中心

になっているのはやはり右派なので、マスコミ等の意見というか、干渉して、それで報道する内容をどちらかというときム政権は脅威であって、非常にすぐにでも抗日しかねない、そういうふうな報道をするので私の友人などは、「そんな日本にミサイルを打ち込まれる前に韓国に攻撃してしまえ」くらいの過激なことを言う人も実際はいますし、そういうふうな日本人が多いのも事実だと思います。それに対して昨日訪れた『朝日新聞』のような、日本では左派と言われてる新聞社ですが、脱北の本当、何でしょう、どれだけ悲惨な目に遭って脱北せざるを得なくなったかとか、あと人体実験のようなこともさせられていて、そういうふうな恐怖を味わっているというふうな報道などもされていると思います。そういう点では情報は限られていますが、さまざまなかたちではあると思います。私の、そのなかでのどういうふうな混乱している情報を選択しているかというのは、いまの政権のあり方というのは、どうしても戦中に回帰しようとしているように感じられるので、そういう政策的な意図が見える意見は信じないようにしているという感じでしょうか。答えになっていないかもしれませんが。

趙和紀・司会 ありがとうございます。ここで、私から1つ、日本側の学生の皆さんに質問を投げかけたいんですけども、いま脱北者の問題のことでいくつか議題に、話題にのぼったのですけれども、私が1つ皆さんにお聞きしたいこととして、いま拉致問題、拉致家族の問題について連日のようにテレビに出ない日はないというぐらい毎日報道されるのですけれども、それもやや私の意見ではゴシップ化されているという感じを受ける面があります。そしていま二階堂さんの意見のなかで、政治的に利用されているというふうに私は考えるのですけれども、いまの日本における拉致家族に対する報道のあり方について何か意見があれば、少しおうかがいしたいと思います。鬼原さん、お願いします。

鬼原 拉致問題についてですけども、確かに連日テレビでも、また新聞でも雑誌でもよく目にする話題だと思います。それで政治的に利用されているというのも確かにそういう面もあるというのは否めないと思います。例えば、ジェンキンスさんと曾我さんのことで、ジェンキンスさんが日本に帰ってくるタイミングというのを見れば、参院選目当てなんじゃないとか、そういうような声もあると思うので、それも否めないというふうに思います。

報道も情報も一様ではない

それにつなげて1ついままでの話もまた関係して言うのですが、1つ大事なことは、何もかもに言えることではありますが、ひとまとめにしないということが結構大事なのかなと思います。日本人にもいろいろな考えをもった人がいます。それは韓国人ももちろんそうだと思います。日本のマスメディアもそれぞれの考えがありますし、それぞれのスタンスがあります。それをまず認めることというのが1つ大事なかなと思っていて、先ほど『読売新聞』と『産経新聞』の例が出ていましたが、それ以外にも新聞はたくさんあります。同じような報道がされていたかどうかちょっと僕は知識がないのでわかりませんが、違うような角度で報道していた新聞もあるはずですよ。そのなかで先ほどから話が出ていますが、いろいろな情報にできるだけ触れて自分の考えをつくるということがまず1つ大事だと言いたいのです。

あとこれはまたちょっと視点を変えて言うのですが、先ほども日本の学生が話しましたが、往々にしてやはり自分の国の問題ではないと、朝鮮半島で起こっていることというのは自分の国の問題ではないんだ、という意識が日本には強いのかな。それはマスメディア全体に通して言えるのかなと僕は思います。それが例えば、日本と韓国の関係、日本と北朝鮮の関係というものにある程度視点を絞った報道の仕方というかたちで、日本人の前に現れてくるのかなという意識があります。仮に朝鮮半島が統一した場合に、やはり日本のことを考えて絶対に無視できる環境にはありません。当然コストを負担しなければいけなくなるのは避けられないと思います。そういった意識がまずマスメディアのなかの人間にあるのかということ、あるのだったら、なぜそれを報道しないのかということが1つ問題だと。それを受けて日本の国民はいろいろな新聞やら雑誌やらテレビやらを読んだり観たりして自分の考えをつくっていくことってというのが、その次に大事になってくることなんじゃないかなと思います。

拉致問題からちょっと外れたかもしれないですけども、僕の意見はそんなところです。

柳智星・司会 外国語大学のユ・ジソンです。いま日韓関係とかメディアの役割というのが私たちのこのフォーラムのテーマなんですけれども、あまりにも北朝鮮問題について議論が集中しているのではないかと思います。

す。もちろん北朝鮮問題、重要ですけども、しかし私は少しほかの切り口から申し上げたいと思います。

竹島問題、ドクト(獨島)という問題です。韓国で先日竹島が問題になったとき、韓国のこれまでの対応というのは、「火のように燃えて、冷めていった」ようなあり方でした。マスコミも同じです。一時ものすごい調子で報道し、そしてすぐさま熱が冷めてしまうというようなあり方でした。

感情的報道、韓国のメディアのマナー

私の考えでメディアの役割、それは感情的に扱ってはいけないということです。日本の帝国主義の復活だとか、このように韓国のマスコミが報道したこともあります。感情的に扱っていました。そうしていまでは、うやむやになってしまっている状況です。このフォーラムも率直に意見を述べ合い、どこで妥協点を見出しうるのか、そしてどこで改善策を見出しうるのかが問題だと思います。韓国におけるメディア、世界的にかなりのレベルには達していると思います。しかしメディアのマナーという点では、まだまだ問題点が多いと思います。竹島問題が議論になったとき、韓国のインターネットには次のような文章がありました。「きょう日本の外務省のホームページに何時に同時にアクセスしよう」と。日本の外務省のホームページのサイトを麻痺させようというような戦略ですよ。ここで聞きたいことがあります。日本の皆さんは韓国のインターネットに関係する、この若い方たちの一部の動きについて皆さんどう思いますか。そして、韓国におけるマスコミの態度、メディアの態度、そして日本のマスコミのアプローチとか分析とか対応、なんらかの問題があったときに日本はどのように対応しているのか、どなたかお話ししていただけますか。

金永振 その前に1つだけ質問ですけども、「きょう外務省のホームページに一斉にアクセスしよう」というのは、既存の何かしつかりしたメディアが呼びかけたものなのか、あるいは個人的なサイトが呼びかけたものなのか、どちらなのでしょう。

柳智星・司会 個人の意見です。個人の意見がそのように集まっていきます。

玄武岩 誤解があってはいけないと思いますので、韓国のインターネット新聞とか、いまポータルサイトにおけるそういうニュースサービスがい

いろいろあるんですけど、そこには、日本も最近ヤフーとか見てもそういうシステムになってると思いますけど、基地ごとにそれぞれ自分の意見を書き込みができるようになってるんですよ。だからもし日本のある団体が竹島のほうに上陸しようとしたという、そういう記事が載ると、その記事に対してだれもが自由に、匿名で自分の意見を書き込めることができるようになっていて、そこで極端な人はそういうことをやろうと言い出したり、書く人もいるし、また極端なナショナリスティックな対応をする人もあるということですよ。そういう組織があったりとか団体でやっているという、そういうものではないと思います。

菅原・司会 ありがとうございます。韓国のインターネットやメディアの態度について、日本の学生は、どのようにいま感じているでしょうか。だれか意見のほうお願いします。

意見をもたないでも生きていける日本の若者

金永振 まず最初にあった、外務省のホームページを麻痺させようというような行動をどう思うかということですけども、それはもちろんだの国でも同じだと思いますが、絶対にやってはいけないことだと、それはそれで終わりだと思いますが。少し日韓のなかで話をするとき、メディアに関して気を付けなきゃいけないなと思ったことがありました。1つは日本の、特に若者に関して限って言うと、日本の若者っていうのはまず1つ政治的に意見や立ち位置というのがしっかりしていない人がすごく多いということです。そのうえで情報収集をするのがインターネットや新聞などの活字ではなくて、テレビの映像的な情報収集に頼っているというところ。テレビというのは基本的に大雑把なものですから、そこでの情報収集をしている日本の学生が、政治的な報道に揺れやすいというのは、もっと日本の学生というのは自覚をもって勉強しなきゃいけないなと思うことが1つあります。とりあえずそれだけで、はい。

菅原・司会 ありがとうございます。日本の若者は確かに、僕が感じるんですけども、意見をもっていないという人がとにかく多い気がします。そういう人々が確かに情報収集で、活字ではなく本当にテレビとかの偏ったような情報から得てしまうと、またその人も偏った人間になってしまうと思います。ほんとに個人的な話になんですけども、僕の地元の友達た

ちは日々別に新聞なんか読まなくていいやっていう人々なんです。別になんかそういう興味のない人は韓国とかの情報を知らなくても全然生きていけるっていう人々が、そういう思っていて生きていけちゃうというのが、いまの日本の現状なので、何て言うかやっぱりもっと一日本国民として、そういう隣国の韓国という近い国のことをもっと知らなければいけないなあというのが日ごろ僕は思います。ちょっとわかりづらくてすみませんでした。ほかに何か意見はありますか。はい。

金永振 その補足なんですけれども、韓国だけではなくてたぶん日本の学生というのは日本の政治にもあまり関心がないと思います。そのうえで1つ韓国の学生に質問なんですけれども、いまこうしてお話をするだけでも韓国の学生というのはすごく意識が高くて、1つ1つのニュースに対して自分の意見をまとめようとしている、そんな感覚を受けました。そのなかで韓国、1つは僕の個人的な分析は、軍隊というものがあるからなのかなとは思いますが、育っていくなかで政治的な意見をもったり、そういう考えをもつきっかけというのはどのへんにあるんでしょうか。

許珠賢・司会 じゃあ、ユン・ウンジョンさん。

尹恩貞 韓国の学生が政治のような社会問題に関心をもつことになった、そのきっかけについてですね。私が思いますに韓国人は普通政治に対する関心は非常に高いです。学生も議論するとき、学校でディベートするとき政治問題というのがやはりテーマとしていちばんよくあがります。それから食事をするとき、それからお話をするときも政治というのがよくテーマにあがります。その理由を考えてみますと、皆さまご存じのように韓国のインターネットは非常に発達しております。それは新聞やテレビと違いまして、双方向のコミュニケーションができるわけですね。ですので、自分の意見というものを自由に掲載することができますし、それに対するフィードバックもすぐ得ることができます。そういったインターネットの発達によりまして、自分の意見を自由に開陳することができますし、それに対するほかの人の意見も受け入れることができます。それらによって政治への関心というのが深まっている、高まっているのではないかと思います。

許珠賢・司会 キム・ウンジョンさん。

金銀貞 尹 ユンさんの意見に付け加えますと、韓国という社会は北朝鮮と対峙しております、分断状況にあります。そういった特殊な状況にあ

りますので、政治的な問題、それから国家の安全保障によって経済でありますとか、国民の生活というのが変わり得ます。ですので、小さいときから両親が話す話でありますとか、そういったニュースなどを通じまして政治問題に関心をもつようになったのではないかと思います。

脱北者、日本ではどうとらえているか

1つ質問したいんですけども、先ほど出た話ですけども、脱北者が大量で400人ぐらいが韓国に入ってきました。これが非常に大きな話題になったのですけれども、日本でもこういった問題が報道されたのでしょうか。それから脱北者に対して関心をもったことがあるかどうか。それから友人とのあいだで韓国でありますとか、北朝鮮について話し合った、それがテーマになったことがありますか。

菅原・司会　いまのキムさんの質問に対して日本側の学生はどう思いますか。はい、上村君、どうぞ。

上村　このあいだも、脱北者が400人以上韓国に入ったという報道は日本でもありました。ただその報道の内容が400人を乗せたバスより、それについて行く報道のバスが多いんじゃないかという、そういう趣旨の報道もあり、ちょっと真剣味に欠けることがあったかと思います。

あと脱北者が議論や話のテーマになるかということですが、さっきもお話ししましたが、どうしても日本人の学生はそういう問題意識を「もっている人、もっていない人」の差が激しいと思うんですね。たぶんここにいる日韓フォーラムに参加している日本人の学生は、ここに出席してる以外の友達とも、そういう話をしたことがあるとは思いますが。ちなみに僕はあります。

仮にもう1回、例えば朝鮮半島での南北戦争が起こるとか、北朝鮮が日本に攻めてくるとか、そういう北朝鮮に何かあったときに大量の難民が日本に押し寄せるとか、どうして脱北者のような難民を日本は受け入れようとしれないのか、そういう話は僕のまわりではよくありますけれども、一般の若者になるとちょっと疑問に思うところはあります。以上です。

菅原・司会　在日の方で、高玉蓮さんなどのまわりでは、普通の日本の学生よりも身近な話題だと思うんですけども、どうでしょうか。

高玉蓮　明治大学の高玉蓮です。私のまわりでも脱北者の話題はすごく

出るんですけども、日本のメディアというものを見てますと、脱北したそのことしか伝えてないような気がするんですね。その後、脱北者がどういう生活を送り、その人が韓国でどういうふうな生活を送っているか。また日本に一時期脱北しようとした人が、女の子がいたというふうな話も出ましたけれども、そのことに対して結局そのことだけをとらえて、それだけで終わらせようという風潮がすごく強いのではないかと私は感じております。以上です。

牛島・司会 お茶の水女子大学の牛島です。いまのお話なんですけれども、私も同じように思っていて、その脱北者が出たとか、そういうニュースがあったときに、確かにニュースで報道されて、私はそれほど、関心というものは割と日本人の側はもつんじゃないかと思っているとみんな思うんですけれども、それで話題にはのぼる、議論ももしかしたらすごく熱くされるかもしれないけれども、そこで用いられている情報というのはすごく少ない限られたなかの情報だけで議論をしようとしている、土台がないのに、何て言うかイメージだけでしようとしているというところがあるんじゃないかと思います。そこでそれ以上の正確な情報を集めようとすればいいのですけれども、そういうふうにはなっていないというのがあるんじゃないかと思うんですね。

そこでメディアがどういうふうな役割をしているのかと言うと、私たち先ほどからいろいろゴシップ的な部分しか見てないんじゃないかと報道されていて、私たちはそれにすごく流されているんじゃないかというのがありましたけれども、ワイドショーとかインターネットのその2チャンネルとかいうのを観ていたときに、私たちそれほど振り回されているかなと思って、割と懐疑的に本当かなと思いつつながら距離をとって、いろいろ嘘も含まれているんだろうなんて思いながらみている部分というのが、結構多くの日本人にあるんじゃないかなと思うんです。だけどその真実を、じゃあもっと突き詰めてたくさん情報を、事実を集めて議論しようというところまでは踏み込めてなくて、そこでのメディアもそういうもっと事実を知らなくてはいけない、そのそのうえで議論していこうよというふうな啓発するっていうふうなところまで役割を担いきれてないというふうな感じています。

メディア・リテラシーの問題

じゃあメディアはどういうふうにはたらいていったらいいのだろうなというふうに思っていたんですけども、昨日朝日新聞社のほうでお話を聞いていて、でもやっぱりメディアのほうにも限界があるなというふうに思ったんですね。そこで重要になってくるのはやっぱり私たちの意識であって、情報を集めようだとか、そのどうやったら情報を読み解いていこうかというメディアリテラシーの問題になると思うんですけども、そこにちゃんと私たちが向き合えない、踏み込んでいけないというのは何でなんだろうという、その根本的なところを問わないといけないんじゃないかというふうに思っています。

それで韓国のほうでは、そういう、もっとメディアの使い方のいまマナーの話っていうのもありましたけれども、受け取り方というのもちゃんとした議論というのが本当に一般の人たちのなかであるのかということも知りたいです。すみません、長くなりました。

牛島・司会 康典絵さん、お願いします。

康典絵 メディアに関して自分の意見を少し補足として述べたいと思うんですけども、やはりメディアというのは、さっきおっしゃられたように、限界があると思うんですね。多くの情報を伝えるというところで、そこから私たちがどう判断していくか、ということももちろん大事なんですけども、その報道されたもの、見たものから、その後どうしていくのかというところの視点が欠けているんじゃないかなあ…。

例えば、その脱北者の問題が先ほど言及された方がたくさんいたんですけども、きょうたまたま国連大学に入ってくるときに、クルド人の難民の方がUNのこの本部の前で訴えていらっしゃいました。おそらく私もちゃんと知らないのですけれども、ビザがおりないとか、そういうことだと思ってしまうんですけども、やはり日本の難民の状況を見てみると、年間に本当に何十人規模しか受け入れないという状況があって、そういう状況を変えないと今後脱北者の方がたくさん来たときに、私たちが受け入れる状況を整えていけるのかということまで掘り下げていかないと、結局メディアで脱北者の人たちも取り上げられて、それで終わってしまうと。実際にそれは映像としてなんですけど、身近として私たちが感じていないということが多いのではないかなあと、事実としてそれを受け止めたあとに、ど

うしていくのかということまで掘り下げていかないと、やはり映画を観てるような感覚でしかメディアはとらえていないんじゃないかなと思いました。以上です。

菅原・司会　いまの日本側の意見に対して何か韓国側の人にはなんか思うことありますか。ちょっと待ってください。玄さん、どうぞ。

玄武岩　メディアをどう見るかというすごく根本的な問題に入ってしまったって、この問題というものはマスコミュニケーション学というものが現れたときからの、そういう問いでありまして、いまなお続いていると思うのですけれども、それで最近はメディアリテラシーとかそういう言葉で、どのようにそういうものを解説していくのかということが小学校のなかでも、そういう教育が行われたりしてるとは思うんですけど、メディアというものは1つはどういう問題があるかと言うと、ファクトというものがあつたら、それをまず伝えているか伝えていないのか、つまり何を伝えて何を伝えていないのかというそういう問題が1つあると思いますね。事実を伝えてはいるのですけれども、それをどのような方向性から伝えているのかという、そういう問題もあるんですね。

もう1つあげますと、本当にこれが事実なのか、嘘をついているのではないか、これが本当にファクトなのか、それには誤報というものもありますし、また悪意的な歪曲というものがあるんですけども、さまざまな要素があつて、それぞれ記事というものがどういう状況のなかでわれわれが、いま現実を見るようになってきているのかということを考えなければならぬとは思っています。

韓国メディアは保守系で8割

そういうことを考えると、ただ日本だけである問題ではなくて、やっぱり韓国でも同じです。北朝鮮の問題を例にあげますと、やっぱり日本では、さっきどなたか『朝日新聞』を左派と言いましたけど、私はぜんぜんそういうふうには思っていないんですけどね。韓国は、韓国のメディア市場の8割を占めているのが、むしろ『朝鮮日報』、『東亜日報』、また『中央日報』という、日本でいえば『産経新聞』のような保守的な新聞がいま8割を占めているような状況なんですよ。それはどういうことかと言うと、韓国における新聞報道というものが日本の報道よりもっとむしろ反共主義的

なそういう色彩というものがかなり強いという、そういう状況もあるんですよね。

インターネットというものは、もちろんそのあとに出てきたもの、最近出てきたものでありまして、もちろんインターネットというものを通じて、さっき記事ごとに反動をかけるというふうに言いましたけど、韓国のインターネットの面白さというものは、いろんな人が記事、1つ1つの記事に対して書き込みをやってますが、いま韓国では記事が1つ記事としてニュースになるというものではないのですよね。記事というものは、それにいろんな人が書き込みをして、コメントをして、批判をしたり、論駁したりという、そういう書き込み文化というものと一緒になって1つの情報として提供されるというふうになっているのが、いま韓国のインターネットを、情報を1つ摂取する1つの仕方というふうには活用しているというものではないかと思うんですけど。なぜそういうものになったかと言うと、やっぱり既存のメディアに対する不信感というものがあると思うんですよね。やっぱりいまの新聞紙上のなかで保守的なメディアというものが主流である状況のなかで、それに代わる、あるいはオルターナティブなそういうメディアがほしいという、そういう熱望というものがあって、インターネットというものが主流メディアに対抗するような、インターネット権力というふうに言えるかどうかかわからないんですけど、そのような言葉が出るまでに成長してきたという、そういう状況があります。

メディアをどういうふうに見るのかというものを考えた場合、ただ、いろいろもつといろんところから情報収集すればいいという、そういうものではないと思うんですよね。そこには、別に嘘を言っているわけではないんですよ。

いまマイケル・ムーア監督の「華氏911」をめぐる、日本のメディアでは、何て言うか、それはブッシュ大統領をバカにしようとしてつくったものであって、実際の状況とは違うものがあるということをやわざアメリカに行って、そのときホームビデオを撮った人があったりもする熱心ぶりを示していましたが、それは確かに一理あるということなんですよね。教室で、最初そのテロの知らせを聞いたときにポーっとしているということは、学生たちがだれかうたっているのを聞いてるという状況のなかで、ポーっとしてるように見えたという、そういう仕掛けというものは確かに

あったんですけど、メディアというものはただ、何て言うか、言われているのがおかしいとか、本物ではないかもしれないという、そういうものではなくて、やっぱり「伝えているもの、伝えていないもの」、また事実としてどういうふうな見方から見ているのか、またそれが本当に事実であるのかどうかという、そういういろんな層があると思います。そういうものを見極めたうえで、メディアというものを自分のなかでまた再構成していくという、そういう過程というものが重要なのではないのでしょうか。

許珠賢・司会 キム・ボギョンさん、お願いします。

金甫徑 玄武岩さんのいまのお話はあまりにも早くて、ちょっと私には理解できない部分がありましたので、もう少しゆっくりお話していただきたいと思います。

玄武岩 ゆっくり話します。あっ、もう1度ということなんですか、違いますよね、これからゆっくり話してほしいというお話しですよ。

柳智星・司会 玄武岩さんに質問したい…。いま韓国で『朝鮮日報』、『中央日報』が韓国の経済状況について、どのように報道しているとお考えですか。玄さんの認識はどうなんですか。

玄武岩 この話になってしまうと、ほかの、特に日本からの参加者の人たちはなかなかやっぱり理解できないものがありますので、それはまたの機会にということにはいかがでしょうか。一緒に議論になるような、そういうふうにはなかなか進まないと思いますので。

柳智星・司会 わかりました。

菅原・司会 では、鬼原君、どうぞ。

鬼原 すみません。いまユ・ジソンさんが質問したのは、先ほど玄さんがおっしゃった『東亜日報』、『中央日報』、あと『朝鮮日報』が一まとまりにして保守系とされてしまったことに対して、違うんだよということじゃないんですか。だったら、聞きたいんですが。

玄武岩 もし、そういうものであれば。ただ経済問題についてということであれば、日本の皆さんあんまり、何て言うか、どういう事情なのかということをはなかなり理解しにくい部分があったと思いましたので、ただ「中・朝・東」についてどう思うかということであれば、お話できますけど、自分の考え方は。そういうものでよろしいのでしょうか。

金素悦 私は、進歩あるいは保守というから切り口から、じゃあ経済問

題についてこの考えというところで、あなたのお考えを知りたかっただけです。

玄武岩 少しはあるかもしれないことを1つの例だけを取り上げてみますと、経済が大変なのはグローバル化されるようないろいろな状況のなかで、韓国だけではなくて、やっぱり多くの国がそのような新自由主義というそういう状況のなかで、大変な状況を乗り越えていこうとしているような状況だと思うのです。

1つ、日本でも首都機能移転ということで10年ぐらい前から、いろいろ議論されてましたけれども、韓国でも首都を移転するというそういうこと、行政首都を移転するということがかなり大きな問題になってまして、それをめぐって与野党、韓国社会がまた分かれていろいろ議論やってるんですけど、それについてどういう効果があるということは、私は知識があまりないので言えないんですけど、ただ1つ言えるのは『朝鮮日報』、『中央日報』、『東亜日報』が過去、90年代初頭、前政権、またその前の政権、保守的な、自分たちが支持していた軍事独裁の政権までも含めて、そういう状況のなかでは、そのときの権力者が首都を移転するという、そういうことをした場合、これは本当にやらなきゃならないとか、賞賛しながらその必要性というのはどんどん唱えていたのが『朝鮮日報』『中央日報』『東亜日報』であるんですよね。それがいまなぜノ・ムヒョン政権がそのことを遂行していこうとしたような状況のなかで、それに対して徹底的に反対しているのかということを見ると、やっぱりそれはその問題の本質について政策的な面から見たというものよりも、いまの政権に対する政略的な構成のための1つの道具として反対しているということ、過去の論調、報道、それといまはどういうふうに変わっているのかということ考えた場合、ただ政策的ないろんな問題点を指摘するというところからの批判ではないのではないかなというふうに私は確信しています。

柳智星・司会 キムさん、お願いします。

メディアの進歩・保守、判断するのは読者

金素悦 メディアの左・右、進歩・保守に関連しまして、私は玄さんの意見とは違いますので、私の意見を申し上げたいと思います。メディアの進歩、保守、あるいは左、右、その傾向を判断するのは読者だと思います。

ノ・ムヒョン政権を「批判する・批判しない」、その判断の能力は読者にあると思います。どんな集団であれ、どんな個人であれ、自分の基準だけが絶対だというようなことはあり得ないと思います。玄さんは『朝鮮日報』、『中央日報』、『東亜日報』、この3つの新聞が韓国のメディアの新聞の70%を占めて、掌握しているとおっしゃいました。韓国にはそのような同じように主張している社会団体があります。しかし、そういった意見が韓国社会の主流ではないと思います。その一部の意見を、例えば親日行為とも関係があると思うんです。『朝鮮日報』の場合は、日本の植民地時代に日本を称えた記事を書いたことがあると、そこで韓国で社会運動をしてる人たちは『朝鮮日報』のいまのあり方とは関係なく、『朝鮮日報』は抹殺すべき新聞だというふうに主張しています。しかしそれは、私もそう思います、大方の国民も偏った見方であるというふうに判断しています。

次に行政首都の移転について、玄さんは間違った認識をしていると思います。90年代の話ではありません。韓国のパク・チョンヒ（朴正熙）大統領のときにそのような首都移転の話がありました。当時は実現できなかった課題でした。そしてノ・ムヒョン政権に入って、いままた再び議論になっているのです。90年代の話ではなかったということです。つまり、先ほどの玄さんの認識には誤りがあるということ指摘させていただきたいと思います。

玄武岩 　　だけど、90年代の初頭にも確かにあったと、私は思っています。

菅原・司会　　まず通訳の方、本当にご苦労さまです。はあ、はあ息が聞こえるんですけども（笑）、これからも引き続きがんばってください。

いままでの話のなかで、メディアということに関して日韓両国の話がずいぶん出たと思います。この日韓フォーラムもそうだと思いますが、もともと軸は日韓友好というための議論だと思いますので、いまメディアの話が出揃ったところで、今度は、《その2》にもありますが、「論よりキムチ」という実体験が自分の考え方に及ぼす影響というのはすごく強くあると思いますが、メディアを通じて得た情報が、実際にこの日本に来て変わったこと、あるいは日本の学生でも韓国に行って変わったことなど、その点ちょっとお互いの学生からお話を聞きたいなと思います。

牛島・司会　　すみません。次の議題に進む前に、もしよかったらここで

1度休憩をしたあとに、もう1度考えるのはいかがでしょうか。きょうはずっと話をしているので、少しリフレッシュも兼ねて休憩を入れたほうがいいと思います。

柳智星・司会 であれば《テーマ1》について、ほかにご意見があればお1人、お2人受けて、そして整理をして休憩に入ったらどうでしょうか。このメディアについて、この《テーマ1》について、お話しになる方はもういませんか。

玄武岩 メディアの話、自分なりに解釈すると、でしょう。日本のメディア、韓国のメディア…それぞれ事情がある。それが現状であると。われわれにとって重要な点は、個人としてどういうふうにとるか、それを吟味する必要があると。問題をちゃんと相対化して客観的に考える、その吟味の過程が必要なんじゃないかなと考えました。北朝鮮の問題や脱北者の問題に関して韓国側の学生や韓国の世論というのが、冷静に考えている、それをなぜかなというのを自分なりに考えたのですが、それは問題というのを身近な問題としてとらえている。身近な問題としてとらえることによって、それに対する議論の深まりというのが違うのじゃないかなと考えました。その点において日本の議論に深まりがないのは、それはあくまで身近な問題としてとらえてないから、というふうに感じました。

ただそこで問題なのは、先ほど意見が出た韓国のことについて知らなくても生きていける、それは僕は大きな間違いであると考えます。経済的なつながりだけでなく、人と人との交流、そういうものの深まりというのが、現在の日韓においては相互依存の関係というのが非常に強いのではないかと考えます。その状況においては本来韓国や北朝鮮の問題というのもわれわれは身近な問題として受け止めるべきではないかと考えます。どれだけ身近な問題であるかということを中心にわれわれが認識する、それこそメディアの役割として現状を、われわれに身近な問題としての現状を伝える責任というか、使命があるのではないかと考えます。以上です。

許珠賢・司会 それでは、キム・ボギョンさん、最後にどうぞ。

金甫徑 キム・ボギョンです。私は個人的に気になったことを質問したいんですけども、日本に来て、日本の人と若干お話をしたんですけども、反日感情でありますとか、中国人のもっている反日感情についての被害意識、被害感情というものを、なんとなく日本の人はもっているのでは

ないかなというふうには私は思いました。これについてどういうふうにお考えなんでしょうか。もしそういった被害意識をもっている人がいるとすれば、その反日感情をもつようになった理由が何なのか。それについて、どういふふうにお考えになっているのか……。

柳智星・司会 それについては次のテーマに出てくるんですね。ですので、《テーマ2》のところで話し合ったらいかがでしょうか。15分ぐらい休みまして、45分にまた始めたいと思います。休憩です。

【休憩】

《テーマ2 異文化体験と日韓関係》

論よりキムチ…？

キムチの日本定着、韓国ドラマ「冬のソナタ」ブームと今後

柳智星・司会 時間になりました。着席していただけますでしょうか。

牛島・司会 せっかくコメンテーターの先生方がいらっしゃってくださっていますので、ぜひお話をうかがいたいと思ひまして、前半の話を受けて、話を聞いていて考えられたこととか、私たちに何か示唆を与えてくださるようなお話を、ぜひコメントしていただけるとありがたいのですが、イー・ウォヌン先生、お願いできますでしょうか。

李元雄教授 まず非常におもしろく皆さんの討論を傾聴いたしました。そして、練習も別にしてなかったんですけれども、テレビの脚本があるように非常に進行がうまく進んだということにつきまして、私自身、非常に皆さんを誇らしく思います。

私が思いました第1の印象ですけれども、韓国と日本の教育、これは非常に近寄っているというふうには思いました。私も教壇で皆さんと一緒に教えて、一緒に生活しているわけですけれども、そういう私なりに非常に多くの問題が教育にあるというふうには思っておりますけれども、批判も多く出ておりますけれども、生産物というふうには言って申し訳ないですけれども、学校というその生産物、つまり生産過程にいる皆さんのその言葉、そ

して考え、その方向、考える方向、非常に近寄っている基本的に似通っているような気がいたしました。

広い観点から批判する学生に安心

例えば、北朝鮮問題について議論しながら、自分の国の問題ではないというような普遍的な問題であるというふうに見なくてはいけない、自分の国のマスコミについて、民族主義的な、あるいは狭い観点から見た利己主義ではなく、広い観点から批判をする、そういう勇気を見せてくれたと思います。そういった点から両国の高等教育がどうであれ、もちろん失敗したところもあると思いますけれども、非常に似通った生産品をつくりつつあるのではないかというふうに思いまして、私、少し安心をいたしました。

個々人の話のなかから私もいろいろ学ぶところが多かったですし、後半の議論も非常に期待をしたいと思います。以上です。

牛島・司会 ありがとうございます。それでは次のトピックをとりあえずつながる部分も多いのですが、変えましょう。2番目のテーマは「異文化体験と日韓関係」ということなんですけれども、そこに先ほど1のところまで問題というか、出てきていたように、日韓の人たちのあいだで、日韓関係というものとか歴史とか政治ですとかですね、そういった関心の高さに格差があるんじゃないとか、日本では身近な問題っていうふうにしてとらえられてないのではないかというふうな話が出てきたんですけれども、そこで何か可能性というか、糸口が見つけ出せるのが直接の体験というものではないかなとやっぱり思うんですけど、そこでその異文化体験というのを、この場もそうですけれども、とらえていきたいというふうな議論の場にできればと思います。

柳智星・司会 ではまず、午前中の時間、このテーマについて討議をいたしました。それについてのお話をしたいと思います。

《テーマ2》は、体験に根ざした日韓関係ということかと思います。個人的なお話をいたしますと、日本ではキムチとか「冬のソナタ」とか、ペ・ヨンジュンとか、あるいは韓流とか、こういった韓国の文化が非常に多く日本のなかに入り込んでいると思います。しかし、韓国では日本について何を知っているのだろうか、日本のどういった文化が入っているのだろうかということについて考えてみたいと思います。それからこのフォーラム

の目的が日韓のあいだの文化の違いを認識し、今後どのような方向に発展させるべきか、その方向を模索することにあると思います。皆さんの率直なお気持ち、お考えを披露していただきたいと思います。

では《テーマ2》についての私どもの議論について報告いたします。

日本はアニメという世界に誇るべき文化があると。韓国ではこの日本のアニメ文化にどれだけ接してきたのか、どれだけ知ってるのかということについてまず議論してみたいと思います。

次に日本における韓国ブーム、韓流ブーム、これはバブルではないのだろうか、本当のブームなのかということですね。そして韓流によって過去の暗い部分を乗り越え、今後の新しい方向性を模索することはできないだろうかというような視点で話し合ってみたいと思います。

次にもう少しデリケートな問題ですが、サッカーのアジアンカップのとき、中国と日本との試合のときに中国では非常な反日感情が見られました。あの反日感情は中国に限ったものなのか、韓国ではどうなのかということについても議論してみたいと思います。

それから、先日韓国であったことですが、ある女性のタレントがヌード集の撮影をし、写真を撮ったということです。そのときのテーマが、いわゆる「従軍慰安婦」をテーマに写真を撮った、ビデオを撮ったということです。これは韓国社会で大きな波紋を呼びました。制作者はビデオテープ、そして写真集を全部燃やしました。焼却処分しました。そして、その女性のタレントは「従軍慰安婦」の方々はもちろんのこと、国民を前に国民に対し謝罪をしました。こういったことについて、日本の学生の皆さんはどのような認識をおもちなのか、意見を聞きたいと思います。

そして「冬のソナタ」のヨン様人気というのは日本では40代、50代の女性のなかで見られるという話がありました。韓国で「冬のソナタ」が人気だったのは若い世代の間でのことでした。日韓の間にはどのような違いがあるのか、なぜこのような違い、いわゆる人気層の違いというのが出てきたのかについて議論してみたいと思います。

そして、私はこの1つのテーマについて15分ぐらい時間を割いてみたらどうかと思います。15分経ったら次のテーマに移ると。言い尽くせなかったところ、十分議論できなかったことは最後の質疑応答とか、討論のときにまとめて意見交換をすると、こういうふうに進めたいと思うんです

けれども、反対意見ありますか。反対意見あったら手を上げてください。いないようですね。では、私なりの方法で進めたいと思います。

雰囲気がちよっと硬くなったような気がしましてね、ちよっと言ってみました。

ここで韓国の学生に質問します。韓国の皆さんは世界で日本のアニメーションが非常に高い評価を得ているということをご存じですか。じゃあ、皆さんなりに日本のアニメ、アニメーション文化についてちょっとコメントしてもらえますか。

「となりのトトロ」韓国でもみんな好き

李芝遠 私は漫画が非常に好きなんですけれども、日ごろよく読むんですけれども、宮崎駿監督の「トトロ」が大好きなんです。トトロの漫画、これは大人でも非常に人気があるというふうに聞いております。それから子どもも好きだというふうに思っております。こういった日本の漫画というのは、韓国でもDVDでありますとか、本屋さんとか、そういうところで非常にレンタルされています。それが現状です。

柳智星・司会 ではちよっと補足説明したいと思います。私が小学校のときでした。当時「ドッジボール王」という、そういう漫画があったんですけれども、日本の皆さんご存じですか、「ドッジボール王、トンケ」。その当時この漫画、これは韓国の小学生、中学生のなかでは、幼稚園もそうですけれども、いまの「冬ソナ」のようなブームだったんです。当時一家に1つずつこのドッジボールを持とうという、深刻な話をしてるんですけどね、はい、当時そのキャラクター1人1人の、そのキャラクターを真似ようという、そういう動きがあるぐらいだったんです。ところがそれが日本の漫画だったのかどうかは、いま、つまり大きくなってからそれを知りました。そういった情報収集におきまして若干問題があったんではないかなというふうに、いま思っております。以上で終えたいと思います。

このテーマについては、ゆっくり1人ずつまわっていったり、意見を聞いていたらどうかという、いま提案が出ました。それから皆さんちよっとマイクを近づけてください。では、ゆっくりお話しください。

日本の学生はどうでしょうか。日本のアニメーション文化と韓国、韓国最高の文化のその違い、採点についてコメントいただけますか。

二階堂 私は2年ほど前にフランスのほうで1カ月ほどワークキャンプをしていたんですけども、そのときに韓国の学生とゆっくり話をする機会があって、私以上に日本の漫画やアニメについてすごく詳しくて、「○○って知ってる」というふうに作品名を出されるんですけども、こちらのほうが本当わからなくて、たじたじになるぐらいだったんですよ。この前テレビを観ていたら、韓国のほうでは漫画専門の図書館があって、そこで無料で自由に読めるというふうなのを拝見したんですけども、そういうふうに、何でしょう、漫画やアニメに、あと衛星放送でも流れているそうで触れる機会が多いのでしょうか。質問みたいになってしまいましたけれども、韓国の方々どうなのでしょう。

柳智星・司会 だれに質問、韓国の学生に質問されたということですよね。

二階堂 そうです。

柳智星・司会 では、これについて発言される方。発言するときには名前をお話してください。

李銘淑 漫画を無料で貸してくれる図書館はないというふうに聞いております。中国の学生から90年代の後半ですけども、アニメーションが音声的に普及したんですけども、いわゆるヤミで、公式には普及してなかったんですけども、日本の漫画が公開されてから、解禁になってからは爆発的な反響があるだろうと思ったんですけども、観客数も思ったほどは動員されませんでしたし、日本のアニメーションに対する関心というのは、それほど思った以上には増えませんでした。

ですので、日本の漫画についてはマニアが形成されていて、そこで普及しているぐらいで、韓国の国民すべてが日本のアニメーションに積極的にアプローチしているわけではないような気がします。これまでは禁止されてましたので、むしろ関心が多かった、ところが解禁になったあとは、それほど大きな反響はなかったような気がいたします。

金銀貞 接する機会はどうなのかという質問でしたけれども、インターネットでも日本の漫画をサービスしています。それから携帯電話を通じても日本の漫画に接することができます。こういった状況ですので、すべての人が接しているわけではありませんけれども、関心ある人であれば簡単に接することができます。

それから、レンタルショップを通じて、そういうものを観ることができますね。

韓国で読まれる漫画、半分以上が日本のかも

柳智星・司会 補足説明をいたしますと、漫画の本を見ることのできる漫画の部屋というのがあるんですね、漫画ルーム。それは無料に近い料金を支払いまして、ずっとそこに座って漫画を見ることができます。私思いますに、そのなかの半分は日本の漫画ではないかなと思います。私たちはわかりませんが、おそらく半分ぐらいが日本でつくられた漫画だと思えます。「スラムダンク」は日本の漫画ですよ。おそらく韓国で読まれる半分以上の漫画は日本ののではないかなと思います。私も日本の漫画をかなり見ました。一応私からの補足説明です。ではどうぞ。

玄武岩 付け加えたいと思うんですけど、皆さんよりは少し先輩なのでそういう一世代上の方のほうからの日本のアニメ、漫画、そういうものだったのかということがちょっとお話できると思うんですけどね。僕の世代であれば、これ言っちゃってもうおやじ扱いされるので言いたくないんですけど、実は日本に来て一緒に歌えるアニメの歌っていうことで「マジンガーZ」の歌があるんですよ。それは韓国で70年代に放映されていて、歌もまったく同じ、歌詞はもちろん違うんですけど、だからいまでも同じような世代の人とカラオケに行くと、「マジンガーZ」の歌一緒にうたえるんですよ。それだけでなく「銀河鉄道999」とか「ガッチャマン」とか、韓国でこれまでやってきたほとんどのテレビアニメというのは、ほとんど、ほとんどと言ってもあえて言えば80年代までは9割ぐらい、最近では韓国でもアニメ制作しはじめたので、少し現れてはいるんですけど、それ以前はほとんどは韓国は日本の漫画を韓国でつくったアニメとしてずっと見てきました。

そのあといろんな単行本の漫画とかが不法に流通するという、そういう状況がありまして、90年代になるとインターネットとかの同好会で、日本のアニメや大衆文化に関する同好会みたいなものが、パソコン通信とかではやってまして、それがやがてインターネットが普及することになって、いまでもそのよう日本の漫画、アニメ、ドラマとか、いろいろな大衆文化を接する機会というものは、もうすでにそういう条件というものは、もう

数年前から整っていたという、そういう状況が言えるのではないかと思います。

柳智星・司会 はい、わかりました。これ以上、ほかにありませんか。では、最初に手を上げた方。

康典絵 奥の学生の方に聞きたいんですけども、いま日本のなかでは韓流と言われている韓国の文化がたくさん入ってきて、すごくいろんな人に受け入れられているんですけども、韓国料理であったり、「冬のソナタ」であったり、エンターテインメントな部門でも、韓国において日本の文化はどういうふうに入られて、もしくは関心をもってる層の人たちたくさんいるのでしょうか。

柳智星・司会 それではお答えください

尹恩貞 私、思いますに、日本で韓流のブームが起きたのは、最近のことだと思うのですね。韓国ではかなり前から日本に対する文化の開放によって多くのマニアというのができましたし、若い人たちは日本の文化について、特に大衆的なそういう感覚をもっていると思います。それからお寿司でありますとか、とんかつ屋さん、韓国のどこに行ってもそういうお店を見ることができます。で、日本の人はでも韓国でこれほど多くのお寿司屋さんとかとんかつ屋さんがあるとは、日本の人はご存じないようです。驚かれています。それから、韓国ではインターネットが非常に発達しております。ですので、特定の目的をもった人たちはオンライン上でカフェをつくっています。インターネットカフェですね。日本のテレビというカフェをつくって活動して、ある人が活動しております、そこに多くの関心をもった人たちが加入して、お互いに情報を交換し、そういういわゆる共通認識をもつという、そういうことが起きています。動画像でありますとか、ドラマでありますとか、そういったものをオンライン上で載せて、そして多くの人たちがそれを楽しんでいます。ですので、韓国の人たちのほうがむしろ日本の文化について幅広く接することができるのではないかと思います。

許珠賢・司会 いま私がお話したいことは、日本のアニメとか、日本の文化とか、あるいは日本の事情というのを韓国に知らしめる効果をもっているということです。私に大学には日本語学科もないし、日本関連の学科はありません。にもかかわらず、1学期に1コマあるいは2つずつくら

いは日本に関する講義がありますし、集中講座もたいへん多いです。日本のアニメとか日本のドラマとか、日本の文学とか、こういった文化的なコンセプトでもって日本の生活や日本の文化について分析するような講義だと聞きました。日本のドラマをダウンロードしたCDを友達がつくってくれて、私も何本か観ました。つまり日本のドラマを観て単に楽しむレベルではなくて、文化的なテキストで日本の文化を理解すると、あるいは学問的にアプローチして観るとか、そういったレベルにまで達しているというふうに申し上げたいと思います。

柳智星・司会 いまの話について日本の学生のほうから何かありますか。それから1つ皆さんにお話があります。…皆さん、もう少しゆっくりお話しください、ぜひよろしく願います。

それからいま《テーマ2》は、いわゆる韓国文化のブームということであります。日本における韓流、これは一時的なブームに終わるのか、それともこれから根付いていく1つのカルチャーとなりうるのかということなんですけれども、午前中ですね、このいまの韓流、韓国ブームを1つの取っ掛かりにして、日韓の関係を改善していく必要があるということです。しかし、やはり過去の歴史の問題はきちんとけじめをつける必要があるという意見がありました。

ではこの問題について、皆さんいかがお考えですか。ご意見をお聞かせください。どちらでもかまいません。どうぞ。

姜慧晶 私は過去の歴史の問題についてお話しするよりは、この韓流、韓国文化ブームについてお話ししたいと思います。韓国人あるいは韓国に対するイメージが最近良くなっているという話を聞きます。しかし、この韓国ブームが去れば、日本の韓国に対するイメージがどう変わるのか、これについて考えたことがある方、どうぞ考えをお聞かせください。

韓流ブームはブームで終わるのか

上村 先ほどご質問があったように、もし韓国のそういう韓流というものが、もしなくなったらどうなるんだろうかという話でしたけれども、この韓流ブームというのは、私はブームでは終わらないと思っています。なぜかと言うと、確かにこの韓流ブームというのが、その主であるのが、いま「冬のソナタ」が主なもので韓流ブームと言われていると思います。で

も、食文化はそれよりも以前にずっと前から入ってきていて、さっきから話にも出てますけれども、キムチであるとか、私、焼肉屋でアルバイトをしているんですけれども、実際、韓国風の焼肉であるとか、実際ちょっと狂牛病（BSE）の問題でお客の入りはちょっと少ないんですけれども、それなりに儲かっているとは思いますが。でもですね、ある程度根づけば韓国のドラマがある程度こっちへ、まあ「冬のソナタ」以外に放送されるように続くことがあれば、そこまで、カンさんが危惧するようなことはないのではないかなと思っております。

白井 僕は韓流ブームというのがブームに終わるのじゃないかなという危惧をもっています。というのは、私にとって韓流がくる以前の韓国のイメージというのと、現在の韓流で、特にペ・ヨンジュンとか「冬のソナタ」のイメージというのはなんか大きくイメージを変えられたなというのがあります。というのは、それ以前の韓国のイメージというのが、特に映画なんですけれども、ハン・ソッキュ（韓石圭：「シュリ」ほか）とかソン・ガンホ（宋康昊：「JSA」ほか）といったような、何て言うのかな、すごくこれぞ男ってというような、そういうイメージの俳優さんが多かったなというふうに思っています。私にとってそれが韓国のイメージであったのですが、いまの韓流ブームというのがすごくさわやかなイメージ、それまでの私にとっての韓国というのとすごく違った世界からやってきた文化のように感じました。

韓流から韓国の根っこを知る

特に思うのが、文化として、すごく「冬のソナタ」というのは、普遍性が高いんじゃないかなというふうに感じました。日本で特に受けられるのは、何て言うか、体臭を感じさせないような普遍性、さわやかさ、だれにでも受ける、万人受けするような感じがあるのではないかなあと思って、それは果たして地の部分としての韓国とは少し離れているんじゃないかなというふうに感じました。

なので、この韓流ブームというのが、あくまでそれは韓流ブームとしてであって、韓国というものの根っ子がつながったものとして定着するものではないんじゃないかなというふうに考えています。以上です。

金永振 僕はこの韓流ブームが日本に与える影響は、非常に強いんじゃ

ないかと思っています。その理由の1つが「冬のソナタ」なんですけれども、「冬のソナタ」が日本ではやってる年代は40代から50代の中年女性です。たぶん、僕ら日本の学生は経験してるかと思いますが、お母さんから薦められると。日本のお母さんが好きということは、これは日本を牛耳っていると言っても過言ではないと思います(笑)。それは冗談だったり冗談じゃなかったりしますが、その結果、いま語学をハングルを覚えようとする人がとても増えていて、ハングルを覚えると何が生まれるかと言えば、コミュニケーションや交流がたくさん生まれると思います。そのなかでやっぱり大事だなと思うのは、例えば、この日韓学生フォーラムのような、もう一步踏み込んだ場が市民団体なり、政府レベルでいろんな機会が増えれば、これはもっともっと日韓の関係はよくなっていくのじゃないかとそういう思いがあります。以上です。

牛島・司会　いまハングルを学ぶ方も多くなってきたし、というお話もあったんですけども…。その前に、私の1つの提案というかお願いなんですけれども、何て言うかここで話す題材は、結構先ほど話していたものよりもすごく身近に私たちが感じて、何て言うか、もっと肩の力を抜いて話せる題材だと思うんですけども、なのでそういうところで何を探らなくてはいけないかと言うと、いまの関心とかブームとかいうの、何って言うか、その興味というのがどこにあるのかという見極めをちゃんとここで確認しなければいけないんじゃないかと思って。なので、もっとマイナスのイメージっていう、お互いの国へのマイナス、文化へのマイナスのイメージというものも含めて、すごく素直に、もっとフランクに、率直にお互い意見を交わしたら、もうちょっと核心に迫れるかなというふうに思っています。

そういう、いま表に見えているブームとか交流とかという部分と、その根底で変わっていないものとか、何かあるものという、そういう視点も含めて、ぜひ「ハングル講座」で講師をなさっていらっしゃる小倉先生にお話をうかがいたいんですけども、ここで何かお話をいただけないでしょうか。

小倉紀藏助教授　学生さんがいま非常に充実した内容の討論してますので、私がそこへ割り込むということは失礼なことで、あまり、要するに、雑音を入れたくないんですけども、1つだけ言えば、私の意見ですけれ

ども、1つだけ言えば、これは私個人はこの韓流ブームっていう言葉でいかどうか分かりませんが、非常に肯定的に見てると。

これを否定的に見る方もいらっしゃるんです。評論家の方ですとかね、それから特に在日の方なんかでも、私も個人的にそういう意見をもらったりするんですけども。つまり日韓のあいだの暗い問題、暗いと言ったらよくないかもしれませんが、つらい問題、それから悲しい問題、そういうようなものを全部差しおいて、ただ韓国を消費してるだけじゃないかという意見もあるんですね。ですけども、私はそういう立場ではなくて、いいことだというふうに思っております。その理由はたくさんありますけれども、それを話しはじめると長くなってしまいますので、ということですね。あとはもう、学生さんが自由に話していただければいいと思います。私が特別な意見を言うような場ではないというふうに思います。

牛島・司会 どうもありがとうございました。えーと、身の丈に合わないことで、すみません。はい、そういうお話なんですけれども、いまのそのブームというのを、どういうふうにとらえられるかというのを、もうちょっと素直な、感覚的なものを話しませんかというか、申し訳ない。私が、すみません。司会があまりしゃしゃり出るべきではないんですが、私の意見ですけども、思ったのは、いまのこのブームだとか「冬ソナ」の、日本で言いますと「冬ソナブーム」だとかっていうのは、すごく私もいいなと思っていて、それは直接そういうものに触れるという機会が増えれば、親しみが出るということが増えれば、根本のどうしても乗り越えていかないといけないという歴史認識というところの関心というものまで、なんとか歩みよっていけるそのきっかけを、ちゃんとここでそのつながりをつくっていけるのではないかというふうに考えているからなんですけど、本当にいまの日本だと、本当にそうだろうかという、その歴史の部分でいまの状態で見ると置き去りにして見ている部分、ブームと言うか、交流だとか、その韓国の文化というのを受け入れているとか、見ている部分がないだろうかというのに対して、私は日本の学生の皆さんにまずは率直な意見をうかがいたいんですけども、皆さんどうでしょうか。お願いします。

韓流は暗い歴史の問題をなおざりにする危惧も

高玉蓮 私も、その意見にはすごい賛成なんですけれども、さっき小倉

先生が在日の方でこの韓流ブームを否定的に見ている人がいらっしゃるというふうにおっしゃってたんですけども、どちらかというと私もそれに近いのかもしれないです。韓流ブームが日本と韓国をつなぐ接点の一步になればいいとは思うんですけども、確かに日本では、この韓流ブームが起きる前、韓国ということを言われますと、やはり歴史の問題とか、暗いとか、そういう問題というのが先に出てしましまして、やっぱりどこか接したくない、関わりあいたくないという意識が強かったと思うんですね。そういう部分ではこの韓流ブームによって韓国との第一歩になればいいとは思うんですけども、ただ、いまのこの状況というのは歴史の問題という部分を置き去りにして、もうなおざりにしてるんじゃないかなというふうな危惧を私自身はもっています。以上です。

菅原・司会 どなたかほかに、何か意見はないでしょうか。

康典絵 わたしはその韓流ブームに関しましては、肯定的に見ていて、例えば韓国料理だったりとか、韓国文化というのは日本にも、もう10年以上前からずっと…根づいていて、例えば、いまでこそキムチというものは日本の食文化でたくさん食されてるんですけども、私が小さいころだったりとか、私のお母さん、お父さんの時代ではキムチと言うと、在日コリアンの食事の文化ということで、なかなか日本の人に、例えばニンニクの匂いがきついだとか、なかなか受け入れなかったということです。最近、私の友達の、まわりの日本の方がキムチ大好きで、よく家から送ってもらって分けてあげるんですね、それ見てわたしのお父さんとお母さんは、「時代は変わったね」とうれしそうに言うんですけども、やはりそういう入り口、なににもか入り口というものがあって、まずそういった親しみやすいところから入って、どんどん例えば過去の問題、悲しい歴史というものを接していく機会があると思うんですね。確かに楽しいものはそこで終わってしまう可能性があるんですけども、過去の歴史から入った場合と、楽しいことから、親しみをもってからまた入る場合とでは全然違うと思うので、私はこのいまのいろんな大衆文化がお互いの交流を促しているということは肯定的に見ます。

ただ今後どうしていくのかというところで、やはりいまの若い世代がちゃんと考えていかないと、やはり司会の方がおっしゃったように、バブルで終わってしまうのかなという杞憂もあります。

韓流で「在日」の存在も知ってくれた

趙和紀 フジテレビが在日三世のテーマにした出会いドラマを「月9」に持ってきてるんですけれども、それによっていままで在日という存在自体も、隣にたくさんいる存在であるにもかかわらず全然知らなかったような若い学生の人とかが、そのドラマによって在日の存在を知ってくれたということだけでも、私は非常にこの韓流ブームが起こってよかったなと思っているんですけれども。例えば、これがバブルで終わるのじゃないかという危惧に関しては、例えば、いまみたいな熱狂的なブームというのは去るかもしれないと思っているんですけれども、その分そのブームではなくて根付くって言うか、日常的に普通のことになるのではないかというふうに私は思っています。そして例えば「冬のソナタ」というのは私あまりちゃんと見ていないんですけれども、やっぱりこのドラマですから美化された演出とか、そういうのがたくさんあると思うんですけれども、そういうところから入って、だんだんナマの、そういうところから関心をもって、今度は実際赴いてみたいということで生の韓国とか韓国文化、韓国民に接する機会がそれによって生まれるということだけでも、私はこの韓流ブームというのが起こった意義が非常にあると思います。以上です。

柳智星・司会 では次に、韓国の学生に聞いてみたいと思います。

李芝遠 私、お話ししたいことがあったんですけれども、すべて皆さんお話になった、康さんがお話になりました。私、皆さんのお話に共感しております。皆さんも私と同じような考えをお持ちだなということを確認することができました。それから、司会者の方が日本側、韓国側同じように発言権をくださるとうれしいです。

柳智星・司会 その点は申し訳なく思っております。初めて司会者になったわけで、なかなかうまくできないというのが実情です。それではこちらのほう、どうぞ。

「冬ソナ」—女性としての共感はどこに

朴允志 梨花女子大のパクです。私一応この韓国ブーム、これは日本だけではなく、中国でも起きているというふうに聞いております。中国は場合には、韓国のドラマというのを超えて、内容が女性を素材にした葛藤でありますとか、嫁姑の葛藤でありますとか、女性心理が中国の女性の心理

と共通する部分があると、共感できるというところで流行しているというふうに聞いております。

商業的な部分、コマーシャルベースというのもあると思いますけれども、日本の女子学生、あるいは男子学生にうかがいたいと思うんですけども、こういった文化の違いを越えて女性が共感できる部分というのはどこだと思いますか。どういうところがあって、韓国ブームというのが日本の女性の心をつかんだというふうにお思いでしょうか。この韓国ブームができた理由、韓国ブームが起きた理由というのは何だとお考えでしょうか。女性のどういうところにアピールしたんだと思いますか。では、日本のほうからお答えいただきたいと思います。

鬼原 いまの質問に答えると、「冬のソナタ」でよく言われているのはですね、日本のドラマというのはある種、もうこりすぎていて、複雑すぎてちょっとこう、まあ何だろう、万人受けするような作品というのはなかなかこう出づらいついような状況があるというのを聞きました。それに比べて「冬のソナタ」と言うのは、いい意味ですごくシンプルで、なおかつ純恋愛という、なんかそういうこう、ちょっと心の温まるようなそういうお話だということで、ちょっと忘れかけていたときめきを40代、50代の奥様方が再度もつと、そういうような状況があるのかなと思います。あとヨン様はかっこいいというのもあるなと思います。あの笑顔にはちょっとね、やられました。はい、以上です。

高玉蓮 「冬のソナタ」がはやっているのが、先ほどから出てるように40代、50代というおばさま方が多いという話が出てるとおり、よく言われるのが「冬のソナタ」というのは20、30年ぐらい前の昼のメロドラマみたいな、そういうふうなことをよく言われるんですね。先ほど言われたように、もう純愛を通してというような、そういうのをモチーフとしてやっているというところで。だからそういう部分で昔見たドラマをまた4、50代のおばさま方がいま見て、先ほど言ったようにときめきをもっているんじゃないかと感じております。

やはり韓流は韓国への関心を高めた

金素悦 韓国ブームというのは過去の歴史を覆ってしまうのではないかというのは、これは杞憂ではないかと思えます。この「冬のソナタ」を通

じて日本の人たちが韓国に対する関心を高めたというところで、非常に大きな成果があったと思います。過去の歴史の問題はほかのチャンネルで、ほかのルートで十分扱うことができると思います。それからまたそれが可能になる土台をつくったというふうに思います。そういう意味で、現在日本の韓国ブーム、韓流というのは非常に肯定的に評価できるのではないかと思います。ありがとうございました。

柳智星・司会 時間の関係上、お1人だけお願いします。

玄武岩 韓流に関する話であれば店頭の韓流コーナーに並んでいる韓流雑誌のほど多くありますので、特に言うことはないんですけど、ただ韓流ブームですね、これはブームなんですね、ブームというものは消えるもの、韓流ブームは消えてもいいんじゃないかと思うんですよね。皆さんすごく、まあドラマ、もちろんそれがいままでの歴史のなかで、そういうことはあまりなかったからという、そういう話題性はあるんですけど、でもブームということはいずれ消えるもの。韓流ブームも、僕はたぶんすぐ消えるのではないかと思うんですよね。でもまた、いろんなかたちの文化というものはまたくる可能性というものはまたあると思います。ただ「冬ソナ」が起こした韓流ブームということは言えるかもしれないけど、決して私はそののではないと思うんですよね。ただNHKがこれを放送して大当たりしたとかそういうものではなくて、やっぱりこのドラマがこれまで受け入れられるような土壌というものを少しずつ積み重ねてきたというものがあるんじゃないでしょうか。やっぱりいろんな食文化から、また韓国との往来するようなそういうもの、私たちの留学生がいろいろ交流をする、また旅行に行く、映画もいろいろ在日社会のなかで積極的に紹介しようとする人たちがいて、そういうものが積み重なって、このようなものに、現象にまできたわけであって、いきなりボンと落ちてきたものではないと思うのですよね。

そういうふうに考えれば、別にまた消えても、またほかに変わるそういうものというのはいくらもあると思いますので、消えたら消えたでまたわれわれがいろんな文化を積極的に楽しんでいくという、そういう気持ちで見ればいいんじゃないでしょうか、と思います。

柳智星・司会 どうもありがとうございました。この韓流ブームについてのテーマはこれぐらいにしたいと思います。まだお話し足りない方は、

最後の討論の部分でお話してください。

次のテーマですけれども、今度はアジアカップ、アジアンカップ、サッカーの試合ですね。中国と日本でサッカー大会が先日ありました。で、その日本の国歌が演奏されたときに中国のファンたちが反日感情をあらわにしたと。この反日感情というのは中国に限るものなのか、それとも北東アジア全体に関わるものなのか、ということなんですけれども。私、例えばですね、この大韓民国とアメリカが競技をして負けたときと、韓国と日本が試合をして負けたときを考えると、日本に負けたときのほうが私は腹が立ちます。これは事実ですね。ですので、これに関する厳しい、辛らつな議論というのをしたいと思うのですけれども。この反日感情、これは単純に中国に限ったものなのかについて、まず討論したいと思います。いかがでしょうか。

上村 その点についてちょっと韓国の学生の方に質問したいのですが、今回日本が中国に行ってそこで中国の反日感情が爆発したかたちとなって、ちょっと実際爆発してたのかどうかというの、ちょっとわからないところもあるんですけど、中国の反日感情がバーッとなって日本でも問題になった。じゃあ、逆に今度のアジアカップが韓国で開かれていて、日本チームが韓国に行ったらどうだったか。これはたぶん中国ほどではないと思うんですけど、皆さん、どうでしょうか。

柳智星・司会 発言される方、手を上げてください

金素悦 私、サッカーが好きなのでお話しいたします。スポーツの試合ですら韓国の国民は過去の歴史の問題、それから現在の竹島の問題についての反日感情がやはり残っております。これは事実であります。またときおり日本政府のほうから神社参拝の問題、靖国神社の参拝の問題、これがやはり国民感情を刺激します。スポーツに影響を与えるほど市民の意識の部分では、非常にそういう意味でレベルは低いかもしれません。この文化交流における反日感情というのはだんだん衰退している、弱くなっているというふうに、薄らいでいるというふうに思います。

上村 それで、じゃあなぜ中国ではそこまで高いのに、韓国では先ほどキムさんがおっしゃったように、スポーツに影響がいくまでにはあがらない、その差はいったいどこで生まれるのでしょうか。社会主義、資本主義の差であるとか、その国ごとの教育の差であるとか、そういうところ

にいくのでしょうか。

金素悦 私はこの問題はともに考える必要があるところだと思います。その質問に対しては、国が社会主義の国であれ、民主主義の国であれ、資本主義の国であれ、それとは関係なしに市民意識のレベルの問題ではないかと思います。それを受け入れることができる、そういう体感力、それを感じることができる、そういうものをもっているのか、それだけの経験をしてきたのかという、その国の発展レベルによって、その意識というのの、高い、低い、高低というのが出てくると思います。そういう意味で韓国は中国よりも国は狭いですがけれども、市民意識、他人を配慮する意識、相手を認める意識については、相手を認め、勝敗についてはそれを認め、その結果に承服する、そういう意識が中国よりかは高いのではないかと思います。

サッカー試合での中国「反日騒ぎ」は恥

朴春蘭 反日のことについてさっきおっしゃたんですけど、まず私は中国人として今回のそういう行動は、サッカーとか1つの文化は文化で、政治はまた別のことだから、今回中国でそういうふうなことがあったということは、すごく中国の恥だと思っています。本当はこういうことが起こらなかつたらよかつたと思うんですけど、なぜこういうことが起こるかなと言うと、いままで小泉総理も4年間続いて毎年靖国神社に参拝することはあるんですけど、毎たび、毎たび、日本では報道はあんまり強く報道されないんですけど、そのたびに中国ではすごく報道とか、いろんな団体とか、すごく結構大事な問題になっております。だから、あとさっきそちらの方もおっしゃったけど、中国人まだ人口も多いし、まだ発展途中の国だから、まだひとり立ちのレベルがまだまだ日本、韓国について、そこまでまだ至ってないから、そうじゃないかということも考えますけど、でももし例えば、今回のアジアサッカーがもし中国じゃなくて日本で例えば行って、中国が勝ったってということとかあったら、日本とかはということが起こるんですか。

ちょっとこれは、韓国と日本についてのことじゃないんですけど、もしなんか考えをもつ方がいらっしゃるなら聞きたいなと思うくらいです。

高玉蓮 先ほどの質問なんですけれども、そんなにすごくサッカーが詳

しいというわけではないと思うんですけども、私自身は。ただ日本で起こったとしても前半のときに日本の学生は政治的意識が薄いということを言っていたように、たとえ中国のチームに負けたとしても、中国で起こったように日本の国旗を燃やすとか、反日感情をあらわにして車を破壊するとか、そういうような行動は逆に起こさないんじゃないかなと私自身は思うんですけども。以上です。

菅原 僕もちょっとサッカー好きな一日本国民として言うんですけども、正直、日本が中国に負けたとしてもあのような国旗を燃やしたりとかは、まったくしなかったと思っています。あとまた今回中国の話ですけど、別に韓国に負けたとしても、日本が負けた以上は韓国、中国が強かったんだなと僕は思ってます。以上です。

柳智星・司会 どうぞ、お話しください。

金永振 例えば、今回日本で起こらなかったというのは、ただ単に戦争に勝ったからという理由が大きいんじゃないかなというのが1つ感じます。というのは、やっぱりやったほうというのは忘れることができますが、やられたほうの恨みというのはどんどん受け継がれていくもので、仮に韓国が日本を植民地化していたら、日本を植民地化していて日本でアジアカップがあって韓国が勝ったら同じようなことが起きてるんじゃないかなと。それはまったくの想像の範囲ですけども、僕が言いたいことは何かと言えば、やはりその反日感情のあれほど大きな全体的ではないにしても、あれほど大きなものが起きたことに関して、日本の人間たちはもっと自分たちの国を悲しまなくてはいけないし、よりよい方法は何かというのを、若者は特に、政治的な意見はもちにくい環境であるということは僕も、日本社会はそういう社会であるとは思いますが、必要ではないかなと思います。

柳智星・司会 パク・ユンジさん、どうぞ。

被爆・日本は「反米感情」をどう和らげたのか

朴允志 梨花女子大学のパク・ユンジです。さっき金永振さんのお話を聞いて考えたんですけど、日本が戦争で勝ったからそういう感情がないんだというお話ですけども、私、中学、高校アメリカで過ごしました。当時、私と仲の良かった日本人のお友達が名前はユキという名前で非常にかわいい子だったんですけど、あの子が言ってました。「アメリカ人はみんな

悪い」って言ってたんです。私11歳でした、あのとき。子どもでしたね。ユキちゃんが言うには「なぜアメリカが悪いのか、アメリカは広島に原爆を投下したからだ、だからアメリカ人は悪い」と言っていました。じゃあ、日本人も韓国に劣らず反米感情をもっているんだと思うんですけども、私、聞きました、「なぜ、あなた、そんな高い学費払ってアメリカ学校に通ってるの」と聞きました。彼女は答えられませんでした。つまり韓国人、あるいは中国人がもっている反日感情と、日本人がアメリカに対してもっているもよさそうな反米感情、もちろんレベルの違いはあると思います、強さの違いはあると思います。しかし、日本の皆さんの反米感情はさほど高くはないと思うんですね。日本の皆さんはどのような感情の解消、あるいはどのような、いわゆるいやしの過程を経て、反米感情をやわらげることができたのでしょうか。

柳智星・司会 日本の学生で、どなたかいませんか。

上村 やわらげるといっても、それちょっと本当、話がちょっと深くなっちゃってあれなんですけれども、戦後のアメリカ軍の洗脳というのが、どうしてもひどかった、洗脳がひどかったって言うところとあれなんですけれども、それで戦争したのは別にアメリカが悪いんじゃない、日本国民が悪いんじゃない、日本の軍部が悪いんだというふうにですね、アメリカは日本に刷り込んだということが、「ウォーギルトプログラム」というのが、いまアメリカのなかからも資料で出ています。それでですね、アメリカはいい人、基本的に戦争でいままで負けるというのは、例えば植民地化されたり、民族浄化が行われたりというのが主流だったんですけども、戦争に負けたのにアメリカは日本に、本当の意味での民主主義を与えてくれた、復興を与えてくれたという、そういうことから、そこまで反米感情が刷り込まれなかった。これはちょっとアメリカが上手だったとしか言いようがないんですけども、そういう事実があったので、日本人がアメリカに対する反米感情は、広島、長崎のことを差し引いてもなかったと思います。しかもその広島、長崎のことにしましても、たぶん普通であれば、原爆を落とされた、アメリカなんなんだというふうに思う国が普通だと思います。ただ日本は、アメリカに原爆を落とされるようなことをした俺たちが悪かったというふうに、日本では考えています。

牛島・司会 すみません。できればまだ発言されてなかった、鬼原さん、

お願いします。

鬼原 いまのにならめて少し言うと、表に出すかどうかの問題なのかなと僕は少し思っています。というのは、意識のなかで、決して日本人は原爆を肯定していないと僕は思いますし、問題はアメリカの場合だと原爆を落とされたというその意識が、例えば国旗を燃やすとかそういったかたちで現れるかどうかの違いなのかなと思っています。日本は先ほどの話に戻ると、アジアカップをもし日本でやっていた場合、日本が負けた場合でも国旗を燃やすことはなかっただろうと僕は思います。それは表に出すレベルまでその感情というのが高ぶらないから、もしくはそういうかたちを取ろうという意識を日本はもっていないからだと思います。

それはどうしてなのかと思ったときに、相手の国のことをよく知ることというのが1つキーワードかなと思います。確かにアメリカに原爆を落とされましたし、韓国や中国からしてみれば日本に植民地化された、侵略されたという歴史があるというのがありますが、現時点で国の関係、例えば、日本だったらアメリカとの関係を見たときに、やっぱりなくてはならない、いろんな意味で相互依存の関係にあるいまの状況を考えたときに、やはりこの歴史問題や感情論に訴えるだけではいけないんじゃないかという、そういう意識が日本人のどこかにあって、それが原爆はもしかしたら悪かったという意識はもっているのだけれども、その感情を表に出さない、暴力的な感情を表に出さないということにつながっているのではないかなと思っています。

牛島・司会 康さん、お願いします。

康典絵 この反日感情であつたりとか、反日、反米、反韓いろんな言葉があると思うんですけども、こういった意識レベルの問題はたくさん要因は文化だつたりとか、経験だつたりいろいろな要因があると思うんですけども、そのなかでも私はやはり教育がすごく大きいんじゃないかなと思います。私の場合でみると、中学校まで朝鮮学校に通ってたんですけども、やはりそこでは反日感情という、反米感情というものを教育的に教え込まれたということで、私、実際に高校から日本の学校に行くまでは、日本に対して、アメリカに対して、何か少しネガティブな印象をもっていたのかなと。それは日本の社会のなかに住むなかでそうじゃないと認める部分と、教育のなかで教え込まれた、学んだり、自分で意識した2つの両

方の面があって、いま考えると、やはり私のなかではその教育という面が大きかったなというところが1つと、その高校以降に自分で知るといふ、教育を超えて自分から学んでいくというところで、どんどんそういった意識も変わっていくのだなということを感じました。

入江 先ほど教育とか個人レベル、意識レベルという話が出てきて、皆さんに僕は賛成なんですけども、同じ意見をもってまして、原爆を落とされたとそういう感情をもって、被害者妄想って言うと言い方おかしいんですけれども、そういう被害者的な考え方をしているのはやっぱり日本のなかでは年配の方が多くて、実際戦争を経験した方たちにそういう意識をもっている人が多いと思います。逆にいまの若者とと言われる20代、30代の方たちは、実際日本の教育ではそういう原爆を落とされたという、その1945年8月6日に広島に原爆を落とされましたっていう、そういう事実しか教わったことがないために、そういう被害者意識というのがまったくなくないと思うんですね。結局、第三者的な立場に立った見方しかできないというのが事実だと思います。先ほど、さっき韓国の学生から質問があった、どのようにそういう反米感情とか解消してるのだろうかという質問に対しては、やっぱり特に若者に関しては、第三者的な見方しかできないために、もともとそういう被害者的な意識をもってないというところからきたのだと思います。だから解消という言葉よりももともと持っていなかったということが事実だと私は思います。

牛島・司会 はい、お願いします。

日本人は「愛国心」が弱いから…

西野 先ほどのバク・ユンジさんの質問でサッカーにおいて韓国対日本では韓国が日本に対してすごい敵対意識をもって、そういうふうにして応援して、日本とアメリカがやるときは日本人はあまりアメリカに対して敵対意識がないというのは、日本人はそもそも、僕の考えなんですけど、あまり愛国心がないというのがあって、韓国人は昔の歴史とかあって、すごい、代々受け継がれている愛国心みたいのをすごい感じるんですけど、日本人は愛国心がほかの、韓国とか中国に比べてないから、アメリカとの過去の戦争で負けた、原爆を落とされたというのがあるかもしれないけど、その愛国心が弱い分、いま現在スポーツにおいて戦っても負

けてもそこまで悔しがらないというのがちょっとあると思います。以上です。

柳智星・司会　じゃあ、あともうひと方、どうぞ。

高玉蓮　先ほどから日本の側のほうで、被害者意識の問題についてすごい出てるんですけども、私は逆に日本がなぜあそこまで反日感情をもたれてしまったのかというのを問題にしないでいいんじゃないかなということを感じています。小泉さんの参拝問題など、いまいろいろな日本側に問題があると思うんですね。先ほど被害者意識が薄いという部分も出ましたけれども、それと同じで日本側には、加害者意識も薄いんじゃないかなというふうに感じています。韓国に対して、中国に対して、いろんな国に対しての加害者として自分がどうやって謝罪していかなきゃいけないのか、そういう部分の意識があまりにも低いから、ああいうふうな問題が起こってしまったのではないかな。その中国のやったことに対してそれを肯定するわけではないですし、そのことは残念だと思いますけれども、それだからって日本側が「やられた」というふうな意識だけをもっては、何も解決しないのではないかと私は思います。

柳智星・司会　ありがとうございます。キム・ウンジョンさん、ノートにメモして、最後に発言の機会をお渡しいたします。

では、次のテーマに移る前に、ちょっと休息を取ってはいかががかと思うんですがいかがでしょうか。いいでしょうか。はい、それでは5分だけ休憩を取りたいと思います。

【休憩】

柳智星・司会　それでは皆さん、お席にお着きください。始めたいと思います。通訳は可能でしょうか。それでは始めたいと思います。それでは、再開いたします。

今回のテーマは、先ほど韓国でありましたヌード集の話ですね。韓国で有名なスターが従軍「慰安婦」というテーマでヌード集を撮影いたしました。韓国ではこれが非常に大きな 이슈となりました。結局はすべての

資料、すべての映画、写真集というものを廃棄したということがありました。そして、女優は関係者に謝ったということがありました。この問題、このニュースを日本のなかで知ってらっしゃる方、いらっしゃいますか。お話しください。

高玉蓮 私もニュースのほうで観て、ただなんとなくと言うか、従軍「慰安婦」の問題を韓国のなかでも、少し若い人が変な意識をもって見ているのかなあとという部分で、すごくびっくりした問題だなあとということをニュースを観たときに感じたんですけれども、実際韓国のなかで従軍「慰安婦」問題について、ああいうふうな変なヌード写真集が出るような流れというものは本当にあるのでしょうか。逆にすごい、そこが不思議でならなかったんですね、なんでああいうものが出たのだろうか。韓国のなかで出たということに対してすごい不思議だったんですけれども。

牛島・司会 誰か、韓国の方。

柳智星・司会 キム・ボギョンさん。

過去の歴史には非常に敏感な韓国

金甫徑 韓国で、ああいった反応が出た。ですから、ヌード集が出たということについての背景は、商業コマーシャルベース、コマーシャル主義によって刺激的な素材を扱うと商業的にも成功できるだろうというふうに期待したということがあったと思います。ところが韓国人全体では、そういった過去の歴史の問題に、非常にセンシティブですので、そういったところを錯覚したというわけですね、その女優は勘違いしたのではないかと。ここで問題視するべきところは、行き過ぎた商業主義ではなく、それを通じて見た韓国人の過去の歴史についての敏感なその感情、センシティブな感情というのがそこで見受けられた、これがやはり大事なところではないでしょうか。

柳智星・司会 それでは、カン・ヘチャンさん。

姜惠晶 さらに申しますと、ヌード集によって、つまり従軍「慰安婦」がヌード集の対象になったというその背景には、同じ韓国人でありますけれども、恥ずかしいことですが、イー・スンヨンというタレントが、その歴史認識というのが不十分でありましたし、無知の結果であると思います。ですので、もう少しその内容がわかっていたら、ああいったことにならな

かったと思いますし、そういった素材によってお金儲けをしようということもなかったと思います。同じ韓国人として非常に恥ずかしいと言わざるを得ない、そういう問題でした。

柳智星・司会 日本側で、さらにこれについて質問される場所ありませんか。

牛島・司会 すみません。議論の視点というか1つお願いというか、提案したいんですけども、いま話している内容の、このトピック自体、テーマ自体がもうちょっと実際の文化だとか、あとは交流だとかということところにスポットを当てようということになっていますので、いまの従軍「慰安婦」の問題ですと、メディアと言うか、何って言うのでしょうか、そういう文化の部分というのと政治の関係性というか、という視点というのをもうちょっと意識をしながらの発言をしていただけると、このトピックの趣旨というか、いうものに沿ったものになるかと思います。

柳智星・司会 付け加えますと、この問題は韓国では非常に大きな 이슈になったんですけども、日本ではあまり知られていないと。日本のメディアはなぜ報道をちゃんとしなかったのか、というところが問題かなと思います。発言はないようなんですが、お話しください。

高玉蓮 先ほどから申してますように、日本の歴史認識の甘さという部分がいちばん大きいんじゃないかと思います。本当ならそういうふうな問題をもっと大きく取り上げ、そして従軍「慰安婦」の問題についてもっと論ずるべきはずなのに、やはり日本では歴史認識という部分ではすごく韓国と比べ、すごくやっぱり甘い部分が強く、そういうふうなことがメディアのなかでも大きくなる、また私たちのなかでも大きくなる、そういうふうなことは私たち自身に、私は在日ですけども、日本にいる一人の人間として恥じるべきだと思います。

趙和紀 私はもう1つ原因というか、要因があると思うんですけども、それはいま日本ではいま「新しい歴史教科書をつくる会」という非常に保守的な会派の人たちの勢力というか、そういう歴史をいままでと違った視点で見ようという動きが非常に多くて、そういった団体では「慰安婦」問題というのを非常に否定的にとらえている動きがあると思うんですけど、やはりそういう報道を、韓国であったような事件を報道を大々的にすると、やはりそういうところからクレームというものがくるというのをテレビ局

の方から聞いたことがあるので、そういった日本国内での歴史認識に対する動きの変化というものも大きく要因としてあると思います。

金永振 1つ情報としてですけれども、従軍「慰安婦」の話が、例えば、夕方やお昼のワイドショーなどで取り上げられることというのは、あまりないかと記憶しています。ずいぶん前にちょっと話しましたが、基本的にテレビからの情報を受け取るというのが若者は多いわけで、そういったところも1つ原因かなと。例えば、従軍「慰安婦」の話が出るというのは深夜のドキュメンタリーとか、そういうあまり視聴率と関係ないところで、やらなくてはいけないことという感じで報道されているということは見たことがあります。なんかそれは1つの原因かなとは思いますが。

白井 僕はさっきの歴史認識という問題にちょっとからめて考えてみたのですが、日本でさっき反米感情であるとか、日本人にとって反米感情を抱かないというのが、抱きにくいという背景にあるのは歴史認識が薄いというのではないかと考えたんですが、それは要するに、例えば、原爆を落とされた経験というのを、例えば歴史認識が薄いが故に、われわれ自身の体験としてそれを考えていないのじゃないかというふうなものがありまして、だからこそ、われわれが日本の起こした犯罪に対しても、またそれもわれわれが犯したことではないというふうな認識があるのではないかと。特に若者は日本の歴史に対して、いい言い方をすると相対化している、日本に対して、国家の歴史に対して相対化してるというふうな言い方が言える一方で、一方で日本の歴史に対してこう他人事のように考えている。そのために反米感情を抱きにくい、けれども一方で外からの中国や韓国からの反日感情というものを理解できないっていうふうな背景があるのではないかと考えました。

いまの「新しい歴史教科書」の問題に関しては、むしろそれとは少し違って歴史認識というものを、ある意味で強く認識しようというふうな考えてはいるんだけど、その認識の仕方が少し間違ってる、自分勝手な、手前勝手な認識で、強く認識しようというような運動の流れなんじゃないかなというふうな考えました。なので、その歴史認識の問題で、いわば歴史認識が弱いから新しい歴史教科書の問題が出てくるというような、同じような流れとはちょっと違った流れでとらえられるんじゃないかと考えました。

上村　ここでちょっと韓国人の皆さんに質問したいと思います。ひょっとしたら知ってる方もおられかもしれませんが、いま日本の、特に右派、保守系の人たちのあいだで主流になっている歴史認識の考え方というのが、日本は「慰安婦」問題をはじめとして確かに悪いこともした。でも韓国が近代化を遂げるための土台をつくっただろうと、インフラを整備したりだとか、だからそういうこともやってるのだから韓国側はそういうことをもっと考えてほしいという、そういう論調なんですね。その人たちがよく取り上げる本のなかに、実際韓国の方で見たことがある人はいないかもしれませんが、日本の植民地政策を肯定的にとらえた本が過去韓国で出版されたことがあります。すぐ発禁処分になったんですけども、韓国併合は当時の韓国政府が自ら望んだものだというふうな論調で、そういうことがあります。そういう日本が確かに悪いこともしたけど、いいこともしたんだぞと、そういう論調について、皆さんどうお考えでしょうか。お願いします。

柳智星・司会　キム・ホギョンさん、どうぞ。

金甫徑　そのような意見について予想はしてたんですけど、韓国人にとっては大変戸惑いを覚える意見です。日本の植民地支配が近代化に貢献したということなんですけれども、それは歴史について無知であるというところに問題があるのではないかと思うんです。日本が朝鮮半島を侵略し、いろいろ奪っていったものがあります。労働者を強制的に働かせ、賃金を払っていなかったという問題もありますし、皆さんもご存じのとおり「慰安婦」問題もあります。「慰安婦」は強制的に連れていかれて、いまだ何ら補償が行われていません。ですから、韓国の近代化に貢献したというふうに韓国人はまったく思っていないです。むしろそのような視点について大変な戸惑いを覚えます。そして、他方では憤りすら感じます。

日本では「慰安婦」問題にどのように接したか

姜惠晶　カン・ヘチャンです。ここにいらっしゃる日本の学生のなかで従軍「慰安婦」という問題についてテレビだけでなく、深夜のテレビだけでなく、例えば小説とか、あるいはドキュメンタリーとか、ほかのメディア、ほかの媒体を通じて従軍「慰安婦」問題について触れた方いらっしゃるのかどうか、ちょっとお聞きしたいんですが。

入江 その質問にお答えいたします。僕は高校生のときに初めて従軍「慰安婦」という問題を知り、それまでそんなものは知らないよというふうにならずに流してきたんですけども、今回このような日韓フォーラムで従軍「慰安婦」を取り扱うということで、これはやっぱりちゃんと調べて少しのことしか調べられないけれども、ちゃんとそのことを真に受けて発言しなければいけないなと思って、ここ1カ月間ぐらいその従軍「慰安婦」の本について、新聞とかメディアとか取り上げませんので、自分で『従軍慰安婦』という本を買って自分で読みました。だから、ほかの人はどうか知りませんが、僕の友達とかもやっぱりみんなこのフォーラムに向けてその『従軍慰安婦』という本を買って、みんなでそれなりに意見をまとめてここに来ました。本を買ったということでいいですかね（笑）そういうことです。

牛島・司会 ありがとうございます。お願いします。

菅原・司会 菅原です。僕も正直恥ずかしい話なんですけれども、従軍「慰安婦」について知ったことは、本当にこの日韓フォーラムに出るという時点でちょっと韓国について知らなければいけないなと思って、韓国のことについて調べたら、この従軍「慰安婦」という問題に出会いました。正直言っていままで知らなかったということが僕にとってすごい日本国民として恥ずかしいことだなと思いました。また疑問に思ったことは、何で日本の政府というか、教育で従軍「慰安婦」等をもっと取り上げて日本の若い世代というか、学校に通ってる人びとに伝えないのかなというのがすごく疑問に思いましたし、これからはもっと歴史問題について学校等からもっと教えていくべきではないのかというのが、今回この日韓フォーラムに参加するにあたって、自分なりにちょっと韓国について調べて思いました。以上です。

牛島・司会 韓国の学生のほうからお願いします。

尹恩貞 日本植民地時代の朝鮮半島の近代化についてのご意見についてお話しします。韓国では小学校から高校まで、そして大学で歴史を専攻するということになりますと、もう少し突っ込んだこの勉強もできると思います。ですから、韓国人は日本植民地時代の歴史について日本の皆さんよりは詳しいんです。いまおっしゃったことは、つまり日本植民地時代に朝鮮半島に鉄道を敷いてやったと、港湾もつくってやったと。これは朝鮮半

島の近代化に貢献したんだというような議論、意見、それを私たちは教科書、日本にそういった意見があるというのを教科書で教わりました。しかしこの場でそのような話を聞くとは思いませんでした。それについて、私の意見を申し上げたいと思います。

植民地化=近代化論をめぐる

日本が本当に植民地時代に韓国、朝鮮半島でなぜあのように鉄道をつくったり、インフラを構築したのか、日本の意図はなんだったのか、朝鮮半島の韓国の発展のためのインフラづくりだったのでしょか。もしかして、軍事的な目的ではなかったでしょか。軍事目的のために韓国にそのようなインフラをつくった可能性もあるのではないでしょか、それについて知りたい。韓国では、ことわざがあるんですけども、食べるためにブタを飼うんだという、そういうことわざみたいのがあります。いま植民地支配を通じて韓国の人たちに傷を与えたんですけども、植民地支配がむしろ韓国の発展に貢献したというのは、ますます傷を大きくすることだと思いますし、大変危険な発想だと思います。

柳智星・司会 イー・ジウォンさんから、どうぞ。

李芝遠 本当に私、待ちました、発言の機会を待ちました。私の場合ですけれども、日本が韓国を近代化させてやったという意見についてですけれども、私だけの意見かもしれないけれども、それは日本がアジア大陸に進出するために朝鮮半島を利用したんだということだと思います。そして「新しい歴史教科書をつくる会」がなぜあんな教科書をつくったのか、ということについてですけれども、日本のいわゆる保守化、これは太平洋戦争前の状態にまで戻したいというような思惑があるのではないでしょか。かつての過ちについて教科書でやはり言及すべきなのに、それがなされていません。そして「新しい教科書をつくる会」でつくった教科書、これは日本の学校現場ではあまり採用されてないと聞きました。しかし、日本の保守化の傾向というのは、これからは変わるかもしれないとは思いますが。

玄武岩 韓国でも植民地、近代化論とか、内政的発展論とかそういう議論というものはありまして、韓国のほうからすると、そういう話を言われると、それがすぐ私たちのせいであなたたちこんな豊かになったんでしょ

うというふうにして、とらえてしまって、もっと本質的なところをちょっと度外視しているんじゃないかなということで、やっぱりそういう疑問というものは常にあるかもしれない。そういうものであれば、それについてもちゃんと答えてあげられるような、そういう的なそれぐらいの理論的な武装というものもやっぱり必要ではあると思うんですけど。

韓国でも植民地時代を清算していない

なぜさっきのヌード集のそういう話も含めて、なぜそういう問題がまた新しく起こってきているのかというと、やっぱり韓国社会のなかでその植民地時代ということをいままできちんと清算してなかったという、そういうものがあるんですね。いま韓国では正直言って、日本では従軍「慰安婦」のことをよく知らないというふうに言って、なんか申し訳なさそうなそういう話もしますけど、実際に私は小学生のとき、中学生のとき、高校生のとき、教科書に従軍「慰安婦」の問題なんか全然載っていませんでした。いつから韓国がそういう従軍「慰安婦」の問題について発信できることになったのかと言うと、つい90年代に入ってつい最近のことなんですよ。それはなぜなのでしょう。やっぱりそういうことも考えなければならぬし、またそのような従軍「慰安婦」の問題についても受け止め方、いまのような議論を聞いていると、これを知らない日本の学生たちは悪い、日本の人たちはなんかちょっとダメじゃないのというふうな言い方になってるんですけど、実際に2、3年前に行われた女性国際戦犯のところでも、多くの日本のボランティアの人たちが積極的に参加をして、それを成功させました。しかしいま韓国で、ここに韓国から来てる学生たちが従軍「慰安婦」の問題についていろいろ議論はしていますけど、実際に韓国で毎週水曜日に日本の大使館の前で行われている水曜集会というものに実際に行ったことがあるのか、また「ナムの家」とかに実際に足を運んだことがあるのか、実際にあるかもしれないですけど、ただイー・スンヨンのヌード集というものが出ることによって、それについて、なんか文句を言いたいという、そういう気持ちももしかしてあるのではないかということについても、やっぱり聞いてみたいというふうに思いますね。

結局、重要なことは植民地時代に発展したのはたぶん確かでしょうね。もちろん植民地でなくても発展したかもしれませんが。ただ韓国、朝鮮の人

たちがただ眠っているだけではないですから。それと同時にいま韓国で行われている、または親日真相究明法というのをつくりまして、それをまた、これまで戦後直後に親日派に対する清算というものができなくて、いままでずるずるきていくというものもあるんですね。韓国ではいまそれをめぐっていろいろ議論されている、それをやるべきかどうか。さっきとまたちょっとお話が重なりますけど、『朝鮮日報』、『東亜日報』、『中央日報』では、もう昔のものだからやらなくてもいいんじゃないかな、国内ではそういうふう言いながらも、また日本に来ては、このような問題について、きちんと受け止めてほしいということも一種の矛盾ではないかなというふうに思います。

柳智星・司会　いまの意見について反論ありませんか。

金甫徑　キム・ボギョンです。『朝鮮日報』、『中央日報』、『東亜日報』の話にからめてお話しします。韓国にもいろいろな意見というのはいり得ます。またノム・ヒョン政権、あるいは韓国の状況で親日派というのがまだその問題を清算されていないのも事実です。親日派が清算されていないいまの状況では、いくらでも議論というのはいりうると思うんです。そして、日本大使館での「慰安婦」の皆さんの水曜集会に参加したことがあるのかというふうに質問されましたね。さっきの言いたいこと、ニュアンスは何だったんだろうか。日ごろは全然関心がないのに、日本との関係で、日本に来るとそういう問題を提起する、いつもは全然無関心なのにここに来てようやく問題提起しているというようなニュアンスが感じられました。

私は水曜集会には参加したことはありません。参加したかったんですけども、実際参加できなかったことにはついては残念に思いますし、恥ずかしく思います。しかしだからと言って、私たちがそういった問題についてここで触れないで通り過ぎてしまう、これは韓国人としてあるべき姿、正しい態度ではないと思うんです。たとえ私は水曜集会には出席したことはありませんけれども、しかし私たちがこの場でそういったことを取り上げ、また主張するのはいくらでも可能だと思うんです。また過去の歴史の問題を取り上げる最も根本的な理由は何なのか、それは過去の事実でもって日韓関係を悪くしようというようなことではありません。日韓関係をよりよくするためには、まず解決すべきことが過去の歴史の清算だと。私たちはあくまでもこれからのことを、未来を見据えて過去の問題を取り上げ

ているんだということ、その点どうぞ誤解なきようにお願いします。

感情ではなく歴史の陰陽を事実として見ないと

金永振 この議論のなかで1つ、在日コリアンという存在で僕が経験してきたことが役に立つかなと思って、個人的なお話をさせていただきます。

僕らは三世になります。日本で生まれてきています。そのなかで日本社会のなかで生きていくときに、日本人にどう自分の過去を知ってもらうかという話があります。そのなかでやはりいちばん僕がやってはいけないと思うのは感情的になることだと思いました。感情的になるときはどういうときかと言うと、歴史を一方、陰と陽ではなくて、陰から、あるいは陽からしか見れないときだと思います。例えば、いま菅原君が従軍「慰安婦」を知らなくて申し訳なく思うというのは、もちろんまず大前提で必要な感情だとは思いますが、それは要するに感情論なんだと思います。さっきの怒り、日本が近代化させてやったということに関して怒りをもつというのも、これも感情的なことだと思います。

大事なものは、その両方の側面をきちんと事実として学ぶ姿勢がなければ、話を伝えるというのがすごくむずかしいというのが、僕の日本の生活のなかですごく感じてることです。なので、例えば近代化に日本がしてやっただと言われた場合に、そこで一步我慢して、その面をまず勉強したうえで反論するというのがすごく大切なことなんではないかなと、これはあえて言いますが、それは僕の生活、日本人の友達とよい関係をつくっていくなかで、そういうことを学びました。なので、もし役に立てればなと思います。

李芝遠 日本の従軍「慰安婦」の問題、日ごろ韓国人は韓国人としてこの問題に関心をもっていなかったにもかかわらず、こういうふうになると感情的になる、これは矛盾ではないかという指摘でしたけれども、私思いますにこれまで韓国社会がこういった問題を扱いにくい雰囲気であった、だからではないかと思います。私、本を通してそういうふうには思っております。

親日派真相究明という問題、この作業が非常にむずかしいというのは既得権層は親日派だったからです。ですから、これがうまくいかなかった、理由はそこにあると思います。そういう人たちがいるからには、この問題

を扱うのはなかなかむずかしいと思います。しかし1つ1ついま韓国の国民は真実を知るようになっていきます。私も少しずつではありますが、韓国の社会も少しずつではありますが、変わりつつあります。そのいわゆる第一歩ではないか、本当に第一段階ではないかと思います。

ですので、先ほどの発言、玄さんの発言はちょっとおかしいのではないかと思います。

柳智星・司会　ちょっと待ってください。予定の時間をもう過ぎております。ではこれからどういうふうにやりましょうか。ここで終えなくてはいけないということですか。それでは30分だけではないでしょうか、30分。1時間ですか。6時までですね、わかりました。では、6時までやりたいと思います。5時45分まで従軍「慰安婦」の問題について扱いたいと思います。それから残りの15分はこれまで扱えなかった、そういう問題について扱いたいと思います。それでは発言権をお渡しいたします。

金素悦　韓国の慶熙大学から来ましたキムと申します。個人的な意見というには政治的な負担というプレッシャーを感じますけれども、過去の歴史の問題、これについて韓国のなかでも違った意見、それがいわゆる保守化であれ、そういった違った視点があります。そういった視点もありますし、また親日派究明問題に関しましても学者のなかでもやはり賛否両論2つに分かれております。そういう議論の余地が多い問題であります。

それから政界のなかでも、国会のなかでもこの法律を上程するうえで与党が既得権をつかむための方式なのか、いやそうではないという議論があるのもまた現実であります。ですので、この親日派真相究明法については、そういうふうなさまざまな意見があるわけですね。そういうことがあるということをもまず申し上げ、解放後親日派を、つまり日本の植民地政策を支援した人たちを追放しようとしてきました。その親日的な行為によって得た利益などによってまず一次的な整理がなされました。その後、50年後、つまり60年近く経った現在、いま1度この親日派問題を扱うことになるということは、果たしてこれが正しいことなのか。連座制の問題というのがいま取り上げられております。

親日行為究明—肯定的要素を使う政治手法

当時親日行為を行った勢力はほとんどいま社会の第一線を退いておりま

す。亡くなっている人たちも多いです。そういった人の行為についてその子どもの、息子の世代にまで連座制、つまり罪を負わなくてはならないのかということ。韓国の与党のシン・ギナム議員は自分の父親が日本の憲兵隊だった、つまり親日行為を行ったということを認めております。韓国国内でもそういうことになっておりますけれども、例えば、父親の過ちを息子がそれを引き継がなくてはいけないかという、連座制を基にしたこういう法律、これは正しいかどうかということに疑問を投げかける社会階層の人たちもいるということを申し上げたいと思います。

それから親日行為に関しましては、近代化の部分で肯定的な要素があるという話がありましたけれども、それにつきましては私は否定的な要素のほうが大きかったと思います。肯定的な要素を強調するというのは政治的な意図がある。つまり学習しなかったからではなく、知らなかったからではなく、知ってはいるけれども、この政治的なこういった事実をクローズアップさせた理由というのは何なのか、やはりそういった政治的な意図が問題だと思います。実際に日本の植民地時代のとき、朝鮮時代の末期は封建社会でありました。王がいてそして統治されて、王の命によって人を殺すこともできました。近代化されていない社会でした。日本が入ることによって、かなりそういったところはなくなりましたけれども、しかしながら、その部分をクローズアップさせて、植民地のマイナス部分を隠すという日本のいわゆる保守派勢力は間違ったやり方を取っているのではないかと思います。

柳智星・司会 今後すみません、発言は簡略的に要点だけをかいつまんでお話いただければと思います。それでは日本側と韓国側とお1人ずつにのみ発言権をお渡ししたいと思います。では、お話しください。

佐竹 ちょっと教科書問題とかに戻っちゃうかもしれないんですけど、いまお話がありましたように、日本が韓国にやってきた悲惨な歴史をやっぱり覆い隠すというのはやっぱりよくないことだと思います。僕たち中央大学の学生はこのフォーラムの前にソウル放送の、あるメディア会社のところにインタビューに行って、そのメディアの韓国人の方々がおっしゃっていたことなんですが、歴史教科書の問題にしても韓国の政府というのは、やっぱりちょっと過去だけしか見てないところがあるのではないかと、いうことをちょっとおっしゃっていました。確かに従軍「慰安婦」という問

題はすごい残酷と言うか、ひどいことだと思えます。僕らも従軍「慰安婦」についてあまり知らない部分もあります。だからやっぱり教科書のなかでも従軍「慰安婦」についてもっと具体的にいろいろもっと載せるべきではないかなと思います。しかし、やっぱり本当これからだということも韓国のメディアの方々は盛んに言っていました。つまり現代の日韓交流と、それから未来の日韓交流のプラス面も載せるべきであると言っておりました。

したがって、私は従軍「慰安婦」についてもっと具体化させて、多くの日本国民に従軍「慰安婦」の悲惨さについて知るとともに現代、未来についてもやっぱりもっと多くのことを載せれば、たとえ従軍「慰安婦」の問題、ひどいと同時に現代、未来のことについてもっといい印象をもてるのではないかと思います。ちょっとわかりづらいところもあったかもしれませんが、僕の考えとしていただきます。

柳智星・司会 どうも、ありがとうございました。では韓国側、最後の整理をしていただけますでしょうか…。

では私、一言申し上げたいと思います。私どものこの討論、真実を究明し、何が間違っていたのか、どういうところに問題があるかという観点から話し合いが進んだと思います。私はここで言いたいことは、果たしてこの問題を解決するために私たちの立場からこの問題をどういうふうに扱えば解決できるのか、そういうきっかけがつかめればと思うんですね。それから時間の関係上ここで終えなくてははいけませんけれども、もしこのフォーラムが終わりましても、そういう意思があれば未来、そして韓日関係、日韓関係がより発展できるようなかたちになるために、何か貢献できるのではないかというような、そういう気持ちをもっていただければと思います。約束の時間が過ぎつつあります。

牛島・司会 最後にやはりいろんなトピックスで話してきましたけれども、そこにずっと貫かれている何て言うか、視点みたいなものもあったと思いますし、それぞれすごく関連づけて考えられる部分があったと思うのです。それから皆さんのなかでまだお話になってらっしゃらない方もいますし、話足りないこともあったと思いますので、話す内容を限定せず、ここで10分ほどフリースペースを設けたいと思いますので、発言されたい方、自由に手を上げて何かおっしゃってください。

李元雄教授 韓国の学生のなかで3人はまだ1度も発言していません。

1年生の3人です。高校卒業したばかりの1年生たち、最後に簡単でいいですから、一言ずつ発言させてやってください。

柳智星・司会 わかりました。じゃあ、青一点の1年生の男子学生からどうぞ。

韓国人と結婚するとしたら両親はどう思う？

李光洙 さっきからいろいろ質問したいことはあったんですけども、日韓関係の歴史とか植民地とか、そういったことを初めて知ったとき皆さんはどう思ったのかというのが1つ目の質問です。それから韓国人と日本人と結婚するとした場合、皆さんのご両親とかご家族はどう思われるでしょうか。それが2つ目の質問です。

柳智星・司会 おもしろい質問してくれましたね。いまの質問は韓国人と日本人が結婚するとした場合、ご両親とかご家族の立場はどうだろう、意見はどうだろうかということです。彼が言いたいことはこういうことだったのではないですか。私は男です。そして私のパートナーが女性だと。このパートナーが私と結婚すると。というふうに、それで一緒におうちに行って、「私のボーイフレンドです。結婚を許してください」と言ったときに、ご両親の反応はどんなのかということについてですけど、日本の皆さんどうですか。

牛島・司会 最初、いまの結婚の前の質問でいろいろな戦争の問題を知ったときに、事実を知ったときにどう思ったかというふうにおっしゃられたんですけども、私自身はあまりに自分が知らなかったことにびっくりしたというか、あとは知らなかったこと自体にびっくりしたと同時に、どうして知らずにこられたのかということにびっくりしました。それで知らなくても暮らしていける社会にいるというこの社会が問題かなと、やっぱりなんとなく漠然と感じて、それでもっと知らなくちゃと思って、もっと生の情報を得たいとか考えはじめて、こういう場に参加しているわけなんですけれども。

それからもう1つ結婚の話なんですけれども、私も聞いたことがあるんです、父に。「私がもしほかの国の人と結婚すると言ったらどう思う」と聞いたことがあるんですね。というのも「しかも特にアジア系の外国人の人と結婚すると言ったらどう思う」って言ったら、「お互いがいいと言う

んだったら構わない」と最初は言うんですけども、でも本当にそうだろうかと思ったんですね。日常のいろんな父の話だとか、たまにテレビを観て、例えば、すみません、すごく個人的な話で、しかも長くなるんですが、相撲を観ている、朝青龍という選手がいますね、強い、日本人ではなくてモンゴル人の方なんですけれども。いたときに「日本の国技なのに外国人が勝つなんてけしからん」とか言うわけですね。それで、でもなんかそうかなと私は思って、「どうしてけしからんと思うの」と。そのときに何ていうか、彼個人への何て言うか、見方というのもあったと思うけれども、彼の国籍だと、国というものの見方というのがその発言にすごく含まれている父の見方というのが感じがして、それはうちだけではなくて、これは例えばの話ですけども、そういう細かい場面で、なんか意識の何て言うか、交流が増えてきて親しみがすごく増えてきて、お互いがよければかまわないという意識が本当になっている部分も、まだ変わらずにいる部分もどちらも真実だと思うのです。

それですら、何を言ってるのかわからなくなりましたけれども。だから、そのときに私が例えば「韓国の人と結婚したいんだ」と言ったときに、父がというか家の者が、親戚が、なんか違和感だとかわだかまりみたいなものがなく理解して受け入れられるにはどうしたらいいか、というふうな環境を、日本の、普通の一般の私の田舎の家みたいな、すごく身近な部分でつくっていくにはどうしたらいいかなというふうに、いま考えていて、そういうお話もこのあと夕食をご一緒できればしてみたいなと思っています。長くなりました。申し訳ない。

柳智星・司会 大変いいお話だったと思います。ほかにご意見ありましたら、どうぞ挙手をお願いします。ほか意見ある方、はい、ユン・ホヨンさん。

尹豪英 皆さんの意見、大変興味深くうかがいました。質問はありませんけれども、ちょっと聞いてみたいと思ったことは、いままでのお話のなかでかなり解消されました。ここに私はいちばん年下ですので、ここでは、できるだけ積極的に参加しようとは思ってはいたし、発言しようとは思ったんですけども、力不足のところもありますし、私自身いろいろと足りないところも多かったんです。皆様のご発言というのはあまりにも的確だったし、それから非常にいろいろなことをご存じで、物知りでしたし、

だから私は発言できませんでした。またこういう機会がありましたらいっぱい準備をして、勉強して討論にも参加したいと思います。

柳智星・司会 ありがとうございます。では次に、イー・ヘリムさん、1年生、どうぞ。

日本の男子はハンサム…

李慧林 私もすごく勉強になりました。日本に来て感じたことを言ってもいいですか。

私は日本人に初めて会ったとき、何と言いましょうか、悪い人たちかなと思ってたんです。でも、昨日ハラダさんが私たちが外出したいとか言うのと、ずっといろいろケアしてくれて、動いてくれて、で、すごく優しいなって、日本の皆さんって親切だなと思いました。

それから…個人的に、日本の男の人はすごくハンサムだと思いました。以上です。(笑)

牛島・司会 いまの発言っていうのは、すごく大切だと思うんですけど。…というふうななかでもってきたなっていうか、それこそ昨日お話があったステレオタイプがあると思うのですが、お互いに。それが今回のここでどう変わったかというのを確かめ合っていくのってすごく大切だなっていうふうに感じています。昨日、お話をうかがったキム・クンヒ社長のお話の「論よりキムチ」とありましたけれども、そのむずかしい議論を戦わせるのも重要だけれども、その根本のところでも共有しておかなければいけない理解とかというのは、やっぱりこういう生場でしか確かめられないんじゃないかというふうに思っていて、私もすごく韓国の方とお話できて、新たに意識が変わった部分もあったし、皆さんもさっき本を新たに買ってわざわざ読んだんだっていうお話をされたように、この場に来ることで新たにちゃんとそういう姿勢がついたという変化というのがあったわけで、そういうところに何かすごく私は可能性を感じました。

もしお話がなければで、最後に橋本先生に話をうかがっていませんので、ぜひ何かいただけますでしょうか。

橋本ヒロ子教授 皆さんとてもいい意見をいろいろ交わしていらっしやるので、これ以上お話しすることはないんですが、実は昨日もお話が出たように、いま日本は大変な経過が進んできておりまして、「新しい歴史教科

書」を採択するところがどんどん増えてきそうな状況です。特に東京都内では、それが強制的にされるというふうな状況があります。ですから、日本の若い人たちがこれから正しい歴史を知らないで育つというのがもっと増えてくるといふ危険性がいま起こってきているんですね。

そのなかで今回、これだけの人たちがこのフォーラムに参加されて、そうじゃない正しい歴史というものをもっと皆さんのお友達とかいろんなところを通して広げていくということ、それから教育が非常に重要だといふふうにおっしゃる、教育と教科書ですから非常に重要なわけですが、教育だけではなくて、最初のセッションでもありましたように、メディアも非常に重要な役割を果たしますので、皆さま方がこれからメディアとか教育を担うような人材になっていただければ、日本のおかしくなりようというのも少し減っていくのではないかと思います。

ぜひこの会を、日本の方々だけではなく韓国の方々も、日韓の新しい関係をつくる機会の始まりとして、これからも交流を続けていただければ、主催者としてはすごくいいのではないかと、ちょっと私、主催者側の1人としてしますので、そのように思いました。ぜひこれからも皆さん交流を続けていただければと思います。

柳智星・司会 ありがとうございます。本日、大変健全な趣旨のもと開かれたフォーラム、これをここで終わらせるのではなくて、これからも引き続き発展させていってほしいと思います。このような場を設けてくださいましたアジア女性基金の皆さんにも感謝申し上げます。また本日ご参加くださいました皆さん、また学生の皆さん、お疲れさまでした。

では、以上を持ちましてフォーラムを終えさせていただきたいと思えます。ありがとうございます。(拍手)

岡・司会進行 皆さん大変お疲れさまでした。閉会の前に韓国からいらっしゃいましたイー・ウォヌン先生に、一言しめくりのご挨拶をいただければと思いますが。

エリートと専門家と権力をけん制して

李元雄教授 時間もオーバーしておりますので、簡単にまとめてみたいと思えます。まず、皆さんのお話大変おもしろかったと思えます。そして

非常に真摯でした。そして3つ目に私にとっては大変勉強になりました。皆さんのお話を通じて研究者としてわからなかったこと、あるいは皆さん若い世代の考えについてもうかがい知ることができました。

最後に1点、韓国の学生を随行してきた人間として、この韓国の学生をどのような基準で選抜したのかについてお話をしたいと思います。

きょうここに来た学生は決してエリートの学生ではありません。今回学生を選抜するにあたって成績とか、あるいは出身校でありますとか、そういったことは全然考慮に入れませんでした。これまでの日韓関係を主導してきた人、それは両国のエリート階層でした。過去の日韓関係の問題を考えるうえで日本専門家とか、いわゆる韓国の有名な人とか、あるいは日本の韓国専門家とか、その人たちが玄界灘で船の船上討論をして、そして物別れに終わって大喧嘩してしまったという話があるんです。ここに来ている韓国の学生は中間的な存在、もっとも平凡な普通の大学生です。なぜこのような大学生をここに連れてきたのか、その点について簡単にぜひ皆さんにお話しをしておかないといけないと思いました。

韓国から来た学生だから理論的に大変な武装して来たのではないだろうか、なんとなんとか有名校のなんとか大学の学生会の会長、幹部、韓国を代表するような学生たちなどではないだろうか。そのように皆さん期待して来られた方にとってはがっかりさせてしまったかもしれません。しかしこれから日韓関係をつくりあげていく原動力、力というのはここに来ているような普通の人たちなんです。日韓関係が誤った歴史をもし反省するとしたら、それはエリートたちの過ちを、つまり国の過ちを市民たちがけん制できなかったところに端を発してると思います。

これからの時代は皆さんの時代です。市民の時代です。皆さんのような普通の、そしてもっとも中間的な立場にいる人たちが、正しい歴史認識をもち、そしてエリートをけん制してください。そして権力をもっている人間たちをけん制してください。そうすると日韓関係は健全な土台の上で、理性的に、冷静に、一步一步問題を解決していけるのだと思います。期待したいと思います。皆さんのことを大変心から誇らしく思います。ありがとうございました。(拍手)

岡・司会進行 事務局からここでいくつか事務連絡させていただきます。まずお手元のアンケートですね、アンケート用紙に記入していただいて、

最後あそこの2つの出口のところで回収いたしますので、提出をお願いします。それからここに胸につけてくださってるバッジ、もらってない方いらっしゃるそうなので、じゃあ、至急お願いします。もらってない方は事務局がお渡します。バッジですね、バッジも同じように回収いたしますのでお渡しください。

それからさっき司会のほうからもちょっと言及がありましたが、このあと交流会があります。引き続ききょうのお話、言い足りなかったことなどそこで続けていただければと思いますので。渋谷です、会費制ですが、これはそうですね、6時15分ぐらいに1階のロビーに行っていただける方は、集まっていただければお連れしますのでどうぞ参加ください。それから韓国からいらした学生さんはちょっと事務連絡がありますので、ちょっとだけこの場にこのあと残ってください。

それからきょうは通訳の方に大変お世話になりました。チェ・ウンジュ(崔銀珠)さんと長友英子さんが、きょう、本当に大変だったと思うんですが、こちらにいらっしゃるんですね。みんなでちょっとお礼を込めて拍手をしたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

きょうは本当に長い時間、お疲れさまでした。日本、それから韓国の学生の皆さん、それからコメンテーターのイー先生、小倉先生、橋本先生、それからきょうさらにこの会場にいらしてくださった皆さん、本当にありがとうございました。カムサムニダ。

最後にですね、きょう何か1つでも気づきとか、考えるきっかけとか、お互いに与えたということにお互い感謝の気持ちを込めて、もう1度最後みんなで拍手をして終わってははどうでしょうかと思いますが、いいでしょうか。(拍手)

また、必ず、お会いしましょう。ありがとうございました。(拍手)

協力

李元雄 関東大 schools (韓国)

横田洋三 中央大学教授

橋本ヒロ子 十文字学園女子大学

高木早苗 明治大学

金奎一 在日同胞の生活を考える会

朝日新聞社

東亜日報東京支社

株・韓国広場 韓国料理店・高麗

通訳(訪問インタビュー、会議)

崔銀珠 長友英子 小嶋寿美子 印省熙

(株) NHK情報ネットワーク

社団法人国際交流サービス

フォーラム後、学生たちから 寄せられたレポート

《韓国の学生から》———アジア女性基金訳

アジアの人権と民主主義のために韓日学生が協力を

慶熙大学校言論情報大学院

金素悦

この度の韓日学生フォーラムで、主題となった2種—メディアを通じて見た韓日問題、北朝鮮を直視する韓日の学生—は、韓日学生らにとって重要な関心事ではなかった。むしろ日本人(日本学生)から見た韓国人(韓国学生)、韓国人(韓国学生)から見た日本人(日本学生)とでもいった、両者間の先入観を打ち崩す視覚矯正の時間であった。これまで、歴史的、社会的に影響されて形成された先入観が、双方同士の直接的な出会いと対話を通じて解消され、また国家や言語など、あらゆる障壁を越えることができた時間であったと思う。

お互いを充分に知るには余りにも時間の足りなかった短い日程と、次にまた会って話し合うことができるのはいつの日であろうかという、物足りなさが残る韓日学生フォーラムだったが、韓国と日本の間のあらゆる問題は、十分な対話を通して解決することができるという信念を持てるようになった。

あれから3か月が過ぎたが、今でもある日本の友達の言葉が胸に残っている。「歴史問題であろうと他の問題であろうと、感情的な対応は自らに十分な根拠がないことを表している」という言葉。今の韓国人は日本人との対話において、もしかしたらこのような指摘がされうのではないかと自問してみた。

私個人としては、2004年が終わってしまう前に、フォーラムで時間をともにした日本の友達を呼んで、韓国で韓日学生フォーラムが開かれること

を願う。

韓国の未来において、最も重要な友邦とならなければならない日本。「近くて遠い国、日本」と言っていたが、今までの日本と韓国との関係を見れば、引かれる力よりは反発する力が強い関係であったと言える。日本に対する韓国人の想いは極めて特別である。それは韓日間の過去歴史問題が原因ではないと思う。現在の国家間の関係(国際関係)ではあるまいか。

これから10～15年経った後に、それぞれの国の社会で中心的役割を担うこととなる現在の大学生らと話合えるということ自体が、私の韓日学生フォーラム参加に対する重要な目的と期待であった。

4泊5日の短い日程であったが、日本の友達との対話を通じて、日本が将来重要な友邦にならなければならないという私の考えがより一層に確かになった。

韓・中・日 歴史問題

近頃の韓国社会では高句麗史問題から派生した中国との歴史問題、日本との独島(竹島)領有問題など、歴史問題に関する社会的関心がいつになく大きくなっている。過去歴史問題を眺める視角には様々なものがあるが、過去歴史の問題は政治的にならざるをえないという認識に私は全面的に同意し、歴史認識から出発している。過去の歴史は現在の中国、日本、韓国の全てが東アジア史として歴史を共有したという歴史観が重要な視点ではないかと考える。自国の歴史のみを重視する現時点でのレベルでは、無理な歴史解釈がされるしかない。

さらにまた、今の大学生が過去歴史問題に両手両足を捕らわれているように思われ、切なさを感じる。韓、中、日の3国全てが偏狭な歴史認識から脱することを求め合いながら、過去歴史問題とは異なる現在の側面でも、より一層活発な交流と連帯意識が必要な時だと考えられる。現在アジア、特に東北アジアにおいて最大の問題点は、不安定なアジアの人権と民主主義のために日本と韓国が真実の友邦にならなければならないことである。国家が親しくなるということは「理解し合う」というのは単純な一次元的意味ではない。国家単位での友誼を指して同盟という表現もあるが、日本と韓国との関係においては、アジア社会の発展のために、協働の意味で志を共にしてパートナーの関係を形成しなければならないのである。

日本と韓国を象徴する言葉があるとすれば、世界第二位の経済発展を成し遂げて高い市民意識を持った日本、分断の痛みと血を通して民主主義を発展させた韓国と言えよう。

この言葉は私たちの「人生の先輩」たちが成し遂げた社会発展だ。先人たちの限界であるとするれば、お互いに対する誤解と不信によって相互の関係を形成することができなかつたのだ。

これからを担う私たちの世代は、何をしなければならぬかと問うてみる。まだ日本と韓国が完成された社会発展を成し遂げていないということを確認、努力が必要であることも分かっている。しかし、現在、人類の普遍的価値であるという人権と民主主義をただの一回も経験することができなかつた、またこれからも経験する可能性が薄いアジアの独裁国家と後発国の国民のために、韓国と日本が努力しなければ、私たちは社会的責任と良心を忘れていると誹られても言い逃れできない。社会発展のためという言葉も見せかけであると認めざるをえない行為である。

彼らも当座は大変であろうが、徐々に人類の発展に伴って一緒に発展していくことができるという幻想主義の人もいる。遠くに思っていた原理的イスラム武將勢力、テロリストたちの無差別的なテロ行為が今日の私と人類全ての自由を脅かしているように、アジアの第三世界国家、独裁国家の問題も、いずれ私たちの生活を脅かしうる問題となるであろうことを予測できる。

苦しむ彼らと私たちの自由のためには、必ず解決されなければならない問題である。これからのアジアの人権と民主主義のために、日本と韓国の大学生がなすべき役割は大きい。——挑戦、希望、若さ——

たがいの好感と理解が土台に

梨花女子大学政治外交学科

尹恩貞

大学という新しい環境に適応し始めるにつれて、関心を向けるようになった分野がある。それは即ち北朝鮮と北朝鮮脱出住民に関する問題である。私は昨年7月から脱北者の韓国定着を助けるボランティア活動をし

ている。去る8月の韓日学生フォーラムにパネルとして参加したことも、私が活動しているNGO団体による推薦のおかげであった。

私が日本で開催されたフォーラムに参加を希望した一番の理由は、脱北者の抑圧された人権と彼らの悲惨な現実を話すことで、日本の若者たちと人々の関心を導きたかったからである。現在、韓国内でも北朝鮮に対する見解は明確ではなく戸惑っている状況だが、それゆえに、より一層日本を含む国際社会の共感が必要だと思った。朝鮮半島問題は当事者である私たちの合意のみだけで解決しうる問題でもなく、韓国と北朝鮮に限った課題でもないと思ったからである。このような観点で参加したこの度のフォーラムは、これからの時代を担っていく韓日両国の大学生たちの間に対話を促したという点で大きな意味を持つと思う。

討論の主題は大きく二つに分けられる。一つは北朝鮮を俯瞰する韓日の新世代の視角という主題で、もう一つは韓日両国の関係におけるメディアの役目という主題である。フォーラムに参加して物足りなく思われた点は、討論が一つの主題で成り立たなかったため、各題に関する深みのある話し合いができなかったことである。韓日の過去事に関連した問題、北朝鮮に対する問題、韓流ブームのような両国間の文化交流に関する問題など、多様な主題で討論が進行され、実際に量的には多くの意見交流ができたが、各主題についての深みのある意見を伝えるには制限時間のために無理があったと思う。

フォーラムは、第一の主題である北朝鮮に関する韓日大学生の討論を始まりとして展開された。北朝鮮に関する日本の学生の意見を聞きながら感じた点は、彼らが韓国の分断と朝鮮半島の歴史的課題である統一に対する問題について、大した関心を持っていないということだった。南北朝鮮の分断を直接に経験することのできなかった世代だから、現在の分断状況が自然に受け入れられて、このような状況が初めからそうだったことのように感じられるという、すなわち統一の必要性を敢えて感じないという日本側学生の発言に充分に共感しながらも、殺伐とした想いを隠しえなかった。

朝鮮(韓)半島の未来に関する問題、特に統一と北朝鮮に係わる問題は、これからも好むと好まざるに拘わらず日本との対話と協力が必要であり、対話相手が私たちと同じ年代の日本の若者達ということを考えてみる時、

我が国の国家的利益を根拠とした統一論ではなく、人類の普遍的な価値をもって対話相手の統一への関心を引き出すように努力しなければならないと考えるようになった。既成世代と違って、今日を生きている韓日両国の若者は、敵対的な反日・嫌韓感情に捕らわれているというよりは、お互いに対する好感と理解を土台にしている状態なので、これから韓国と日本の未来に関する問題をともに考えるとき、肯定的な効果を生むことができると思った。

日本の大衆文化が開放されるにつれて、韓国内でより厚く形成されていった日本文化マニアの層、そして現在日本で話題となっている韓流ブームのような社会現象が起こった最大の原因としては、メディアの役割が大きかったのではないかと思う。フォーラムの討論は「韓日両国の関係においてメディアが進むべき方向と役割」という二番目の主題に話題が変わりつてからも続いた。討論は現在日本ではやっている韓流ブームと合わせて展開された。メディアによって両国の文化が伝えられることで、お互いの生活方式を理解する幅が広がった。このような相手に対する理解は、日本を過去に韓国を侵略した戦犯国として限定した考えから脱して、未来の発展をともに図り歩むパートナーとして考えるようになったきっかけになったと思う。

討論を通じて、韓国と日本で流行っている双方の文化に対し、あらためて考える機会を持った。現在話題になっている韓流ブーム熱風を近視眼的にその見かけのみを見るのではなく、現在起きている社会的現象に対する原因の分析と、賑やかさに隠れてともすれば見過ごしてしまう過去歴史に関する問題まで掘り返して、深みのある討論をしようと努力した。

近頃の韓国は「冬のソナタ」の恩恵をたっぷり受けている。一つのドラマがきっかけとなって、韓国を訪問する日本観光客の数が驚異的なほどに増加し、韓国語を勉強する日本人が増えつつあるというニュースが連日のように報道されている。最近日本社会で話題になっている韓流によって、韓国と日本の表面的な関係は以前よりずっと近くなったように感じられる。

このように、韓日両国で進展している友好的関係は、特に若者で目立つ。今韓国の若者たちは、洗練された大衆文化と一歩先を行くトレンドリーダーとしての日本を目で見て経験している。しかし、どんなに日本文化に沸き返える若い世代と言えども、「日本」という二文字の中に彼らの好みに

合う部分のみを連想することは容易ではないであろう。たとえ過去に日帝の植民地支配を自ら体験することがなかった世代といえども、日本という国を思い浮かべる時に、複雑な感情を排除することはできないことが現実である。したがって韓国にとって日本は特別であり、これからの関係において一層慎重さを持たなければならないと思う。この度パネルとして参加した韓日学生フォーラムは、今まで私が持っていた考えに重みを加えてくれたとても良い機会であった。このような良い経験を設けてくださったアジア女性基金関係者の方々、そして李元雄教授に感謝を申し上げたい。

フォーラム後、徹夜し、泣いて別れた記憶

関東大学校英語英文学科

李 芝 遠

今回は私にとって二回目のフォーラムである。昨年のフォーラムはある意味で極めて特別な経験だったから、今年度にもフォーラムが開催されたら、是非参席したかった。そして、私の願いが叶えられた。正直に言うと去年は準備が充分でなかったの、フォーラムが終わった後で「ああ、もう少し、何か分かった上で参加していたらば、どんなに良かったらうか？」と思った。そして昨年私が書いた後記を最近読み返したが、当時の私はこんな考えをしていたのだと知り、本当に驚き、恥ずかしくも感じた。1年の間に、考えがこれほどまでに変わってしまうなんて。そして、誤った知識（もちろん私の基準で見た時の）がいかに恐ろしいのかをも、つくづく感じた。実は今この文を書いている最中も、時間が経った後で今書いているこの後記を読んだら、どのように感じるであろうかと想像すると少々恐ろしい。しかし、あの時の私はこう感じたのだとそのまま受け入れることにしようとして心に決めて、勇気を出して感じたとおりに書くことにした。

天才でもないかぎり、背景知識があつてこそ、それを基にして私のアイディアが含まれた知識をつくり上げることができて当然だと思う。「今知っていることを、その時に既に知っていたら…」などという類の感情は感じなくなかった。だから今回は、何か必ず自分なりに勉強し、考えてから行かなくてはと思ったが、思うようにはならなかった。もちろん、フォーラ

ムに参加して、私とは異なった考えを持っている人々に接し、話を聴くだけでも大きな発想の転換のきっかけとなることもある。去年の私がそうだったから。しかし、今回はそれを単なる『きっかけ』で終わらせたくなかった。そこから更に伸展させて新しい考え方を築き、それを他の人々に伝えて、私の考えが他の人々の基準ではどのように映るかを知りたいと思ったのである。そして、受けるべき批判は受ける。もちろん辛い事ではあるが、それも私の考えを築いていく過程のうちの一つであるから。

少し意味が違うかも知れないが、現在、過去、未来という主題に対してとても共感している。

基準というのは可変的なものだから、——そして世の中には様々な基準が同時に存在してもいるし——過去に行われたことも、その当時なりの判断と評価があろうが、現在の私たちの目に映されることとは明らかに異なるので、新しい意味として映ることもある。そして、そこからつながる私たちが見渡す未来への展望もまた変わる。

「過去は現在の鏡」という言葉があるように、過去に対して研究することが現在の私たちをより理解するための鍵となることも明らかだと思う。すなわち、歴史について理解して行くことが自らのアイデンティティを悟る過程になりうるが、そのような側面から見た時、日本の歴史教科書歪曲問題は、——一人の韓国人として見て、彼らが正しい事実を言っていないという点でも、もちろん腹立たしいが——彼らの歴史がどんな目的のための手段化されているかと言わなければならないか？ 歴史研究の本質的な目的自体が歪められているように感じ、その点を、実はもっとも切なく思う。果たして真実の上に被せた薄っぺらな帳が永遠に被せられたままでいられるのであろうか。そして皆赤裸々にされた時の混乱はどのようなものになるだろうか。もし私がそのような混乱状況におかれたら、背信感と怒りを耐えることができないであろう。それは、私が信じていたことどもが根底から覆されてしまうことだから。それ故、今の歴史教科書歪曲は、単に真実の是非を問う以上の問題がある。これが判らないはずがないのに、どうしてそのような方向に流れていかねばならないのかが疑問だ。知っているながら、自分たちの思惑のために無視しているのだという方が当たっているかも知れない。

そして歴史の問題でも、またはメディアの報道でも、それを受ける側は

自らの基準を明確にして受け入れることが重要だ。しかし、基準を明確にするということが、自分だけが正しいという独断につながってはいけないと思う。他の人の考えにも一理があったらば検討して見る謙虚さもなければならぬ。だからといって無条件に受け入れるだけではまた、あちらこちらで衝突することになる、筋を明確にしておかなければならないと思う。そしてその筋を決めるにも、おびただししい試行錯誤が必要だと思う。

いくら資本主義社会だからといって、一つの国家の経済力のみをもってその国全体を判断してしまうことは、私がかつとも嫌悪することの一つである。ともあれ、現代は経済力という基準が無視することのできない要素となってしまったが。

そこで、このように考えてみた。歴史的な問題から離れて、もし今我が国の経済が日本よりも水準が上なら、在日韓国人たちが過去や現在において、困った立場に置かれる事がより少なかったのではなかろうかということである。現実はそのでないから、切なく感じずにはいられない。在日韓国人は、自らの責任に因らない悲しい歴史を背負っている人々だ。だからといって、彼らが憐れみを受けて保護を受けなければならない存在として扱われることは決して望ましくない。簡単ではないが、単に彼らにとって在日韓国人であるという要素が、普通の日本人たちにとって、例えば住む所がどこなのか、どんな食べ物が好きかなどという類のとるに足らない問題のように、どんなことをするにも、別に影響を及ぼさないようになつたら良いだろう。そして、彼らが自分を日本人だと思おうが、韓国人だと思おうが、あるいはそのどちらにも属することができないと思おうが、彼らは私たちの一部分であり日本の一部分でもあるから、お互いに自国の国民に対するのと同じくらいに関心を持たなければならないことは当然である。そのためには今まで持っていた考え方の転換が必要である。それら全部が間違っているから変えなければならないとは言わない。それらを判断する基準というものは相対的なものだから。ただ、皆がよりよい方向に進むためには、そのような必要があるということを強調したい。

「高麗」でのキム・グンヒ社長とのインタビューは最高だった。とても一生懸命聞いたし、そのキム社長が考えていることと私の考えが一致しているような気がしてうれしかった。韓国の食文化や、現在の「韓流」と称されるものが、韓国と日本がお互いをよく理解するための小さな窓になるこ

とができるというお話に全面的に共感する。既に過ぎた過去のことが現在そのように評価されているのではなく、私と同時代に生きておられる方からそういうお話を直接聞いたことが新鮮な衝撃だった。そのとき、安重根義士(韓国と日本の親善はお互いをよく理解し合うことにあると強調した)についての話を比較対象として挙げて感想を話したが、それは、お二人がそれぞれ表現方法や行動方法は違うが、究極的に目標とするところが同じだと感じたことを話したかったからだった。この方のように考える人々が、両国で少しずつ少しずつ更に増えたならば、韓国と日本の歴史はこれから確かに何か今とは違った方向に流れるようになると思う。

それから、日本の友達の友情をととてもありがたく思っている。フォーラムの最終日、新宿のカラオケで天井から下げられた友達!(とても驚いたが面白かったです!) 別れる時に何人かの友達が流した涙と(本当に感動しました)、一緒に徹夜をして過ごした時間、日本にいる間中、いろいろと気を遣ってくれて一緒に過ごしてくれた友達…皆忘れることができないと思う。今この文を書きながらも記憶が鮮やかに甦る。そして、とりわけ「基金」の担当の方にも厚く感謝したい。

この後記は、私がいくつか感じた点をもとにして書いた。今回のフォーラムはいろいろ感じたり学ぶ機会が特に多かったが、言及していない点は私がよく分からなかった部分である。今後さらにたくさんを知って行かなければならないと思う。

「北朝鮮」などでインタラクティブな意見交換

梨花女子大学校 国際大学院修士課程

朴允志

2004年8月に開かれた第2回韓日学生フォーラムは、両国の学生らにとっても深い印象を与えた。既存の歴史問題に限定して被害者と加害者を分ける考え方から脱して、昨年のフォーラム参加者の言葉を借りて言うならば、この度のフォーラムはさらに発展性が見られるフォーラムであったと評することができる。

アジア女性基金の伊勢桃代局長による歓迎の挨拶とともに本会議が始まった。韓日各国から代表として参加して下さった多くの教授とメディ

ア関係者がコメンテーターとして参加した中、韓国と日本の学生による司会者が会議を進めて行った。まず、本会議に先立って午前に行われたグループ討論の内容を総合し、本会議の主題を項目化して進める形式が整えられた。

初めはフォーラムの主題に対する曖昧さがなくもなかったが、主催側の意図に合うように、初めからとても自由な討論となった。自然に挙がった現在の国際的関心事を含めて、朝鮮半島の平和と安保に関係した北朝鮮関係の話が、討論者の一番大きな関心事となった。この主題について少し消極的であった日本側の学生は、韓国側の学生が持っている北朝鮮に対する特別な知識と関心に対して驚きを示し、韓国側の学生も日本側の学生に北朝鮮の存在と東アジア国々の安保に対する意見を提示するなど、極めて水準の高いインタラクティブな討論を導いて進めた。異文化体験と韓日関係に対する両国の意見はとても積極的であり、韓流ブームや日本アニメーションの波及効果とその潜在力に対するそれぞれの意見を表明したりもした。このような両国間文化交流の多様なチャンネルに対して、大多数の参加学生が良い反応を見せた。

このフォーラムに参加した両国の学生らが、決して韓国と日本を代表する集団だと言うことはできない。しかしながら、将来両国間の国際的地位において利害関係を成立させつためには、特別な教育を受けた特定集団の意見よりも、今回のフォーラムのような利害関係のない、多様な背景と平凡な意見を持った学生らがともに討論して意見交換をしたということに大きな意義があると思う。今回のフォーラムを通じて日韓両国の学生らが両国の文化はもちろんのこと、国際関係に関する理解の程度、考え方の違いなどを体験することができた。また、「果して日本の学生が…」あるいは「本当に韓国の学生が…」などという考えが、これからの韓日関係を脅かすようにもなりうると悟った。このような対話と討論を通して、お互いの立場をより一層理解し、発展的な方向へと共に研究する姿勢を引き続き行っていけば、お互いの感情の行き違いが原因による被害者はこれ以上発生しないことと考えられる。

今一度このように貴重な経験をさせてくださったアジア女性基金に感謝し、また一同に集まり質の高い討論をしてくださった多くの学生と教授に感謝する。遠くて近い隣国。しかし日本は私たちにとって遠いというより

も近いが、近いというよりも遠い国だ。同じ肌の色を持ち、同じ顔形をしているからといって、考え方までも同じでなければならないということはないのである。近隣の日本に韓国が理解してほしいと主張することと、日本が韓国に理解を求めて主張することはその基準がそれぞれ異なるので、お互いの理解の差を縮めるためには、今後とも韓日学生フォーラムのように、未来の意思決定権を持つことになる今日の若者が意見を共に分かち合う機会がしばしば持たなければならないと思う。

傷を癒し、ともに生きて行く友だちとして

梨花女子大学食品栄養学科修士課程

金銀貞

「お元気ですか」——感動しながら見た日本映画『ラブレター』のせりふの中の一つだ。考えてみたら、思ってた見たら、日本は本当に近い国なのに、日本映画に関心持って見るようになったのはここ数年のことである。日本といえば安重根義士と「慰安婦」、そして独島（竹島）がまず思い浮ぶ。私にとって理由なく（本当は理由がなくもないが）、すっきりとしない何かがぽつんと残っている日本。

初めて日本を訪問したのは5年前の1994年で、大学2年生の冬休みだった。初めての海外旅行だったので胸がドキドキしたが、団体旅行なので日本を深く見て来ることはできなかった。日本はみたけれども日本人に出会うことはできなかったということが、初めての旅行の思い出。清潔な通り、静かな日本人との短い出会いが心残り、翌年の冬にまた日本を訪れた。その時に訪れた所は、初旅先の東京ではなく、沖縄だった。東京とは違う雰囲気的地だったが、そこで初めて日本人に会うことができた。拙い日本語と片言の英語で話し合いながら、一緒にゲームをしたり歌を歌って、空港まで私を見送ってくれた暖かい友達に出会ったのである。

その後、大学を卒業して勤めをしながら大学院に進学をした。日本の友達とまた会うという約束は忘れつつあった。そんな中、今年の1月からボランティアをしている「北朝鮮人権市民連合」を通じて「韓日学生フォーラム」に参加することとなった。北朝鮮人権市民連合は、北朝鮮の劣悪な人権状況を改善して苦しんでいる北朝鮮難民を助けるための国際キャン

ペーンと、韓国に入国した脱北者たちを助ける活動をしているNGO団体である。

そこで私は、北朝鮮からの脱出女性が社会定着教育を受ける城南ハナ院で毎週水曜日に開かれる女性プログラムを担当している。経済生活、職業、性・保健知識、美術プログラム、先輩脱出者による定着経験談、自分自身に書く手紙などのプログラムで進められる。水曜女性プログラムには、対象者（20歳から50歳の単身で入国した北朝鮮脱出女性）に好評をばくしている。人に対する信頼を築けなくなった対象者らはソウル、仁川、水原などから盆唐まで、自前で時間とお金をかけて毎週訪れるボランティアに感謝と信頼を示して、身の上話を打ち明ける。韓国の青い山を眺めていると、飢えて死んで行く北朝鮮の隣人と兄弟が思い浮かび、北朝鮮脱出後に第三国を彷徨いながら女性として耐えがたい蔑みを味わわされ、北に残してきた兄弟と両親、子どもの生死さえ分からなくて溜め息つく彼らに会えば、私も胸が苦しくてなってくる。新しい生活を求めて韓国へ来たが、これが決して旅程の終わりでないとは彼らも私も知っている。分断の苦痛が祖父母の代、父母の代で終わらずに私たちにまで伝わっているのだ。このような苦痛は統一がなされて解決する問題であり、受けてきた傷は統一されたとしても癒えることのない年月の傷だ。

我が国の分断という歴史の中には日帝時代がある。分断の最初の原因は日本がもたらしたものだ。このような事実を、私たちの同年齢の友達に分かっているであろうか？ 近代化という名前で繰り返された蛮行を知ろうとするであろうか？

脱北者についてどれくらい知っているのか、日本の学生たちに聞いたかった。

韓日学生フォーラムの参加者のうち、韓国側参加者は20歳から32歳の大学生と大学院生だった。また、日本側参加者は日本人学生と留学生、在日韓国人学生であった。初めには、どのような話をどのように進めて行かなければならないか悩んだが、韓国広場のキム・グンヒ社長に会い、また朝日新聞社を訪問をしたりしているうちに、私たちが話し合う内容が具体的になった。金社長との対話の中で、生活文化を一緒に分かちあうことで相手を理解し受け入れることが必要だという話に共感した。食べ物を一緒に食べて、お互いの言語を学んで、TVドラマなどの娯楽を共有すること

で、お互いの結びつきがより親密になっていくということを、フォーラムを通して感じるようになった。

同時通訳による国連大学でのフォーラムを通じて、お互いの考えを尋ね、答えて行きながら、韓日学生の違いを見つけ出した。学生同士の間の違いとは言えない、国家間の差と社会の雰囲気も感じる事ができた。政治が分からなくても、歴史が分からなくても、韓国と北朝鮮が分からなくても生きて行くことができると思うのが一般的な日本学生たちの考えということに驚いた。最近の韓国の学生の中にも社会に無関心な個人主義があったりするが、大体においては政治、歴史の問題に敏感だからである。それでも、フォーラムに参加した学生たちは韓国に関心が高かったし、フォーラムに参加するために、関連の書籍を読んで勉強をして来ていたことが有り難く思われた。韓国では韓日問題に対して感情的に対処する傾向がありがちであるが、日本で生活している在日韓国人学生の経験では、客観的な事実（根拠）を提示して理性的に対処することによって、共に生きて行くことができるという話をした。真実と大衆の媒介をするメディア、即ち言論の報道においても、情報を客観的に提供することが必要だという意見が交わされた。

フォーラムの後の交流会は、更に親しく心を通わす事ができた。言語や年の差、文化の違いも私たちの足を引っ張らなかつた。海を越えて来た友達のために、日本の友達は、遅い時間まで私たちに付き合う思いやりを見せてくれ、酒席での慣れていない「ワンショット」も一緒にしてくれた。公式日程が終わって観光をする私たちに同行して、良い所を見せてくれようと自分の時間を割いてくれた。私の知っていた日本人と日本の文化から考えると、本当に異例的なことのように感じられた。驚いたことは、私たちと別れるときに日本人の友達が涙まで見せたことだ。短い出会いだっし言葉もよく通じなかつたが、私たちの心は通じ合ったのである。真剣でありながらも明るく私たちに接して、韓国と日本の関係のために一緒に考え合った友達をなつかしく思う。

傷を包み込んでしまえば、こじらせてしまう。露わにして正しく治療をすれば新しい皮膚ができる。韓日関係も同じである。赦しと和解が必要な部分を露わにして、未来と一緒に設計して行かなければならない。そうするために、未来と一緒に歩いて行く学生たちが一同に集まって対話を持つ

機会がもっと与えられるように願う。更に付け加えて、その席に私たちと同年代の北朝鮮の友達もいて、時間を共に分かち合えるようになることを期待する。

《「在日」コリアンの学生から》————

在日ができること

早稲田大学社会科学部

趙和紀

このフォーラムへの参加は最初からつまずいてしまった。

私は、前日に行われた新大久保「韓国広場」社長へのインタビューの席に、道に迷ったがために遅れてしまったのだ。新大久保も、そうそう来慣れたところではない。私はハンゲルの看板が立ち並び、においもどこか他とは違う街で右往左往しながら、その日の自分の行く末を案じていた。連絡が取れたことで、ようやく場所が分かり、すぐ目の前にあったレストラン「高麗」にたどり着くことができた。階段を上がると、もうすでに社長の熱弁は始まっていて、学生たちは一様に話に聞き入り、しんと静まった会場に社長の前を横切って入る時は冷や汗ものだった。

色々な不安を抱えながらのスタートであった。さらに昼食時には韓国の学生たちの真ん中に放り込まれた。韓国の学生たちとの交流が目的のフォーラムなのだから当たり前なこと、むしろ喜ばしいことであるが、やはりいきなり大人数のところになんとなく居心地の悪い感じである。幸いにも私は中学・高校と朝鮮学校に通っていたので、発音や抑揚に不安はあるものの一応韓国語が話せる。やはりここは韓国語で話しかけ、自分から積極的にコミュニケーションを図るしかない、と思い切って話しかけてみた。

すると韓国の学生は、私が韓国語で話しかけてきたことに非常に驚き、そこから一気に会話が盛り上がった。韓国の学生はとてもパワフルだ。それはコミュニケーションの時にも同様で、どんどん質問をぶつけてくる。特に女の子はすごいパワーで会話する。学生同士が話している様子は、日

本の学生のそれとは全く違って、けんかしているようにも見えるくらいである。学生たちは、なぜ私が韓国語を話せるのか聞いてきた。私は自分が説明できる範囲で、私の通った朝鮮学校や在日の話をした。学生たちはまるで初めてという風に、ふん、ふんと聞いて驚いたり、感心したり。私はそうやっていろいろのことを聞いてくれるのが、うまくいえないけれどなんだかうれしかった。その日は地下鉄を使って朝日新聞社に移動したあと、東京タワーに行く一部の学生を除き解散した。地下鉄内でも一気に日本の空気を薄くしてしまうようなパワー満開だったことが強く印象に残っている。

二日目にも、多くの新鮮な驚きがあった。

青山にある国連大学内で催されたフォーラムで、韓国の学生たちは、圧倒的な存在感を見せつけた。司会進行という大役を任された私であったが、まるで玄人のような司会ぶりと積極的な発言とで、韓国の学生がフォーラムを引っ張ってくれた。私も緊張で表情も声もこわばらせながらも、何とか司会を務めようと、そんなに多くはない在日学生参加者の一人として韓国・日本・在日をつなぐキーワードとなるのではないかと思うような質問を投げかけてみたりした。

韓国の学生たちは、しっかりと自分の意見を表明する。私は、やはり感じる学生たちのその「差」についてなんでなんだろうと色々と考えをめぐらせた。植民地支配、同族間の戦争、民主化闘争などがテレビや新聞などで伝わる日本ではなく、実際に起こった場所に学んでいるということは大きく影響しているだろう。そしてまた、韓国の学生たちも、私たち以上にたくさんのことを発見したということを知ってくれた。それは日本と日本人について、来る前と実際に来てからでは全く印象が変わったということで、フォーラム中には、日本が「慰安婦」問題についてこの「アジア女性基金」のような活動をしていることなど知らなかったのでもって驚いたという意見もあった。

私たちが普段生活していて得られる情報というのはとても少なく、かたよっている。テレビ、雑誌、そしてインターネット。インターネットの登場によって、それでも、より身近な情報を得られるようになったとはいえ、限られた情報の中で知らず知らずのうちに、先入観を持ってお互いの国を見ていることは否定できない事実だろう。それを打ち壊すきっかけとなっ

た今回のフォーラムの意義は大きい。実際に、肌で感じた日本と韓国。違うところもたくさんあるけれど、なによりも、人として学生として、同じ感情を有しているということを知り合えた気がする。

そんななかで、力不足ながら通訳として学生たちの間をとりもちながら、自分の役割というものについて考えた。日本に生まれ育ちながら朝鮮半島とのかかわりが強い私。朝鮮学校で、言葉やその他色々な事を学んだ私。今、在日を取り巻く環境は本当に難しく複雑になっていると感じている。そしてそれは、在日という存在自体に疑問を投げかけている、と少なくとも私は思うのだ。しかし、やはり在日だからこそできることがあると、今回のフォーラムへの参加で感じる事ができた。日本人にとっては朝鮮半島を知る足がかりとして、韓国人にとっては日本を知る足がかりとして、在日はその役割を果たせるのではないだろうか。在日だから、朝鮮半島のことに興味を持たなくてはいけないということはない。ただ、そういった環境にあることの意義を少し考えてみてもよいのではないだろうか。

ともあれ、今回のフォーラムへの参加は私に多くのことを考えさせてくれた。なにより韓国語を、もう一度きちんと勉強しなおしたいと思ったことは大きい。意思疎通に問題はなかったものの、堅苦しい文語であったし、微妙なニュアンスがどこまで通じていたかはかなり怪しいものだ。そんな私の韓国語でも、喜んで聞いてくれた韓国の学生たちには、本当に感謝したい。今度会うときには、「歌うよう」と表現される（私はもう少し力強いと思うのだが…）韓国語に近づけるように、まだ観ていない韓国映画をみて勉強しようと考えている。

真剣に話し、遊び、向き合った貴重な時

テンプル大学ジャパン

康典 絵

ワールドカップ、韓国料理、冬のソナタ…などなど、日本と韓国の距離は年々近くなってきていると言われている。キムチが食卓に並ぶのは、いまや日常の光景となり、日本と韓国を行き来する人は今や毎年数百万人にもなる。その一方で、日韓、日朝、朝鮮半島には大きな大きな見えない壁が未だ存在する。

日韓友好という言葉が日常茶飯事に聞こえる現在において、本当の友好が結べているのか、私自身疑問に思うことがある。もちろん昔に比べて日本と韓国の間で人々の交流の機会は増えた。しかし、日本のコリアタウンと呼ばれる新大久保に行っても、本国の人たちどうして集まる傾向が強く、韓国からの留学生からは仲のいい日本の友達を作るのが難しいという声が私のまわりでは良く聞こえてくる。

在日コリアン3世である私自身、最近になるまで、親しい韓国の友達を持つことがなかった。在日コリアンと近年本国から来た人たちの間にもまだ大きな壁が存在する。

本当の交流とは、相手の国の料理を食べたり、文化に興味をもつことだけでなく、文化や風習の違う間で、喧嘩をしたり、同じ時間を分かち合い、時には過去を振り返ってお互い真剣に向き合う、そして一緒に泣いたり笑ったりする事だと思う。そう考えたとき、日本と韓国の距離はまだ遠い。お互いの文化を知る入り口にはたっているし草の根的な交流は増えているが、表面的な事や一時的なブームである事が多く、真の日韓友好までかつ韓国側の意見、気持ちも知ることができた。とても勉強になったように思う。そしてそれ以上にパネリストの日本学生、在日の学生、韓国の学生に出会えた事がなによりも一番の収穫である。韓国の学生と過ごした三日間、交流会、東京観光などは一生の思い出である。ディズニーランドで彼らと別れる時、まだ会って三日間しか一緒にいなかったのに、別れはとても辛かった。それと同時に近くて遠い国と言われていた韓国、韓国の学生とここまでの仲になれたことはとてもうれしかった。フォーラム参加者十数人だけかもしれないが、互いに相手を理解し、好意をもったことは、日韓関係において大きな価値があると思う。今後も日韓フォーラムは是非継続し、拡大して行ってほしい。日韓学生のフォーラムのような市民間交流の積み重ねが、いつの日か日韓は近くて近い国と感じさせてくれるだろう。

また、最後に付け加えになるが、フォーラム後、10月終わってから11月初めの中央大学の文化祭シーズンに韓国の学生に会いに行ってきた。彼らは忙しい中、時間を作り、私が韓国にいる間、ずっと面倒を見てくれて、韓国料理などもたくさんもてなしてくれ、とても楽しい思い出ができた。日韓学生フォーラムに参加していなかったら、彼らに出会えてなかった事

を考えると本当に参加して良かったと思う。繰り返しになるが、日韓学生フォーラムという「場」を提供してくれた方々に心から感謝したい。ありがとうございました。

《日本の学生から》—————

相手を認めるためのコミュニケーション

明治大学政治経済学部

鬼原 民幸

昨年に続いて日韓フォーラムに参加した。「韓流」と称され、ブーム化しているようにもみえる韓国という国であるが、現実はそのように単純ではない。今回のフォーラムでは、キムチや「冬のソナタ」に始まる韓国ブームについても多く語られた。しかし、最も有益であったと振り返ることができるのは、日韓両国の抱える歴史問題、国民感情、そしてメディアの役割についての議論である。

国連大学でのディスカッションの前日、韓国の学生と共に朝日新聞社を訪れ、日本メディアの韓国に関する報道姿勢を、その具体例と共に学んだ。新聞というメディアの性質自体を問うような問題提起に日本人として戸惑いを覚えた。そこで取りあげられたのは、ある新聞が掲載した、韓国を含む東アジア諸国との連帯を否定する記事。専門家の見識として紹介されたものであったが、その内容は過激なものだ。ある韓国人学生は、そんな日本人が大新聞のページに写真つきで掲載されている事実「悲しいこと」と感想を話してくれた。

ただ、確かにその論調は過激であるが、それを完全に封じてしまってもいいのか、という疑問ももった。日本人の中には、少数であれ東アジアとの連帯に関して否定的な意見をもつ人がいる。その事実は報じられなくていいのか。前述の「戸惑い」の原因はそこだ。事実を正確に伝えることが、メディアに与えられた重要な役割であるとするならば、そこには様々な意見が登場していいはずだ。内容的には決して賛成できない意見にも、「そん

な考えを持つ人もいる」というくらいの姿勢で臨みたい。そして、「自分の意見をどう表すか」を同時に考えたい。重要なのは、自分と異なる意見を排除するのではなく、自分の意見でそれに立ち向かうということではないだろうか。

コミュニケーションの重要性。それを今回のフォーラムで実感した。意見の異なる相手と自分のそれとをぶつけ合うことは、大切なコミュニケーションにつながる。本番のディスカッションを前にして、一枚の記事が与えてくれたのは、そんな想いであった。

ディスカッション当日、日韓の学生が入り混じりテーブルにつく。「韓流」の話や歴史問題など、多くの話題が交差しながら議論は進んだ。その中で、印象的だったのは、両国の両国に対する感情である。ある韓国の学生が、「サッカーで日本に負けるのとアメリカに負けるのでは、日本に負けるほうが悔しい」と言った。やはり背景には歴史問題があるようだ。一方、日本の学生の一人が「日本の植民地政策が韓国に発展をもたらしたという人もいる」と発言。これには韓国の学生から猛反発があった。

こうした一連のやり取りに参加して思うことがある。それは、「意見を普遍化させてはいけない」ということだ。どんな意見も、その国の国民が等しく持っているものなんてまずあり得ない。ならば、「日本人はこう考えている」とか「韓国人はこういう意見をもつ国民だ」という表現はおかしいのではないか。少なくとも「日本人（韓国人）の中にはこう考える人もいる」という表現を使うべきだと思う。

自分の気に入らない国を、それこそ国ごと、国民ごと嫌いになることは、非常に危険な行為であろう。そこから生じるものは、屈折した（往々にして事実と異なる）固定観念である。

コミュニケーションをとりとうとするとき、「相手のことを深く知りたい」という姿勢が大切だと思う。深く相手を知るには、自分のことを知ってもらわなければならない。そう考えたとき、固定観念は障害以外の何ものでもない。自分と違う意見をもつ人を認めよう。それと同時に相手に伝えられるくらいの意見を、自分の胸にもとう。とにかく自分を表現することで精一杯だったフォーラムのプログラムは、それでも大切なものをたくさん残してくれた。

フォーラム終了後は、待望の打ち上げだ。酒に国境はない。日本のゲー

ム、韓国のゲーム、まさに両国後入り乱れた時間は、とにかく楽しいものであった。みんなで写真を撮り、アドレスを交換する。笑顔が溢れていたし、熱気は言うに及ばず、であった。その後の二次会は当然のように徹夜になった。韓国の学生はなんと全員参加。「やっぱり熱いなあ」。明け方、最後はハグで別れを惜しむ。白くなり始めた新宿の空、そこにはもう言葉はいらなかった。

韓国の学生たちと話し尊敬と驚嘆

中央大学法学部政治学科

入江 康則

8月23日、24日の2日間、日韓の学生が集まり、相互理解を深める日韓フォーラムが開催されました。私個人、このフォーラムに招待されるまで、韓国の事について全く知りませんでしたし、知る機会がありませんでした。そこで、日韓フォーラムで発言できるよう、恥をかかないようにと事前学習をしました。今回のこのレポートは、その事前学習と、メディアをキーワードとした日韓フォーラムと、実際に韓国学生と交流を深めた事後学習から学んだ事について、また私が率直に感じた事について報告しようと思います。

まず、私はメディアがとりあげるほど、嫌韓感情というものを持っていない、先ほども述べたように、韓国について学ぶ機会がなく、韓国に関して無知に近かったと言えます。そのため、韓国に関する知識を深めようと、事前学習を行い、「日韓関係におけるメディアの役割」や「日韓関係がこれから歩むべき道」などについて学びました。これに割いた時間はほんのわずかなものでありましたが、韓国についての興味がわき、フォーラムを通じて韓国学生と様々な角度から議論をし、相互理解を深め、新たな日韓関係を私達の手で構築しなければならぬと感じました。

今回開かれたアジア女性基金主催の日韓フォーラムでは、メディアを通じた日韓関係と文化を通じた日韓関係という、大まかに見て、この2つの視点から議論を行いました。前者においては、両国ともメディアが与える情報をどう受け取るかは、個人の裁量に委ねられてはいるが、メディアの役割は重要であるということと一致したように思われました。私は、メ

ディアの役割は、政府の監視役であるとともに、メディアがちょっとでも反日感情、嫌韓感情をとりあげてしまうと、日韓関係が悪くなってしまおうという日韓関係の動向において様々な責任を担っているのではないかと思います。

特に小泉総理の靖国神社参拝や、一部の政治家たちの暴言などが、韓国のメディアでは大きくとりあげられているそうです。受け取る人によっては激しい反日感情を持つに違いありません。ただ、両国に言えることは、このようなマイナスの情報だけではなく、プラスの情報を混ぜて報道することで日韓関係のバランスがうまくとれるのではないだろうかと思います。北朝鮮の報道についても同じことが言えます。マイナスの情報しか受け取らない人にとっては、その情報を元にしたイメージでしか物事を見れなくなってしまう恐れがあります。そのような状況を回避するため、もっというのであれば、日韓関係を良くするためには、メディアが政府を監視するのと同様に、私達国民にもメディアを監視する義務があると思います。では、プラスの情報とは一体どのようなものであるだろうか？ 後者の文化を通じた日韓関係と交えて話したいと思います。

プラスの情報として日韓フォーラムでは、「冬のソナタ」や「キムチ」や「日本のアニメ」をお互いの文化としてとりあげ、議論し合いました。「キムチ」や「日本のアニメ」はすでに両国間に深く根付いていて、そう簡単に切り離すことはできない。一方、「冬のソナタ」は、最近日本の主婦の間でブームになっていて、ヨン様個人に注目が集まっている。ここで重要であると思うのは、ブームをブームとして終わらせるのではなく、中身のあるものにしなければならないということである。中身のあるものとは、ヨン様個人だけでなく、それを超えて、韓国人、韓国の歴史、韓国全体に興味をもつことで、それこそ、本当に日本に与えた影響であると言えるのではないだろうかと思います。

私が日韓フォーラムを通じて感じたことは、このフォーラムのような民間人、学生どうしといった草の根の交流が必要であるということである。なぜなら、10年後、20年後、世界を担うのは、また日韓関係を発展させるのは私達だからである。しかしながら、関係をより良くするためには、歴史問題を放っておくことはできないのは確かである。日本は日本が過去に犯した過ちを深く反省し、韓国側にきちんと謝罪しなければならないし、

清算されたからといって、過去を忘れてはならないと思う。この過去は永遠に語り継がれるのであるのだから。だが、これとは別に市民レベルで交流を深めていくことには問題はないはずだ。これまでは過去への執着が強かったが、これからは未来へのパートナーシップを築くべきである。ただ何度も言うが、過去を忘れるのではなく、未来への関係を築くのであるならば、過去と切り離して考えた方が良いと思うからこのように考えるのだ。このようにすれば、政府間レベル、国レベルで争いが起きたとしても、市民レベルでの土台がしっかりしていれば、国全体がそう簡単に揺らぐことはないと思います。

今回、韓国学生と交流してみて尊敬すべきところがたくさんあった。例えば、韓国の学生全員ではないだろうが、今回訪日した学生はみな、日本の事をよく知っていて、へたすると日本人が知らないことまでも知っていたし、また、すごく感心したのは、留学もしていないのに英語が流暢であったこと。これにはとても驚いた。また、私は最初、討論の場で日本人は消極的だから韓国の学生に圧倒されるのではないかと心配であったが、実際はそうではなかった。それぞれが自分の考えを持ち、それを意見として述べることができ、一方、韓国学生も、その話に真剣に耳を傾け、また意見を述べる。素晴らしい討論をすることができた。このような機会をもっと増やしてはいかがであろう。個人的には、今度は中国を含めた日中韓のフォーラムを開いていただきたいし、もしそれが可能であるのなら、是非とも参加してみたい。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった方々に感謝の意を表するとともに、今回参加してくださった学生のみなさん、とても勉強になりました。本当にありがとうございました。

日韓の未来はメディアに流されない交流から

中央大学法学部政治学科

上村 一郎

「日本と韓国の未来」を考えさせられる2日間だった。両国の歴史認識の食い違いを発端とした過去の問題、マスコミ等に与えられた先入観による相互の誤解を克服せねば日韓の未来は不安定になる、と感じた。両国に

とって相手国との関係の健全化は死活的問題であると私は考えている。しかし、その不安は希望の裏返しでもある。「不安の大きさは希望の大きさに比例する」と言うのは私の座右の銘でもあるが、前述のような日韓関係に対する私の不安は、それだけ日韓の未来に希望を抱いているということ。日韓間の諸問題が死活的であるのは、それだけ日韓友好関係は両国にとってなくてはならないものであるということ。だから、私たちは日韓関係に興味を持った。そして、このフォーラムに参加した。このようなフォーラムが実施され、あの活発な議論が交わされただけでも、私は日韓の未来に希望を感じた。楽観的でもあり、抽象的でもあるが、今回私がもっとも感じたことであったので冒頭に述べさせていただいた。

しかし、やはりその未来へ向けての問題は山積みである。個別的に分類するとこのレポートでは考察しきれないほどの量と深刻さがある。しかし、それらの問題を大同小異にまとめると、「日本の嫌韓」、「韓国の反日」問題に集約されるのではないか。日本側の行動によって韓国が、韓国側の行動によって日本が嫌悪感を抱くことが最も危惧すべき問題である。さらに、今回のフォーラムのテーマに沿うならばメディアの報道にも問題がある。以下は両国のメディアの問題を指摘、考察しながら解決策を模索しつつ、日韓の未来を考えていこうと思う。

まず、日本メディアの問題点から考える。私の考える日本メディア最大の問題点は、「危機意識の薄さ」である。例えば、北朝鮮関係をテーマとした報道を見ても、どこかコミカルに描かれている部分が存在しているように思えてならない。このことはフォーラムでも指摘されたことでもあったが、付け加えるならば、その根本は日本国民全体の危機意識の薄さである。陸沿いに国境がないことなどから、昔からの国民性だ、と言う考え方もあるのかもしれないが、自国の危機、脅威、問題となる現象に対して、一般的日本人は危機意識が薄い。そのためメディア側もそこまで事実を大量に報道しないし、逆に関心を集めるために誇大化、さらには事実無根の報道が一種のエンターテインメントとして流されることがある。過去にも、日本メディアの流した事実無根で検証もしなかった報道が、日韓の問題に発展し、未だに日本も含めた関係国に清算がなされないという事実もある。しかし、この重要な問題に対して、国民から非難の声があがることはほとんどない。自国と隣国の問題であるにもかかわらず。このように日

本の一国平和主義的危機感の薄さが、日本メディアの問題を招いているのではないか。以上のことを踏まえれば、日韓関係における情報の少量化、誇大化、希薄化が危惧されるのは想像の範疇であるし、実際に現段階でも起こっていることである。

次に韓国メディアに関する問題を考える。韓国側には日本のような問題点はない。その違いは、制度そのものにはまだまだ議論の余地が残っているが、徴兵制ではないか。この制度によって、自分、または自分の周囲の人間が韓国国軍に属することで、国家の問題などに触れる機会が圧倒的に日本よりも多く、そして深く考える機会が日本人よりも存在するからだ。また、危機意識という観点では、やはり北朝鮮と国境を隔てていることも大きな要因のひとつである。

では、韓国メディアの問題とは何であろうか。それは、対日過熱報道だ。以前から言われていることは、日韓問題の根底にあるのは日韓史における日本の加害者意識の薄さと、韓国の被害者意識の深さが過度であるということ、このことは両国からの指摘も多い。韓国メディアの問題は全てここに起因するような気がする。例えば、前述のような日本の誇大報道、さらにそれが日本のマイナスイメージを与えるものならば、検証なしに韓国国内で報道がなされるということもしばしばである。しかし、それはあくまでメディア機関という組織全体の話であって、個人の記者全てが反日かという、実際そうでもない。個人としては自分の報道が混乱を招き、日韓関係に悪影響を与えるために、日本国内での取材を故意にしなかったり、取材をしても韓国本国の本社に報告しないということもあるようだ。日本では批判の高まりやすい韓国メディアの中にも、実行したことは別として、そのような考えの人がいることを私は忘れてはならない。

話を戻すと、韓国メディアの反日報道に対して韓国人は敏感に反応する。フォーラムでも指摘されたことだが、実際の日常で韓国人の人々が歴史的被害者と呼ばれる人たちに対して何かをするということはめったにいないという。この点は、当日時間切れということもあり、議論が不十分であったのもっと議論していきたい気持ちは今でもある。仮定の話になってしまうが、もしも現代韓国人がこのような態度で歴史と接しているならば、韓国メディアの過熱報道は、ひとつの起爆剤的存在なのであろう。つまり、韓国メディアの報道は、普段眠っている韓国人の反日感情が増大させ、そ

して爆発させるということである。そして、この感情が日韓関係の摩擦に繋がることは言うまでもない。

これらのような日韓メディアに対する私たちが取るべき行動は、両国民一人一人が相手国民との交流を深めることだ。これがもっとも重要である。両国関係なくメディアに流されていく人たちは、それぞれのトピックに対する意識が低い人々である。意識の高い人は少量、希薄、または加熱した報道に操られることはないだろう。そして、メディアというレンズを通さず耳目口で実際に体験することは、日韓の摩擦をより少なくするだけではなく、市民レベルの日韓交流が向上するといえる。また政治レベルでも、改善された日韓友好関係を礎とした外交が展開される。その過渡期で、歴史、領土問題も解決されていこう。その点で、今回の日韓の学生フォーラムは、私はもちろん両国の学生にとっても非常にいい経験になったと思う。諸事情は存在するが、来年も再来年もこのような機会を学生に持たせて欲しい。そして、このフォーラムで理解の深まった我々の存在を礎として、日韓両国の未来が輝くことを期待したい。

日韓の歴史を知らずに生きてきた問題

中央大学法学部国際企業関係法学科

菅原 航

国際インターンシップの授業で、横田先生から「日韓学生フォーラム」の事を知り、格別韓国に興味があったわけでもなかったが、もともと旅が好きでいろいろな国の人と交流するのが好きな私は、韓国人と友人になるチャンスだと思い参加することにした。こんな単純な動機で参加したわけだが、日本人として知っておかなければならない歴史問題等を知り、フォーラムでは歴史、文化さまざまなテーマに関して互いに思っていることを、素直に言い合い、韓国側の本音を知ることができ、「近くて遠い国」と言われている韓国との距離感を縮められたように思う。

最近、韓流ブームで日韓関係は良好のように思えるが、よりよい日韓関係を築いていくためには、互いに正しい歴史認識を持ち、このような市民レベルでの交流の場をもっと増やしていく必要があると思う。ここでは、その理由を今回の学生フォーラムの経験から感想も交えて述べ、その次に

フォーラムに関しての改善点を述べようと思う。

まず一つめの理由は、私の場合、日韓学生フォーラムにパネリストとして参加することになったため、日本と韓国の歴史についてよく知っておかなければならないと思い、歴史問題（「慰安婦」問題等）について調べた。それにより今まで知らなかった過去、日本がやってきた酷い行為を知ることができたことである。この年になって知ったという事はとても恥ずかしいことであるが、もし今回のフォーラムに参加しなければ、生涯この歴史問題を知らずに日々暮らしていたかもしれない。「韓国広場グループ」の金社長（フォーラムのプログラムの中での訪問先の社長）がおしゃっていたように、今後より良い日韓関係を築いていくためには、まず過去をしっかりと認識することが重要であり、そして過去を国民レベルで清算していく必要がある。しかし、友人の中でも日韓の歴史問題について知らない人は多い。私をふくめ、日本がしてきた醜い歴史を知らずに生きてこれたことが問題であり、とても憂慮すべき事態のように思う。このような状況で韓国と良い関係を築こうとする方が、被害者の韓国側からしてみれば馬鹿げているとしか思えないだろうし、私自身このような現状が許されてはいけないと思う。

したがって、過去を正しく認識するために教育の分野等から改善していく必要があるが、日韓学生フォーラムのような「場」を増やしていくことも、歴史を自主的に学び、認識し、それをもとに日韓両国民が話し合うことにつながり、より良い日韓関係を築いていく重要な役割を担うことになると思う。私自身、日本がやってきた過去を学び、認識することにより、韓国の国民に対し、申し訳ない気持ちで一杯になり、二度とそんな事があってはならないと思った。このような気持ちを持つことが大事なのだろうし、このような「場」でこの気持ちを素直伝え、日韓の未来について話し合うことが必要だと思う。

実際韓国の学生の話によると、日本に来る前は、やはり、日本に対しては良い印象はあまりなく、好きではなかったと言っていた。しかし実際に来日し、日本の学生と素直な気持ちで話しあっているうちに日本が好きになったと言ってくれた。この時、このフォーラムは未来の日韓関係のために一歩前進させたと思えた。もっともっとこのような市民レベルの交流を増やしていけば、確実に日韓関係は改善されていくと思う。

二つ目の理由であるが、日頃のメディア等の報道により、韓国は近い国でありながら、遠い国のように感じていたし、日韓学生フォーラムに向けて韓国との歴史問題に関する本を読んでいて、韓国の人々は反日感情が強く、何かあれば反日を有効カードに使ってくるという先入観を持ち、フォーラム前は韓国学生に対し身構えていたが、フォーラム・交流会を通して、思っていたよりも反日感情が強くなく、むしろ親日とまでは言えないだろうが、未来の日韓関係のために友好的な雰囲気だったということを知ることができた点である。彼らは、いつまでも歴史問題に関して反日感情を抱いていては日韓関係が改善されない、よって一步譲りつつ、未来の日韓関係を良い方向に持っていかうとしているのが伺えた。この事は今回のフォーラムのような交流の「場」がなければ、気付くことができなかっただろう。そのような意味でも、今後、日韓の市民レベルにおいて誤解を防ぎ、良い日韓関係を築いていくためにも、交流の大切さを認識し、今後も引き続き、交流の「場」を増やしていく必要があると思う。

三つ目の理由は、強引だが、日本の学生の政治への興味、関心アップのためである。フォーラム中、日本の学生は政治に疎い一方、韓国の学生の政治への意識の高さが話題となったが韓国では政治の変動が激しく、注意深く見ていなければいけないから政治の意識が高くなるとのことだった。私自身政治に疎く、自分の政治への意識の低さをとても恥じた。しかし、フォーラムを終えてこのままではまずいと思い、新聞で政治に関することは意識して注意深く読むようになった。このような点からも韓国学生との交流を増やすことは、学生達に刺激を与え、良い傾向をもたらすのではないだろうか。

四つ目の理由は、韓流ブーム後にも良好な日韓関係を継続させるためである。フォーラム中、韓流「冬のソナタ」などのブームが去ってしまった後の日韓関係のことを危惧するという意見が多数だった。しかし韓流ブームが去っても、良好な日韓関係を継続させていく必要があることから日韓の相互理解を進め、良好な関係を継続させるためにも、このようなフォーラムを増やしていくことが必要である。

五つ目の理由は、在日朝鮮人の立場を理解するためである。朝日新聞・東亜新聞(韓国の新聞社)への取材時に在日朝鮮人の学生が、在日1世、2世が苦しんできた過去・歴史が忘れ去られてしまうのではないかと、その時、

在日のアイデンティティーはどうなってしまうのだろうかという質問を東亜新聞社員へした。この質問を聞いた時、初めて、在日の心境を知った。それと同時に全く在日のそういう気持ちに気付かなかったことが申し訳なく、かつとても恥ずかしかった。この点からも在日の心境・過去の苦しみを理解するためにも今回のようなフォーラムはとても重要であろう。

六つ目は、北朝鮮外交に関して、より広い視点で観察するためにも韓国の北朝鮮への見方を知るためである。北朝鮮に対する日本と韓国の見方は違う。韓国からしてみれば、同一民族であるがために、南北統一に感心があるが、日本からしてみると、拉致、核がメインで、内部的な問題と捉えていなく、南北統一にはほとんどメディアも興味を示していない。しかし、今後韓国との良好な関係を築いていくことを前提とすると、日本は北朝鮮問題を内部的な問題と捉える必要がある。韓国の視点からの北朝鮮に対する対応も今後、北朝鮮との外交を進めていく上で重要視される必要があるのである。

さて今まで日韓学生フォーラムがなぜ必要かを長々と述べてきたが、次にフォーラムの改善点に関して述べようと思う。

まず、フォーラムを終えて思った事は、学生同士が話し合う公開フォーラムの時間が明らかに短かった。時間が短いがゆえに、あるテーマに関して、深く討論できず、もっと意見が交わされるべきものも、次のテーマに入ってしまい、納得いくまで話しあえなかった。また来場者の意見を聞く時間もなかった。私の友人も会場に足を運んできてくれたのだが、フォーラム後、「意見を言いたかった」と言っていた。そして時間が足りなかったがゆえに、今回最も話し合うべき日韓関係における未来について意見を交わすことができなかつたように思う。これは司会を担当した私の力不足で、それについて討論する時間を確保することができなかつたこともその原因である。とても悔やまれる。しかし、次回からは、ぜひ討論の時間をもっと確保していただきたい。

もう一つ改善点として、司会の人選を丁寧にやるべきである。日本側の司会の人選はいい加減であった。私にしてみれば司会をやらせていただいた事は、とても良い経験となったが、討論中うまく時間配分等をできなかつたり、話すべきテーマを話し合わせるができなかつた。これはとても悔やまれる。全体的に良いフォーラムにするためにも、司会の人選は

しっかりしたほうが良いとも感じた。司会をしっかり選ぶことで、時間を有効に使用でき、討論も充実したものとなるだろう。

以上の点を、次回（今後も続くことを願っています。）のフォーラムで改善し、よりよいフォーラムになることを期待したい。

最後に、このような「場」を提供してくださったアジア女性基金の伊勢桃代事務局長、李元雄教授、横田教授、その他関係者の方々に、心より感謝申し上げたい。

このフォーラムに参加することによって、当初の目的であった韓国の学生と友人になることはともかく、日韓の重要な歴史を認識することができ、かつ韓国側の意見、気持ちも知ることができた。とても勉強になったように思う。そしてそれ以上にパネリストの日本学生、在日の学生、韓国の学生に出会えた事がなによりも一番の収穫である。韓国の学生と過ごした三日間、交流会、東京観光などは一生の思い出である。ディズニーランドで彼らと別れる時、まだ会って三日間しか一緒にいなかったのに、別れはとても辛かった。それと同時に近くて遠い国と言われていた韓国、韓国の学生とここまでの仲になれたことはとてもうれしかった。フォーラム参加者十数人だけかもしれないが、互いに相手を理解し、好意をもったことは、日韓関係において大きな価値があると思う。今後も日韓フォーラムは是非継続し、拡大して行ってほしい。日韓学生のフォーラムのような市民間交流の積み重ねが、いつの日か日韓は近くて近い国と感じさせてくれるだろう。

また、最後に付け加えになるが、フォーラム後、10月終わりから11月初めの中央大学の文化祭シーズンに韓国の学生に会いに行って来た。彼らは忙しい中、時間を作り、私が韓国にいる間、ずっと面倒を見てくれて、韓国料理などもたくさんもてなしてくれ、とても楽しい思い出ができた。日韓学生フォーラムに参加していなかったら、彼らに出会えてなかった事を考えると本当に参加して良かったと思う。繰り返しになるが、日韓学生フォーラムという「場」を提供してくれた方々に心から感謝したい。ありがとうございました。

日韓フォーラムを通して学んだこと

中央大学法学部国際企業関係法学科

佐竹 紘和

日韓フォーラムでは、日韓のメディアの役割、食文化を中心に過去、現在、未来の日韓関係について日本と韓国の学生の間で議論しあった。二日間という短い期間ではあったが、本当に貴重な体験をすることができたと思う。また、今回のフォーラムが終わってから私は、韓国の学生が日本にいるまで彼らとともに楽しい日々を過ごし、そのなかで韓国のことについていろいろ学ぶことができてとても満足している。

フォーラムを通して、まず私にとって印象的だったのが、韓国の食文化である。代表的な韓国料理であるキムチには、日本人に受け入れられるまでに多大な苦難があったと韓国広場グループのキム・グンヒ社長が自らの体験をもとにお話ししてくれた。90年代前半、彼は、反韓感情を抱いていた日本人に対し、韓国の食文化を体験させることで少しでも日韓関係を改善させようとした。異文化体験という目的から、あくまで「韓国そのまま」のキムチを日本人に売り、今では、新宿大久保にある「コリアタウン」の中で韓国料理に限らず、他の分野にわたって韓国文化を多くの日本人に提供している。キム社長の体験から私は文化がどれだけ重要かを実感することができ、彼の話にあったように、私も民主主義が成立するためには、自分の民族が自国民のみならず、他国の人々からも尊敬される存在になることが必要であると考える。現在の日韓におけるそれぞれの民族に対する考え方、それから日韓関係について日本と韓国が抱くナショナリズムのなかには、日韓関係をよりプラスへと改善していくために軽視できない問題がたくさんある。例えば、日本の過去における韓国植民地政策について、好感を持つ一部の日本人や韓国のメディア内に、反日記事を作り、反日感情を高めさせようとする記者など、過去の日韓の歴史にのみ目を向ける人たちは他にも多い。過去の歴史を忘れることはできないが、政治家やメディアは、日韓改善の役割を果たす中心的な存在であり、よって国民の反日・反韓を引き起こすためにナショナリズムを利用すべきではない。この点から、他国から受け入れられる民族になることは、とても重要であると考える。

韓国の食文化以外に、北朝鮮問題を日本と韓国がどのように報道するか、それぞれの違いについても興味深い点が多々あった。例えば、韓国が報道する場合、北朝鮮の文化(歌や舞踊)を紹介することがあると韓国の学生はいった。北朝鮮に対して柔軟に対応していく韓国政府の姿勢はメディアにも影響しているように見えた。以前、韓国の拉致問題に関して調べたときに、あるホームページに韓国の拉致被害者の家族は日本政府に頼っていると述べられていた。メディアに関しては、北朝鮮と韓国の関係を改善していくために障害となっているさまざまな問題を伝えていくべきではないか。関係改善のためには包容的な姿勢も重要であるが、韓国人拉致問題の認識も欠かせない。そうした調整をもっと韓国側のメディアは必要とすべきではないかと考える。日本は、北朝鮮に対するメディアの報道の仕方は、韓国とはまったく異なっている。飢えに苦しむ人々の様子や北朝鮮の人が脱北をする瞬間をとらえた映像または金正日体制をテレビで見ると、北朝鮮に対して「怖い国」、「恐ろしい国」といったイメージが私を含め、多くの日本人の間に浮かぶと思う。対話と圧力といわれる政府の活動に影響して北朝鮮をあまりに危険視するメディアの報道は、北朝鮮国民の反日感情を高め、それは韓国にとって不安な部分が多いと思う。韓国の学生が言うには、多くの韓国人は北朝鮮が日本やアメリカの圧力を受けて攻撃をするならば、地理的に最も近く、日米と関係のある韓国が標的にされやすいと考えている。韓国では、北朝鮮との関係上、兵役義務があり、その対象となっている韓国の若い人々がニュースを通して北朝鮮やその他の政治問題に関心を持っていると実際に兵役を体験した学生が言っていた。

日本では、よく北朝鮮を「近くて遠い国」といっているが、ワイドショーや深夜番組に見られる北朝鮮を面白おかしく報道し、「深刻さ」を伝えない番組などを考えると、韓国と比べて関心としてはまだ遠い国の問題であるように思える。また、脱北者の証言などから北朝鮮を「怖い」というイメージで終わらせてしまう日本の報道や北朝鮮の対話が感じられる韓国のメディアでは時に視聴者や読者をひきつける目的が強く見られることが多い。メディアを通して情報を受け取る私たちにとって北朝鮮問題で述べたメディアの状況を見ると、全ての情報をそのまま鵜呑みにするのではなく、日韓と北朝鮮との関係をどのように改善していくべきか、メディアを通して自分から考えていくことが大事だと日韓フォーラムでの議論から感じる

ようになった。

フォーラムの最後の話題として日本における今の「韓流ブーム」の影響が上げられた。このブームによって過去の日本の韓国に対する歴史を忘れさせようとしているという意見があった。過去の日韓の歴史は、韓国で大きな問題になっていることを知った。韓国では、歴史調査委員会を設け歴史教科書に従軍慰安婦や朝鮮人に日本式の姓名への改名を強制した政策などを詳細に載せ、もっと多くの韓国人に認識してもらわなければならないという動きが見られている。たしかに過去の歴史を忘れるべきではないと思う。しかし、「冬のソナタ」に代表される韓流ブームなど現在の日韓の傾向を大切にすべきではないだろうか。2002年に開催された日韓ワールドカップでは日本人が韓国に来て韓国代表のユニフォームを着ながら応援していたことが韓国で大きな話題を呼び、今年中国で行われたサッカーアジアカップにおいて中国を非難した日本を見て韓国では日本を評価していたとSBSという韓国のテレビ局が自分たち中央大学のインタビューに応じた際に述べていた。中高年を対象としている冬ソナブームや若い世代による日韓ワールドカップ成功など過去の歴史だけを見るのではなく、最近の日韓関係を重要視し、過去と現在の調整をすることが日韓関係改善において必要であり、今の韓流ブームは過去の日韓における歴史の妨げになっていると私は思わない。

このフォーラムを通じて、韓国の学生とさまざまなことを話すことができ、今回のフォーラムに参加した意義があって本当に良かったと思う。一生の思い出にすることができ、こういう機会をあたえてくださったこの日韓フォーラムの関係者の方々に大変感謝しています。

資料

■日韓関係

外務省ホームページから（部分）

各種交流の現状 / 2004

(1) 国交正常化以来、両国間の文化・国民交流は、紆余曲折を経つつも着実に発展してきたが、特に98年の金大中大統領の訪日と、その直後から段階的に実施された日本文化の開放措置等により、両国の各種交流は飛躍的に拡大することとなった。日本においても韓国映画など韓国文化が広く親しまれ、両国国民の往来も年間300万人を大幅に越えている。

(2) 2002年はサッカー・ワールドカップ日韓共催が成功を収めるとともに、「日韓国民交流年」として、年間を通じ、かつてない規模で両国間の交流が活性化した。また、2003年より「日韓共同未来プロジェクト」がスタートし、青少年、スポーツ及び草の根交流について年間1万人超の交流を目標に、日韓政府が共同で取り組んでいる。

(3) 昨年6月の盧武鉉大統領訪日の際に「日韓首脳共同声明」が発出され、2005年を「日韓友情年2005」とし、各種交流事業を行うこととなった。

(4) 本年1月より、韓国政府による第4次日本大衆文化開放が実施され、映画、レコード（CD、テープなど）及びゲームソフト販売が全面開放された。また放送に関しても、ケーブル・衛星放送は若干の制限は残っているものの大幅に開放され、また地上波放送も一部開放された。劇場用アニメは2006年に開放される予定である。

(5) 本年3月1日より、韓国人修学旅行生に対する査証免除が実施されている。

経済関係等

(1) 日韓貿易

1) 韓国の対日貿易額（単位：億ドル）

輸出 173億ドル（2003年 韓国貿易協会）

輸入 363億ドル（2003年 韓国貿易協会）

2) 主要品目

輸出 石油製品、一般機械、電子部品、鉄鋼製品

輸入 一般機械、電子部品、鉄鋼製品、化学製品、精密機械

(2) 我が国からの直接投資 5.4億ドル（2003年 産業資源部）

(3) 在留邦人数 19,685名（2003年10月1日現在。内訳：長期滞在
者19,630名、永住者55名）

(4) 在日韓国人数 61.4万名（在日朝鮮人を含む。2003年12月末現
在）

■戦後50年・歴史認識

村山内閣総理大臣談話

「戦後50周年の終戦記念日にあたって」（いわゆる村山談話）

平成7年8月15日／1995

先の大戦が終わりを告げてから、50年の歳月が流れました。今、あらためて、あの戦争によって犠牲となられた内外の多くの人々に思いを馳せる
とき、万感胸に迫るものがあります。

敗戦後、日本は、あの焼け野原から、幾多の困難を乗り越えて、今日の
平和と繁栄を築いてまいりました。このことは私たちの誇りであり、その
ために注がれた国民の皆様1人1人の英知とたゆみない努力に、私は心か
ら敬意の念を表わすものであります。ここに至るまで、米国をはじめ、世
界の国々から寄せられた支援と協力に対し、あらためて深甚な謝意を表明
いたします。また、アジア太平洋近隣諸国、米国、さらには欧州諸国との

間に今日のような友好関係を築き上げるに至ったことを、心から喜びたいと思います。

平和で豊かな日本となった今日、私たちはややもすればこの平和の尊さ、有難さを忘れがちになります。私たちは過去のあやまちを2度と繰り返すことのないよう、戦争の悲惨さを若い世代に語り伝えていかなければなりません。とくに近隣諸国の人々と手を携えて、アジア太平洋地域ひいては世界の平和を確かなものとしていくためには、なによりも、これらの諸国との間に深い理解と信頼にもとづいた関係を培っていくことが不可欠と考えます。政府は、この考えにもとづき、特に近現代における日本と近隣アジア諸国との関係にかかわる歴史研究を支援し、各国との交流の飛躍的な拡大をはかるために、この2つを柱とした平和友好交流事業を展開しております。また、現在取り組んでいる戦後処理問題についても、わが国とこれらの国々との信頼関係を一層強化するため、私は、ひき続き誠実に対応してまいります。

いま、戦後50周年の節目に当たり、われわれが銘記すべきことは、来し方を訪ねて歴史の教訓に学び、未来を望んで、人類社会の平和と繁栄への道を誤らないことであります。

わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に誤り無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします。また、この歴史がもたらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を捧げます。

敗戦の日から50周年を迎えた今日、わが国は、深い反省に立ち、独善的なナショナリズムを排し、責任ある国際社会の一員として国際協調を促進し、それを通じて、平和の理念と民主主義とを押し広めていかなければなりません。同時に、わが国は、唯一の被爆国としての体験を踏まえて、核兵器の究極の廃絶を目指し、核不拡散体制の強化など、国際的な軍縮を積極的に推進していくことが肝要であります。これこそ、過去に対するつぐないとなり、犠牲となられた方々の御霊を鎮めるゆえんとなると、私は信じております。

「杖るは信に如くは莫し」と申します。この記念すべき時に当たり、信義を施政の根幹とすることを内外に表明し、私の誓いの言葉といたします。

■「慰安婦」問題

元慰安婦の方々に対する 内閣総理大臣の手紙

拝啓

このたび、政府と国民が協力して進めている「女性のためのアジア平和国民基金」を通じ、元従軍慰安婦の方々へのわが国の国民的な償いが行われるに際し、私の気持ちを表明させていただきます。

いわゆる従軍慰安婦問題は、当時の軍の関与の下に、多数の女性の名誉と尊厳を深く傷つけた問題でございました。私は、日本国の内閣総理大臣として改めて、いわゆる従軍慰安婦として数多の苦痛を経験され、心身にわたり癒しがたい傷を負われたすべての方々に対し、心からおわびと反省の気持ちを申し上げます。

我々は、過去の重みからも未来への責任からも逃げるわけにはまいりません。わが国としては、道義的な責任を痛感しつつ、おわびと反省の気持ちを踏まえ、過去の歴史を直視し、正しくこれを後世に伝えるとともに、いわれなき暴力など女性の名誉と尊厳に関わる諸問題にも積極的に取り組んでいかなければならないと考えております。

末筆ながら、皆様方のこれからの人生が安らかなものとなりますよう、心からお祈りしております。

敬具

平成13(2001)年

小泉 純一郎

■ 総理の手紙・韓国語翻訳

タフケ□。チ、コホソハ アケケホタフ エル スヤイイ 又□ ツヌマソウ テ° チ□ マー□ タヨエツ。コソウシコタサ。タアヌム
。。セニステセニ□ ヲアケケホア箆ソ。サタサ。ナ□ リ。チセアコタアセネコホキホシユ。ネ□ ◎オヌナ。コミオ魎イ。。
ソ□ ヨ。。ウエカ□ 又。。アケケホタ□ ホ。。サ隣ヒクヲ。ヌ・ク□ マー□ レ。。ヌユエマエル。

タフク・ケル。チセアコタアセネコホケヨチヲエツ。。エ鄂テ。。アク。。タマコサアコタヌ。。一□ ウヌマソ。。ケケタコ。。ソウ
シコオ鯨ヌ。。ク□ ケソハ。。チクセ□ コソ。。ア□ コ。。サ□ ウクヲ。。タヤネ□ 。ケヨチヲタヤエマエル。タ□ ツ。。
タマコサアケウサー「テムクヨエ□ ナタクキホシユ。。エルステ。。ヌムケ□ 。シメタア。。チセアコタアセネコホキホシユ。。シ□ 。クケ
タコ。。一□ □ サ。。一□ 一□ 。スノスナセ邵鯨。。一ノテト。。ト。タヌヌマア筍。セ□ チソ□ 。サ□ ウクヲ。。タヤタク
スナ。。コミオ魎イ。。チ□ ノタクキホ。。サ隣ヒソハ。。ケンシコタヌ。。カ貊サ。。クサセクオ鯉ヨ一□ レ。。ヌユエマエル。

ソ□ ヨエツ。。一□ ナタヌ。。ケオーナソ□ クキホコホナハオオ。。ケフキ。クヲ。又籊ム。。テ・タモタクキホコホナハ。。オオ
クチト。。シ□ ツ。。セ□ タエマエル」ヨソ□ ヨウエカ□ ホシユエツ。。オオタヌタ□ ホ。。テ・タモタサ。。ナ□ イヌマク鯨ユ
。。サ隣ヒソハ。。ケンシコタヌ。。カ貊。。タヤ「ヌマク違。一□ ナタヌ。。ソエサ邵ヲ。。チ□ テヌマク違。タフーハタサ

ソケソハ チクセ□ コソ。一□ テオネ ケヨチヲオ鯨。エ□ リシユオオ タ□ リタ□ クキホ タモヌリゼ° ヌムエル一□ サ◎ー「
ヌユエマエル。

ウ。タクキホ ソウキッコミタヌ セユタクキホタヌ タホサ◎タフ □ ツヌマステア箆ヲ テ貊ノタクキホ □ ツケルタヤエマ
エル。

- 豎ク

□ ワ簪ミメヨハネ□ う簽° 朮 盖□ 粹□ 一ハ

■日韓共同宣言／1998

— 21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ —

1. 金大中大韓民国大統領夫妻は、日本国国賓として1998年10月7日から10日まで日本を公式訪問した。金大中大統領は、滞在中、小渕恵三日本国内閣総理大臣との間で会談を行った。両首脳は、過去の両国の関係を総括し、現在の友好協力関係を再確認するとともに、未来のあるべき両国関係について意見を交換した。

この会談の結果、両首脳は、1965年の国交正常化以来築かれてきた両国間の緊密な友好協力関係をより高い次元に発展させ、21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップを構築するとの共通の決意を宣言した。

2. 両首脳は、日韓両国が21世紀の確固たる善隣友好協力関係を構築していくためには、両国が過去を直視し相互理解と信頼に基づいた関係を発展させていくことが重要であることにつき意見の一致をみた。

小渕総理大臣は、今世紀の日韓両国関係を回顧し、我が国が過去の一時期韓国国民に対し植民地支配により多大の損害と苦痛を与えたという歴史的事実を謙虚に受けとめ、これに対し、痛切な反省と心からのお詫びを述べた。

金大中大統領は、かかる小渕総理大臣の歴史認識の表明を真摯に受けとめ、これを評価すると同時に、両国が過去の不幸な歴史を乗り越えて和解と善隣友好協力に基づいた未来志向的な関係を発展させるためにお互いに努力することが時代の要請である旨表明した。

また、両首脳は、両国国民、特に若い世代が歴史への認識を深めることが重要であることについて見解を共有し、そのために多くの関心と努力が払われる必要がある旨強調した。

(以下大幅略)

日本国内閣総理大臣　小渕恵三　　大韓民国大統領　　金大中
1998年10月8日、東京

■盧武鉉大統領訪日／共同声明 2003.6

日韓首脳共同声明

－平和と繁栄の北東アジア時代に向けた日韓協力基盤の構築－

盧武鉉大韓民国大統領夫妻は、日本国国賓として、2003年6月6日から9日まで日本を公式訪問した。盧武鉉大統領は、滞在中、小泉純一郎日本国内閣総理大臣との間で首脳会談を行った。

両首脳は、1998年10月に発表された「日韓共同宣言－21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」の精神に従い、日韓両国が、過去の歴史を見据え、これを踏まえつつ、21世紀における未来志向の両国関係発展のため共に前進していかねばならないとの認識を共にした。

両首脳は、日韓両国が2002年サッカー・ワールドカップ共同開催の成功と「日韓国民交流年」を通じて醸成された日韓友好親善の気運を維持しながら、信頼と友情を絶え間なく深化させ、両国関係を一層高いレベルへと発展させていくとの決意を共にした。

1. 小泉総理は、朝鮮半島の恒久的な平和定着及び北東アジア地域の共同繁栄を成し遂げるための韓国政府の「平和繁栄政策」に対する支持を表明し、盧武鉉大統領は、日朝平壤宣言に基づき核、ミサイル問題及び拉致問題等の日本側の関心事項を解決し北東アジア地域の平和と安定に資する形で日朝国交正常化を実現するという日本政府の基本方針を支持した。

2. 両首脳は、北朝鮮の核問題は、朝鮮半島のみならず、北東アジア地域の平和と安定及び国際的な核不拡散体制にとって深刻な脅威であるという点で認識を共有した。

(1) これと関連し、両首脳は、北朝鮮の核保有は勿論、いかなる核開発プログラムも容認しないということ、この問題を平和的、外交的に解決しなければならないということに合意した。

(2) 両首脳は、北朝鮮の核問題の平和的解決のため、北朝鮮がこれ以上事態を悪化させる行動をとらないよう強く求めた。これに関連し、両首脳は、5月14日及び5月23日にそれぞれ行われた韓米首脳会談及び日米首脳会談で合意した原則を再確認し、今後、日韓間で連携を強化していくことにした。

(3) また、両首脳は、北朝鮮の核兵器プログラムが検証可能かつ不可逆的な方法で廃棄されなければならないという点を強調した。

(4) 両首脳は、北朝鮮の核問題を平和的に解決できるという確信を表明し、そのために今後とも日韓米3ヶ国が緊密に連携し、中国、ロシア等関係国を含む国際社会と引き続き協力していくことを確認した。更に、両首脳は、北朝鮮の核問題等懸案問題が平和的、包括的に解決され、北朝鮮が責任ある国際社会の一員となれば、北朝鮮に対し国際社会の広範な支援が可能となるであろうことを強調した。

(5) また、両首脳は、4月23日～25日の間北京で開催された米中朝協議が北朝鮮の核問題の解決に向けた対話の第一歩として有用であったということにつき認識を共にし、同対話のための中国の役割を歓迎した。

(6) 両首脳は、北朝鮮の核問題の解決に向けて早期に後続の会談が再開され、対話のモメンタムが維持される必要があるということに意見を共にし、北朝鮮に関連する諸問題を包括的に解決するため日韓両国が参加する形の多国間対話のプロセスに対する強い期待を表明した。

3. 両首脳は、日韓両国が共有する自由・民主主義と市場経済の理念に基づき、平和と繁栄の北東アジア時代を切り開き、明るく豊かな未来を共に築いていくため、諸問題にわたり緊密に協力していくこととした。

(1) 日韓自由貿易協定(FTA)の締結は、両国間の貿易を増進させ、双方の競争力を強化し、東アジアひいては世界経済の成長に貢献し、地域の経済連携を促進する上でも大きな意義がある。このため、両首脳は、日韓FTA共同研究会において、包括的なFTAを締結する必要性について共通認識が形成されていることに注目し、同共同研究会が有意義な成果を挙げるよう期待する。日韓両国は、これを踏まえ、早期にFTA締結交渉を開始するよう努力する。また、日韓FTAの推進に友好的な環境を作っていくため一層努力する。

(2) 日韓両国のパートナーとしての経済協力関係発展のためには、両国間の貿易が拡大の方向に進むことが望ましいことであり、このため産業協力が重要であることを認識する。また、日韓投資協定締結を機に投資が双方向で一層拡大することを期待し、これを加速するため互いに努力する。

(3) 両首脳は、世界自由貿易体制の維持・強化が地域及び世界の繁栄にも資するとの共通認識の下で、WTOドーハ開発アジェンダ交渉等におい

て協力していく。

(4) 日韓両国は、グローバルな問題を取り扱う国際的な枠組み、あるいは多様な地域協力の枠組み、更には国家レベルにおいて、環境問題や、国際テロ、海賊、麻薬・覚醒剤の不法取引等国家が介入した違法行為及び国際組織犯罪等、地球規模の多様な問題等への対策につき引き続き積極的に協力していく。

4. 両首脳は、未来に向けた日韓両国間の協力を強化していくための基盤は、次世代を担う若者を中心とした各界各層間の深い相互理解と温かい友情、そして活発な人および文化の交流であることを認識し、それらを拡大・深化させていくために、これまでの協力関係を維持・発展させていくこととし、特に以下の点につき、共に努力してくとこととした。

(1) 両国民の各界各層間の相互理解と友情の増進

(イ) 日韓国交正常化40周年を記念して、2005年を「ジャパン・コリア・フェスタ2005」とし、両国間の文化、学術等諸分野における各種の事業を共同で開催し、日韓関係の次世代を担う若者を始めとした国民各界各層間の相互理解と友情を増進する機会とする。

(ロ) 「日韓共同未来プロジェクト」をより活発に推進し、現在年間1万人規模を目標としている青少年・スポーツ交流を更に拡大していく。そのような観点から、2005年から日韓高校生交流プログラムを拡大する。

(ハ) 日韓フォーラムを始めとした日韓間の知的交流の一層の発展を図っていく。

(ニ) 政治、経済、学術、文化等あらゆる分野における次世代指導者間の相互交流を促進する。

(2) 日韓間の一日生活圈形成に向けた努力

(イ) 日韓双方は、早期に韓国国民に対する査証免除を実現すべく更に努力する。また、日本側は、そのための新たな一歩として、韓国国民のうち修学旅行生等に対する査証免除を実現し、また再度期間限定査免を行うことを検討する。

(ロ) 金浦（キンポ）空港－羽田間航空便の早期運行を推進する。

(3) 日韓交流の拡大

(イ) 文化交流を活発化させるため、韓国は日本大衆文化開放を拡大する。

(ロ) 双方向の観光交流等の更なる拡大に向け、双方の外国人旅行者拡大

のためのキャンペーンに関し、より緊密な協力関係を構築する。

(ハ) 現在交渉が進められている社会保障協定及び関税相互支援協定をできるだけ早期に締結するよう双方が努力していく。相互承認については、これまでの専門家の作業状況を踏まえ、日韓FTA共同研究会の帰趨も見極めつつ、交渉開始に必要な作業を一層加速化する。

(ニ) 日韓両国は、それぞれ相手国で「Japan Week」と「Korea Week」の開催を通じて、地方間交流を増進していく。

(ホ) 「日韓新世紀交流プロジェクト」による教員招へい事業、スポーツ交流事業、日本語・韓国語の相互学習支援のための事業等を引き続き推進していく。

(ヘ) 文化財分野における「人」の交流、有・無形文化財交流等を活性化する等の交流・協力を強化していく。

5. 両首脳は、今後、外相会談等を通じて定期的に本共同声明の推進状況を点検していくこととした。

■日朝平壤宣言

平成14年9月17日／2002

小泉純一郎日本国総理大臣と金正日朝鮮民主主義人民共和国国防委員長は、2002年9月17日、平壤で出会い会談を行った。

両首脳は、日朝間の不幸な過去を清算し、懸案事項を解決し、実りある政治、経済、文化的関係を樹立することが、双方の基本利益に合致するとともに、地域の平和と安定に大きく寄与するものとなるとの共通の認識を確認した。

1. 双方は、この宣言に示された精神及び基本原則に従い、国交正常化を早期に実現させるため、あらゆる努力を傾注することとし、そのために2002年10月中旬に日朝国交正常化交渉を再開することとした。

双方は、相互の信頼関係に基づき、国交正常化の実現に至る過程においても、日朝間に存在する諸問題に誠意をもって取り組む強い決意を表明した。

2. 日本側は、過去の植民地支配によって、朝鮮の人々に多大の損害と苦痛を与えたという歴史の事実を謙虚に受け止め、痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明した。

双方は、日本側が朝鮮民主主義人民共和国側に対して、国交正常化の後、双方が適切と考える期間にわたり、無償資金協力、低金利の長期借款供与及び国際機関を通じた人道主義的支援等の経済協力を実施し、また、民間経済活動を支援する見地から国際協力銀行等による融資、信用供与等が実施されることが、この宣言の精神に合致すると基本認識の下、国交正常化交渉において、経済協力の具体的な規模と内容を誠実に協議することとした。

双方は、国交正常化を実現するにあたっては、1945年8月15日以前に生じた事由に基づく両国及びその国民のすべての財産及び請求権を相互に放棄すると基本原則に従い、国交正常化交渉においてこれを具体的に協議することとした。

双方は、在日朝鮮人の地位に関する問題及び文化財の問題については、国交正常化交渉において誠実に協議することとした。

3. 双方は、国際法を遵守し、互いの安全を脅かす行動をとらないことを確認した。また、日本国民の生命と安全にかかわる懸案問題については、朝鮮民主主義人民共和国側は、日朝が不正常な関係にある中で生じたこのような遺憾な問題が今後再び生じることがないように適切な措置をとることを確認した。

4. 双方は、北東アジア地域の平和と安定を維持、強化するため、互いに協力していくことを確認した。

双方は、この地域の関係各国の間に、相互の信頼に基づく協力関係が構築されることの重要性を確認するとともに、この地域の関係国間の関係が正常化されるにつれ、地域の信頼醸成を図るための枠組みを整備していくことが重要であるとの認識を一にした。

双方は、朝鮮半島の核問題の包括的な解決のため、関連するすべての国際的合意を遵守することを確認した。また、双方は、核問題及びミサイル問題を含む安全保障上の諸問題に関し、関係諸国間の対話を促進し、問題解決を図ることの必要性を確認した。

朝鮮民主主義人民共和国側は、この宣言の精神に従い、ミサイル発射の

モラトリアムを2003年以降も更に延長していく意向を表明した。

双方は、安全保障にかかわる問題について協議を行っていくこととした。

日本国

総理大臣

小泉 純一郎

2002年9月17日

平壤

朝鮮民主主義人民共和国

国防委員会 委員長

金 正日

(Provisional Translation)

Japan-DPRK Pyongyang Declaration

Japanese Prime Minister Junichiro Koizumi and Chairman Kim Jong-Il of the DPRK National Defense Commission met and had talks in Pyongyang on September 17, 2002.

Both leaders confirmed the shared recognition that establishing a fruitful political, economic and cultural relationship between Japan and the DPRK through the settlement of unfortunate past between them and the outstanding issues of concern would be consistent with the fundamental interests of both sides, and would greatly contribute to the peace and stability of the region.

1. Both sides determined that, pursuant to the spirit and basic principles laid out in this Declaration, they would make every possible effort for an early normalization of the relations, and decided that they would resume the Japan DPRK normalization talks in October 2002.

Both sides expressed their strong determination that they would sincerely tackle outstanding problems between Japan and the DPRK based upon their mutual trust in the course of achieving the normalization.

2. The Japanese side regards, in a spirit of humility, the facts of history that Japan caused tremendous damage and suffering to the people of Korea through its colonial

rule in the past, and expressed deep remorse and heartfelt apology.

Both sides shared the recognition that, providing economic co-operation after the normalization by the Japanese side to the DPRK side, including grant aids, long-term loans with low interest rates and such assistances as humanitarian assistance through international organizations, over a period of time deemed appropriate by both sides, and providing other loans and credits by such financial institutions as the Japan Bank for International Co-operation with a view to supporting private economic activities, would be consistent with the spirit of this Declaration, and decided that they would sincerely discuss the specific scales and contents of the economic co-operation in the normalization talks.

Both sides, pursuant to the basic principle that when the bilateral relationship is normalized both Japan and the DPRK would mutually waive all their property and claims and those of their nationals that had arisen from causes which occurred before August 15, 1945, decided that they would discuss this issue of property and claims concretely in the normalization talks.

Both sides decided that they would sincerely discuss the issue of the status of Korean residents in Japan and the issue of cultural property.

3. Both sides confirmed that they would comply with international law and would not commit conducts threatening the security of the other side. With respect to the outstanding issues of concern related to the lives and security of Japanese nationals, the DPRK side confirmed that it would take appropriate measures so that these regrettable incidents, that took place under the abnormal bilateral relationship, would never happen in the future.

4. Both sides confirmed that they would co-operate with each other in order to maintain and strengthen the peace and stability of North East Asia.

Both sides confirmed the importance of establishing co-operative relationships based upon mutual trust among countries concerned in this region, and shared the recognition that it is important to have a framework in place in order for these regional countries to promote confidence-building, as the relationships among these countries are normalized.

Both sides confirmed that, for an overall resolution of the nuclear issues on the

Korean Peninsula, they would comply with all related international agreements. Both sides also confirmed the necessity of resolving security problems including nuclear and missile issues by promoting dialogues among countries concerned.

The DPRK side expressed its intention that, pursuant to the spirit of this Declaration, it would further maintain the moratorium on missile launching in and after 2003.

Both sides decided that they would discuss issues relating to security.

Prime Minister of Japan

Junichiro Koizumi

Chairman of the DPRK National Defense Commission

Kim Jong-Il

September 17, 2002

Pyongyang

財団法人女性のためのアジア平和国民基金
(アジア女性基金)

ASIAN WOMEN'S FUND

102-0074 東京都千代田区九段南 2-7-6

マニユライフプレイス九段南 4 階

<http://www.awf.or.jp>

info@awf.or.jp